
神様と私

聖なる写真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様と私

【Nコード】

N9512D

【作者名】

聖なる写真

【あらすじ】

サボリ上等イジメ大好きの最低野郎西上凰輝。そんな彼の生活に入り込んでしまったが運のつき…これは神様や悪魔がどSな最強野郎に虐められる…そんな話「さて…どういたぶってくれようか」「ひ、ひどい！私神様なのに！！」……哀れ（事情により強制完結しました。詳しくは最後のお詫びとお知らせをご覧ください。）

其の壱：彼と出会ったが運のつき（前書き）

処女作となります。

感想注意等がありましたらください。

其の壱：彼と出会ったが運のつき

「ひまだなあ…」

俺は欠伸をしながら呟いた。

校庭の外れにある大樹が作る影は広く、 絶好のさば…昼寝ポイントだ。

平和、 裏返せば退屈

俺は正直変化がある毎日が好きなのでこの退屈な日々が正直嫌いだ

「3時間目…まだ時間あるが紗^{すず}でもいじめ…弄るか」

ヒュウウウウ…

ん？ なんだ？

ドス！！

「グホオ！！」

「ご、ごめんなさい！」

上から落ちてきたのは15、6歳位の少女
髪は紫のショートカット、 背中に小さく白い羽、 コスプレってやつ？

どっちにしろサボりはいかんよサボりは

あ、 俺もか。

「あ、 あの…」

「何？」

「玉藻神社って何処ですか？」

玉藻神社っていうのは玉藻町の唯一の神社でここ西玉藻の名物でもある。

「参拝か？」

「いえ」

「巫女さん見に？」

「だったらまだ学…」

「違います」

軽くからかうとその少女は頬を膨らませた
すっげえガキっぽい…

「じゃあ何なんだよ」

「私そこに住むことになった神様なんです」

「……あゝそろそろ戻るか（棒読み）」

「え？ちよ…ちよつと待って下さい」

知るか

神様なら自分の神社くらい覚えとけ

俺は高校へ歩きだす。 紗にこの事話してみつか

——玉藻高校2年3組——

「あれ？^{おつき}凰輝どうしたのさ。 4時間目もさぼるって言ってたじゃん」

「いや、頭が逝っちゃった娘がいてさ、 なんか関わりたくないから逃げてきた。」

俺が凰輝、そして俺と話している巫女が紗という。
え？なんで高校に巫女さんがいるって？

簡単だろ

紗——赤野紗の実家は玉藻神社でここ秋西高校は私服有りだから

「逝っ…相変わらず毒舌だねえ
で？　どんなこと言ってたのさ」

「神様なんだとさ」

「ハア？」

呆れ顔で聞き返す紗、俺も同意見だ
まあ、そんなこんなで無事学校も終わり俺は帰路に着いた。

——西上家（凰輝の家）——

あー我が家だ我が家
誰もいないけどお決まりのセリフを忘れちゃいけない

「ただいま」

「あ、お帰りなさい」

ドゴー！！↑蹴りの音

ハイ、お決まりのオチ

「い、痛い…」

「黙れ、不法侵入者」

さっきの精神障害少女が警察よぶぞ。

「とういかなんでお前が俺ん家知っているんだよ」
「神様ですから」

「えーと、この近くに精神病院あったかな？」

「し、信じて下さいよ」

「信じれるか、アホ

証拠を見せる。証拠を」

「…分かりました」

よし、アホなことした瞬間に取り押さえて

病院送りだ

どうでもいい決意(?)をした俺は少女の様子を見る

軽く息を整え、窓の外をにらみ始めた

すると、さっきまで雲ひとつないほどの晴天だったのに急に曇り

だした

そして…

「神様サンダー!!」

カツ!ゴロロオオオオン!!

――雷が落ちた

「すげえ…今のが超能力…」

「いやいやいや!!神術です!雷神の力です!!」

「どーでもいい」

「見せるって言ったのあなたじゃないですか!？」

「お前のセリフがどーでもいい」

「ええ!?!ひどい!?!」

そんなの百も承知

「まあ、お前が神様だとしてだ」

「ホントに神様なんですけど…」

「何でここに来た？」

「実は……………」

ドス！！↑殴打音

「い、痛い！！何するんですか！？」

「はよしゃべれ」

「お、鬼！！悪魔！！」

「えーと木刀木刀」

「ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい。」

土下座する自称神様。

神としてのプライドあんのか？

で、話を聞いたところ

実は神としてはまだ未熟で修行するために青界（じい）にきたのだとか

で、こいつは玉藻神社でお世話になるはずが見事なまでに道に迷ったらしい

とりあえず紗に電話したらマジだったので今日はもう暗いし家で預かることにした。

展開速すぎ？ 気にスナ

気にしたら負けさ

さて、夕食でも作るか。

「今日のご飯はなんですか？」
「キムチ鍋」

え？ 時期的に遅すぎる？
いいじゃん。好きなんだし。

「え——！！！！辛い物嫌い！！甘い物がいい！！」
「……………」
「甘い物〜！！甘い物〜！！甘い物〜！！」
「じゃかましいわ！！！！」

あ、やべ
キムチ投げてしまった。

「か、辛い〜〜〜〜！！」

……………結論。

この神は大して怖くない。
てかいたぶりがいがあるそう。

「ひどい！ ひどい！」
「お前名前は？」
「へ？」

そういえば聞いてなかった。
もついいか神モドキで

「雷華らいかです」

「OK。神モドキ」

「雷華ですって」

「冷蔵庫から豚肉取って」

「あ、はい」

その晩。俺はキムチ鍋を嫌がる雷華の口に無理矢理押し込みまくった。

あゝ楽し。

「ひ…ひどい！

鬼！！ 悪魔！！ 外道！！」

失礼なせめて魔王と言ってほしいね。

其の壱：彼と出会ったが運のつき（後書き）

悪魔はまだ出てきません。

其の参ぐらいには・・・（遅！）

其の弐：神様よりも拷問狂（前書き）

第二話投稿！！

其の貳：神様よりも拷問狂

はい。翌日。

俺は雷華を連れ玉藻神社へ向かった。

現在午前5時3分

玉藻神社の外れに赤野家がある。

俺は寝ている雷華を殴り起こし、
が、開かない
赤野家のドアを開けようとする。
鍵がかかっているんだろう。

「開かないでしょ」

まだ午前5時ですよ

当然じゃないですか」

「黙ってる。こういうときはな……」

ガチャ

「合鍵を使えばいい」

「えええええ！？ 何で持ってるんですか！？」

「気にするな」

「いやいやいや！ 気にしますってば！！ どうして持ってるんですか！？」

「今日の晩飯は……」

「ごめんなさいごめんなさい。私が悪うございました」

雷華を黙らせた俺はさらに（勝手に）先に進む

そしてついた。 紗の部屋

開ける。 寝ている紗に近づく。 耳元に顔を近づけ……

「Good morning!!!!!! Ms・Suzu!!!!!!
!」

「ひゃああああアアアアアア!?!?」

ナイスリアクション紗。

いやあこういうのって止められない。

「朝っぱらから五月蠅い(うるさい)のよ!!!!!!」
「甘ああい!!!」

ヴォン!!!!↑空振り

ふっ、まだまだ甘いな。

…ってあれ? なんで雷華顔面蒼白なんだ?

…で本題。

「こいつで間違いないな?」

「うん…多分」

「多分!?!」

「なんで多分なんだ?」

「いや…夢で見ただけだから…」

適当だな。おい

よく信用したなあ

まあ俺が知りたいのはそんなことじゃない。

「こいつ俺ん家においていい?」

「ああ、いいよ」

「決断はやっ!!!」

もう少し悩むとかしてくださいよ!!」

「だって断つたりしたら拷問するでしょ？」

「するが？」

「ええええええええええ!!??」

否定してください!!」

「やるんだし」

「私は彼と10年以上の付き合いよ

やることはだいたい見当つくし」

まだなんか雷華がブチブチ言っていたのでキャメルクラッチかまし
ながら次の話へ

「ねえ、凰輝？ 凰輝にとって雷華かのじょって…何？」

「く、苦し…」

「え？ そんなこと決まっているだろ」

「え…？」

「ちようどいい玩具おもちゃ」

「だよね」

「ええええええええええ!!?? ひどい!!」

なんだと思っただ雷華よ。

昨日のこと思い出せば連想できるだろ

「い、いや…あれは、て、照れ隠しかな、と…」

「逆えびがくめえ!!」

「ぎいやああああああああああ!!」

「…頑張つて」

「か、変わってください…」

「…ふつ、何年彼と関わりあったと思っているの…」

「な、なんかごめんなさい…」

なぜ謝る？

そりゃあたしかに4、5回くらいトラウマになるようなことはした
たが。

ん？ おい読者。 なんだその冷めた目線は？

…あ、 そういえば今何時？

… 8時12分

「やばああい！！」

「急がないとな」

「ふえ？ な、何がですか？」

「よし、 黙ってな」

ゴス！！ ドカ！！ バキヤ！！

「…あいからわず、 ひどいねえ…」

「お前も同じ目に遭いたいのか？」

「え、 遠慮します…」

…その後、 玉藻神社に雷華を置いて、 俺達学校へ急いだ

放課後、 迎えに行ったら、 ブチブチ文句いていたのでシャイ
ニング・ウィザード叩き込んで連れて帰った

その時、 紗が憐れむような視線を送っていたので、 正拳突きを
鳩尾に叩き込んでやった

え？ 今日の晩飯？

激辛カレーだけど？ 何か？

其の式：神様よりも拷問狂（後書き）

ここで主人公・凰輝紹介
ややパラメーターつきで

・西上凰輝
にしがみおうき

年齢 17 歳

性別 男

学力 上

運動 人外

得意 武術・拷問

苦手 ホモ

一応、本編の主人公。

家に一人暮らしだが、さびしいと思ったことはないらしい。
どSで、他人の弱点をつくことが大好き

両親は昔死に、姉がいるのだが只今武者修行中だとか

・・・ホントに主人公？

其の参：悪魔も彼には適わない（前書き）

まじで感想ください・・・

「ついでだついで

…で、せめて選ばせてやる。

肉体的苦痛か、精神的苦痛…さあどっちがいい!?」

逃げ道無し!?

普通は拷問ありかなしかじやないのか!?

ってかなんか怖い…

「え、あの…実は…」

「あゝ喋るな喋るな

今から拷問するからそっちの方に元気回せ」

「は、話を聞いてええええ!!!!!!」

い、1時間か、掛けて…やっと話を聞いて貰えた…

アタシの名前はファイア

神とは反対に属する悪魔という者

司るものは炎

雷華と同じように修行の名目で青界へ来た。

で、ここ西上家でお世話になるはずだったのに…

「まさか伝わってなかったとはねえ…」

凰輝から受け取った青汁ジュースを啜りながらアタシはそう呟かずにはいらなかった。一応夢で告げたはずなのに…

あ、ちなみに拷問は何とか回避出来ました…

雷華は青汁ジュースを苦い苦い言ってたので凰輝に無理矢理飲まされていきます…哀れとは思わない。けけついい気味だ。

「…で? どうすんだ?」

「いや…凰輝がいいならここに住むけど…」
「よし、OK」

決断はやっ!!

でも、なんか凰輝が笑ってる気がする…
うん。 気のせい気のせい

「えゝ!! 嫌だ!! 嫌だ!! 何で悪魔と一緒に住まなきゃいけないのさ!!」

「フィア…お前辛いものは好きか…?」

「…大好きだけど?」

「よゝし。今日は辛いもの尽くしていくぞゝ」

「わがままばつか言っでごめんなさい。ごめんなさい。ごめつ
…!!」

ドカァ!!

あゝあ。 蹴られた。 蹴られた。

結局今晩は辛いもの尽くしだった。

あゝ美味しかった。

雷華はなぜかものすごい苦しそうにしてたけど。

其の参：悪魔も彼には適わない（後書き）

一応、ヒロイン（のはず・・・）雷華の紹介

・雷華^{らいか}

年齢 16歳

性別 女

神力 中

運動 下

得意 神術

苦手 鳳輝

一応神様。雷を操る雷神で、まだまだ未熟なため

青界（今俺たちがいるところ）に来た

本来、玉藻神社でお世話になるはずが
間違つて西上家へ来てしまい。

鳳輝の玩具にされる。

実は本人も自覚していないある力があるらしいのだが・・・

あ、なんか鳳輝よりもヒロインっぽい

其の肆：彼にとって学校とは

「あの…鳳輝さん…」

「何？」

「ずっと前から気になっていたんですけど…」

皆さんこんにちわ。 雷華です

今は鳳輝さんやフィアと一緒にゴロゴロしてます

「何である時、 あんなに紗さん焦ってたんですか？」

あ、 あの時っていうのは『其の式』でのことです

「学校に遅れそうだったから」

「学校？」

「…知らんのか？」

鳳輝さんは意外、 という風に目を開きました

…あれ？ 私何か変なこと言いました？

そもそも学校って何ですか？

「アタシも知らないぞ

学校って何だ？」

「…学校っていうのは………」

………何でそこで黙るんですか

………いい加減答えてくれませんか？

「いろいろするところ？」

「説明が不十分過ぎますし、聞かないで下さい」
「るっせい、ごみ共」

逆ギレですか!?

「逆ギレしてんじゃねえよ」

「…Killing times…」

ファイアアアアアアア!?

なにその突っ込み!?

凰輝さんムチャクチャ怒っていますじゃん!!

何なのKilling timesって!?

教えて!! 教えてえ!! 凰輝さああああん!!!

ガチャ

「凰輝く遊びに来たよ」

ああ!! 紗さんNice timing!!

……………ガチャ

ええええええええええええ!!?!?

に、逃げないでえ!!

カアム バアアアツク!!!

くく三時間後くく

「お、紗入れ」

「あ、うん」

あゝびびった

凰輝がKilling モードに入ってたんだもん

あ、Killing モードっていうのは所謂マジ切れ
この状態になると台詞が全部英語になるし言葉通じないし
……あゝやっぱり二人共ぼろぼろ…何が原因だったんだろ

「何が原因なの？」

「す、紗さん…が…学校…って何ですか？」

あゝ学校ね

そっちの世界では無いんだ

「学校は…いろいろ学ぶところ

集団生活をするために同年代の人々が同じ場所で日常を過ごす場所」

「後、 気に入らない奴を叩きのめす場所」

違うから

ほら、二人が怯え……

怯えてない！！

ちょ…雷華ちゃんそんな興味津々な目でメモしないで！！ 違うから！！

フィアちゃんも尊敬の眼差し送らないで！！ 私そんなことしてないから！！

「行きた〜い！！」

「アタシも〜！！」

「ふ、二人共違うから！！

叩きのめす場所じゃないから学校は！！」

でも二人は行きたいと

まあいいか、 ちよつとぐらい

…でも私はその時知らなかった

この決断が間違いだということを

悲劇の始まりだということを

ただ、 彼女達のことをどうやって誤魔化そうか考えるので必死だった

其の肆：彼にとって学校とは（後書き）

最近、ブログを開きました。

タイトルは『聖なる写真の写真立て』

主に二次創作系の小説を書いていく予定です

まだ何も書いてはありませんが・・・

そちらもよろしく願います！！

後、コメントくださいお願いします。

其の伍：彼は学校でも容赦なし・前編（前書き）

後書きにちょっとした発表が。

其の伍：彼は学校でも容赦なし・前編

……はじめまして

なみまちあおば

並町青葉といいます

今日は凰輝くんが『面白いもの』を連れてくるというので待っています

どうでもいいのですが、彼が着けている骸骨のネックレスよりも、私が着けている十字架のネックレスの方がカッコいいと思いませんか？

え？ 彼がそんなネックレスを着けているなんて初耳だって？
本当に駄目ですね作者は

『余計なお世話じゃい！！』

……黙ってる駄目作者が

「おい青葉？」

「ココです」

「青葉ちゃんおはよう」

「おはようございます紗さん

……で、彼女達は？」

見れば凰輝くんは両脇に少女達を抱えているじゃないですか

右脇には紫のショートカット

少し変わった服装をしています

最も注目すべきなのはやはり背中

背中から白い翼のようなものが生えているのです

一方、左脇の少女も変わっていました

髪は赤に近い茶髪、はつきり言つと肩まで届いてません。まだ

春には寒すぎるであろうタンクトップにショートパンツ
そして、彼女にも翼が
しかし、右脇の少女と違うのは、その翼が黒いこと
そう…まるでおとぎ話に出てくる悪魔のような…

「右側のが雷華」

ベチッ

「あうっ！！」

「左がフィア」

ベチッ

「へブッ」

凰輝くんは言うとはば同時に少女達を落とします

「痛いです凰輝さん！！」

「そーだそーだ」

「…黙ってる」

あいからわずひどいです

でもここで言い合っていると遅刻するので私達は、
学校へと急ぎ
ました

学校です

雷華さんとフィアさんは^{すがたかくし}姿隠という技を使っているらしく見えません

これ程素晴らしく残酷な開き直りは見たことない
というか何の用でしょう

「もうすぐ授業始まるぞ」

うん。 絶対影薄蹴られ損

一時間目、 二時間目、 三時間目に四時間目
担任の重松先生のチョーク投げならぬバット投げで、 八名が保健
室行き、 三名が病院行きになった以外は平凡な日々でした
で、 お昼です

「ジャーン！ 凰輝さんが作ってくれたんです」

雷華さんが取り出したのはお弁当です
ちなみにここは屋上。 誰もいません

「凰輝はどこ行つたのさ」

「学食だそうです」

「全くあいつこんな可愛い娘ほつたらかしにして学食だとお！？
帰ってきたら天誅… って何皆驚いてるんだ？」

驚いた… いつの間に影薄が…

全然気づかなかった…

フィアさんや雷華さんは勝手に凰輝さん作の弁当を食べています
… 美味しそう…

「そついえば二人共

凰輝何か言つてなかった？ 弁当について」

「え〜とたしか牽^{けんこし}牛子とか言っていたぞ」

牽牛子？ どこかで聞いたような…

紗さん？ 顔が青いですよどうかしましたか？

「牽牛子っていうのは…アサガオの種で…」

「フンフン」

ガッ！！

あ、今の殴打音はどっかの影薄がフィアさんの弁当を勝手に食べてたので
フィアさんに殴られた音です

「いい？ アサガオの種って古来から使われてきた程の…」

「なんなの？」

「下剤」

………

はい。三人まとめてトイレへゴー

五時間目は影薄ずつと便所中

気の毒とは思わない

自業自得とはこの事だ。

其の伍：彼は学校でも容赦なし・前編（後書き）

実は作者は高校生になります。

よって、小説の更新速度が遅れるかも…

あ、当分は大丈夫。

其の玖^{そのく}まで書けたので…

でも、5月、6月はやばいかも…

こんな小説だけど皆見捨てないでね…

其の陸：彼は学校でも容赦なし・後編

ど、どうも…雷華です…

ぜ、前回、鳳輝さんに牽牛子なる下剤を盛られ…

…っ、辛かったぁ…

文句を言ったら…もろドロップキックを喰らいました…うう…

今は放課後と言う時間らしいのです

掃除する人、帰る人、校内に残ってる人

色々います

鳳輝さんは普段速攻で帰るそうですが…

今回は私たちのために校内を回ってくれるそうです

「おう、鳳輝。珍しいな何でここに？」

「暇だし、部活に汗流す奴を嘲笑いにちょっと」

「…喧嘩売ってんのか？」

「売ってるが何か？」

…よ、容赦ないですね…

ここは『空手部』という集団が使っているらしいのですが

「く、臭い…」

臭いです。ものすごい汗の臭いが…ムンムンしすぎです…

「ん？ 鳳輝なんだ？ その子

俺達の愛と友情と青春の汗を臭いとは失礼な」

「雷華だNice！」

「あ、ありがとうございます」

よく分からないけど褒められたからよしとしましょう

「貴様等あー！！ 許さない！！」

喰らええええええ！！正拳突つ…！！」

「おうかせいけん
“桜花正拳”」

ズガア！！ ガガガガガガ！！ ドガア！！

……………

えーと…今の音は…桜花正拳というものがさっきの人に当たって…
その人が地面当たりながら吹き飛んで…
壁に当たって壁ごと吹き飛んだ音です

つ、強い…

「や、やはり凰輝は空手部には、入るべきだ…グフ」
「死人だすぞ」

怖すぎます…

空手部の人も丈夫すぎます…

というより桜花正拳って何ですか…？

そんなことを聞く暇もなく私達は空手部を後にしました

次に私達が来たのは『体育館』というところ
ものすごい音がします…

「凰輝くん…何の用？」

あ、青葉さん

今の青葉さんはの格好は、Ｔシャツに短パン
だけどとても汗をかいていて、肩で息をしています
凰輝さんがいうには彼女は『女子バスケット部』という部に入っ
ているそうです

「ちょうど良かった…」

今、後輩達が喧嘩してるから止めてくれる？」

あ、見れば中心辺りで男女が争ってます

「腹に一発ぶちこめばいいだろ」

「凰輝さん！？何言ってるんですか！？」

「あの…ファイアって娘は？」

「野球部」

あ…

言っではなかったけど、ファイアはさっき寄った野球部というこ
ろで部員達と一緒に『バッティング』という練習をやっています

「という訳で止めて」

「OK」

「決断はやっ！！」

私の突っ込みを聞かず凰輝さんは後輩達を止めにいきました

「おら。お前等何揉めてるんじゃ」

「あんたには関係ないだろ！！」

「黙ってて！！」

「このごみが！！」

そして、一番注目すべきなのは背中

天使のような翼が三対。純白の翼ではなく、漆黒の翼
いわば墮天使…

一方、制止された女性は黒髪。そのなかに白い髪が一房ほど
背中の翼は男とは対称的に悪魔のような翼。色は純白
二人とも姿隠を使い一般人には見えない

「落ち着くんだ。焦っている奴は必ず失敗する」

「でも…!!」

「奴等の家を探れば襲撃など容易だ」

「じゃあ…!!」

「だがあの凰輝という男どうも気になる…」

一度調べてみる必要があるそうだ…」

「な、なんで!？」

何であんな人間一人にびびる必要があるのさ!？」

「確認さ…」

俺の思い過ごしだといいいのだが…」

話は終わりだと言わんばかりに男は逆方向に歩きだす

……だが彼らは気付いていない
作者が彼らを当分使う気はないことを……

「え!？ マジ!？」

マジだ

「? 誰に言ってたんだ?」

其の漆：チンピラ退治は彼の特技

「ああ！？ なめとんのか？ われえ！！」

「死にたいんか？ ああ！？」

うぜえ…

どうも、 凰輝です。

今日は買い物をして帰るところ…なのだが。

「だから嬢ちゃん

どう落とし前つけてくれくるんや？」

「……………」

「黙つとらんと何か言えや！！！」

ああうぜえ。

何？ こいつら？ 邪魔だっつーに。

道いっぱいに広がりやがつて、 帰れないだろうが

たつく、 こんな中年虐めるのは好みじゃないし…とつとと片付けて帰るか

「おい」

「ああ！？ 何じゃ餓鬼！？ 今取り込みちゅ…！！」

「桜花正拳」

ガスッ！！ …………… ドガア！！

「デメエ…やるっ！？」

「さんへきつうけん散壁裏拳」

ドガァ！！　ベキィ！！

おし。　終わり。

さゝ帰るか帰るか

「待つて！！」

「ああ？」

振り向いたらなんか少女がいた。

金髪だから外国人か

十字架のイヤリングに十字架のネックレス。

さらに着ている服も十字架をあしらったものだろう。

…こいつどんだけ十字架好きなんだよ。

青葉と比べてみてゝ

「何？」

「あなた…もしかして…」

四神流？　」

「……………」

「そうなのね？」

「……………」

「……………そうなのねって聞いているの！！　返事ぐらいしなさい！！」

「」

「いやだ」

「なっ！　ちよっ…！！　ちよっと待ちなさい！！」

聞いてられるか。

俺はさっさと家へ帰ろうとする。

「おう、 あんちゃん

俺の舎弟が世話なつたそうやな」

「邪魔。 俺は家へ帰りたいんだ」

「…ちよつと面貸^{ツラ}してもらおか」

「……………」

言うなりヤクザらしき男達は俺を取り囲む。

…たつくダリイ…

「やつちまえ！！」

『おおおおおおおお！！！！』

五月蠅い。 こいつら近所のこと考えてねえのか？

「 衝^{しょう}霸^は正^{せい}拳^{けん} ”」

ガスウ！！

真空波ともいうべきか

氣^きを練り上げて放った一撃は真ん前の男の顔面に直撃する。

「 斬^{ざん}撃^{げき}手^{しゅ}刀^{とう} 」

ズパア！

俺の放った手刀は右隣の男が持っていた鉄の棒を断ち切った

「 “ 桜花正拳・連^{つらね} ” 」

ガスッ！！ ドガア！！ ベキイ！！ …………… ドオン！！ ドガア

！！ バキッ！！

三発の正拳突きは確実に男達の腹に入り壁まで吹き飛ばす。
もう意識は無いのか起き上がってこない。

「デメエ…バケモンか…！？」
「……………」

バケモン…か…
クッククッククック…

「化け物？ 失礼な。 怪物と言ってほしいね」
「…このお！！ コレでも喰らえや！！」

最後の男が取り出したのは拳銃
…つまらん

「死ねえ！！」
「鉄鋼防風」

タウン！！ …… カキン！！

男が放った銃弾は俺には通じなかった。
半狂乱になる前に仕留めておくか…

だっ！！

「さんへきじゅうげき
“散壁蹴撃”」

ゴスウ！！

顎への一撃それで終わり
とつとと帰るか

「待て!!」

「ああ？」

さっきの金髪少女が鬱陶しい。

「間違いない…とうとう見つけたわ…四神流!!」

「うるせえな」

「……………!!」

俺は自分でも分かるほど殺気を放つ。

早く帰りたいんだ。

金髪少女は俺の殺気におじげついたのか言葉を失った。

俺は殺気を放ったままその場を立ち去る。

金髪少女は立ちすくんだまま。

雑魚のクセに偉そうに四神流を語るな。

「凰輝さん。 機嫌悪いですよ？」

「嫌なことでもあったのか？」

「んん？ いや別に」

正直に言つと嘘だ。

あの女が『四神流』を知っていた…

あまり遠出する服装じゃなかったから恐らく近いところだろう…

俺はこのことを記憶に刻む。

来たら来たで返り討ちにするつもりだな…

「？　なんですかそれ？」

「買った物してたからな、今日はシチューだ」

『やったあ！！』

…そう…どんな理由があろうとも…

目の前をさえぎる奴らは…

すべて蹴散らすだけ…

「……」

「鳳輝さん何か怖い…」

「帰りに糞でも踏んだんじゃねえか？」

「…そついや最近拷問してねえな…」

『う、ごめんなさあああああああ！！！！』

この鬱憤を二人で晴らすか…

とりあえず晩飯に二人の嫌いなピーマンを大量に入れといた。

全部食わなきゃどうなるかは言つといたから二人とも必死で食つてやんの

あゝ楽し♪

其の漆：チンピラ退治は彼の特技（後書き）

今更なんですが、サブタイトルには絶対主語が入っています
その話の中心人物によって、主語が変わる予定です。
（予定かよ）

其の捌：奥様は魔女、彼は四神流（前書き）

今回はややシリアス多め…かな？

其の捌：奥様は魔女、彼は四神流

「…気になる…」

「何が？」

そりゃ凰輝、あんただよ

昨日は機嫌悪くてとばっちりくうし。

そもそも“桜花正拳”って技は何なのさ。

街では他にも“散壁裏拳”とか“斬撃手刀”とか“衝覇正拳”とか放ってたらしいし

「だあああああああ！！」

「ウワツ！？　フィア何なのさイキナリ！？」

「あー！！　もう！！　気になる！！」

凰輝！！　桜花正拳って何！？　なにか武術修めてるの！？
「…知っているのか…じゃあねえな…」

お、話してくれるんだ。
ワクワク

「言つとくが長くなるぞ」

「ソレデも良いから！！」

「……古代武術“四神流”

俺が扱っている武術だ。

始まりを遡ればキリがない。

“氣”というものを練り上げて放つ技が殆どだ。

吹き飛ばすことを重点に置いた“桜花”

同じ古代武術が放つ防御技を撃ち破る“散壁”

破壊力第一の“滅鬼^{めつき}”

氣を鋭くして相手を斬る“斬撃”

氣を飛ばす遠距離技“衝霸”

…この五つが基本かな。

まあ勿論“鉄鋼防風”のように変わった技もあるが

あとは“かさね正拳”“みだれ裏拳”“つらぬき蹴撃”“あらため手刀”みたいに放つ形態に“連

”“かさね重”“みだれ乱”“つらぬき貫”“あらため改”といった応用技

あと、奥義だな。

…まあココまでで質問は？

「」

「」

「……」

「ZZZ」

「……geeet uuuup!!」

ガン!! ゴン!!

「フギヤ!!」

「ミギヤ!!」

「なんなら今ここで奥義放つてもいいんだが…？」

「…ご、ごめんなさあああああああい!!!!!!」

よく分かんないけど怖い怖い怖い…

なんかヤバイオーラだしてるし。

「…“四神流”は古代武術の中でも最強を争う程の強力な流派だ」

凄いな…

というか古代武術は他にも有るんだ…

「その為に他の流派が襲いかかることがあるんだよね」メンドイこ

とに」

メンドイのか…？
面倒くさいのか…？

「昨日、その一人が来たんだよ鬱陶しい」

ああそういうことか

だから昨日不機嫌だったのか…

「さて…何時来るかな…？」

「何時…？」

「来るのか…？」

「恐らくあれは“美空流”か…いや“c r i e d s t y l e”かな…？」

『……………』

よく分かんない……

「まあ来ても返り討ちにする気だな」

……………

こ、怖い……

「鳳輝さん……」

「何だ？」

「お腹空きました……」

雷華何言っているのさ……

でも、その一言が鳳輝を和らげたみたいだ。

優しく微笑むと雷華の頭をなでまわすと台所に向かう

「…今日は肉じゃがにすつか!!」

『わっい!!』

其の玖：彼も彼女も古代武術

「さて… “アイツ” のトコへ行くか」

“アイツ” ？」

“アイツ” って誰ですか？

って待ってくださいよ〜 鳳輝さん！

「 “アイツ” って誰なんですか？」

「古代武術 “豊華流” の使い手

でも、そいつは味方だ」

「へ〜」

…ん？ 待つて確かこの小説のタイトルは “神様と私” じゃなかったけ？

何か焦点が古代武術に固まっていく気がするんだけど…

「…まあ別にいいだろ？」

「いや、良くないでしょう

私と鳳輝さんが主役でしょ？

というか思考読まないで下さい。」

「…あれ？ アタシは…？」

…あ、ゴメンゴメン。 フィア

フィアも一応主役級だもんね

<まあ、 フィアが中心の話は今のところ書く気はないけど by
作者>

「ハアアアアアアアアアアア！?!?!？」

赤野紗、 17歳独身」

「いや、 そういうトコから紹介しないでいいから」

「豊華流の使い手だ」

『あ、 やっぱり？ 』

ガスッ！！ ゴンッ！！ バキッ！！

「なんか腹立つたから」

「何も言ってねえけど！？ 』

「それに何で私まで！？ 』

「テンション。 』

「テンションで殴らないで！！ 』

「紗さんどうしました？ 』

あ、 青葉さん居たんですか

「三人とも久しぶりです」

「おう青葉。 其の陸以来か」

あれ？ 紗さんは其の伍以来な気が…

「雷華ちゃん

何か考えてはいけないことを考えてしまったんじゃない？ 』

……… そうかも

「で？ 何の用？ 』

「ああ、 なんか四神流を知っている奴がいたから」

「へっ… ってそれってまた！？ やばくない！？ 』

ま、 またあ！？

前にもあつたんですかあ！？

「…前にもあつたんですか…？」

「ん？ ああ、 前に一度な」

「その時は凰輝が鬼神のごとき闘いぶりです…西玉藻が無くなるんじゃないかと…」

す、 凄い…

と凰輝さんが席を立つ

あれ？ もう話は終わり？

「あ、 そうそう

これあげる。 江戸前の饅頭」

…お、 お、

「美味しそおー！！」

「いる？ 雷華ちゃん」

「いただきまあす！！」

あむっ…！！

んゝ！！

美味しい！！

「……………」

「何で食べないんですか？
美味しいですよ」

「いや…今に分かるよ…」

「……………」

「…その晩…」

「お、お腹痛い…」

「何か変なものでも食ったんじゃないか？」

「効果が出るのは約10時間後か…」

「……………」え？ 凰輝さん今なんて？

其の拾：彼らと共に確認タイム・壱（前書き）

今回は本編とは関係は欠片もありません。
その点はご理解ください

其の拾：彼らと共に確認タイム・壺

やったぜ！！ 祝・其の拾突破！！

三人『イエーイ！！』（雷華・ファイア・影薄）
三人『……………』（凰輝・紗・青葉）

こんにちは読者諸君。

司会是我、聖なる写真が務めさせていただきます。
さて、今回何故この話を行うかといいますと

凰輝「ネタがなくなつたからだろ」

紗「いや、一応伏線はいつぱいあるし

別の理由じゃない？」

青葉「…どうでもいい」

雷華「お腹空いた」

ファイア「アタシも」

五郎「てか上の影薄ってひどくね！？」

しやらあああああああつぷ！！！！

今回！！ 色々な展開続きで訳分かんなくなってる人もいるかもしれないから！！

そんな人のための解説及びこの世界観紹介コーナーだよ！！

凰輝「…そんなことをしなくちゃなんねえこの小説って」

青葉「…おかしい」

だあかあああ！！

しやらあああああああつぷ！！！！！！

変に呼吸合わせなくていいって!!

……っ、 疲れた…

紗「無理はしない方が……」

ファイ「さあ!! 本編にまいりましょう!!」

無視すんなあ!!

紗「ではまず神様ってそもそも何？」

……あゝ

この物語いや、 神様信じている人に喧嘩売っているんですか？

巫女さん

まあいいでしょう。

神様——それは様々な世界を見守る存在ですね。
時に人に希望を与え、 時に人に罰をもたらず。
そういう存在……だと私は思っています。

雷華「持論!？」

はい、 神様少し黙ってて

神には一応種類があります

まず、 神界——神々が住んでいる所——すらも支配しているいわ
ば神々の王

それが『唯一神帝』
ゆいつしんてい

そして、 災いを抜く神

それが『武神』
ぶしん

その武神の王が……

五郎「武神王」？」

外れだ影薄
“全武神王”だ

青葉「…全？」

ああ、一応武神にも種類があって例えば主に火で闘うのが
“炎武神”光の力で闘うのが
“光武神”という風にな
そして炎武神の王が
“炎武神王”という
それらの武神王の王が全武神王という訳。

凰輝「…スゲー創造だな…」

ほつといてくれます？
で、それ以外が普通の神々と
雷神とか火神とか水神とか風神とか色々
それらの神々の王が…
もう分かるよな？

凰輝「ら…」

雷華「雷神王とかですよね」

凰輝「……………」

コラコラ

凰輝、雷華を虐めるな。いくら腹が立ったとはいえ

ファイア「ほら次

四神流と豊華流について」

OK ファイア

四神流は実は分家なんだ

昔、中国にあった“蒼天流”そうてんりゅうが元で

鎌倉時代、鳳輝の先祖“西上辰次”にしがみのたつじが考案したのが始まりなんだ

そして西上辰次が自分の四神流の限界を求めて闘い続けるんだけど
そのせいである大事件が起こるんだ。

まあそれは後々に語られるとしてだ…

豊華流に移ろう

豊華流は江戸時代、紗の先祖“赤野六花”あかのりつかが考案したんだ。

女性でも扱えるようにしたためカウンター系が多いんだ。

紗「でも、四神流がオリンピックク世界新記録並みの力だとしたら

豊華流は大学の地区大会か高校の全国大会進出程度だよ」

雷華「紗さん…謙遜しすぎですよ

強いと思いますよ」

鳳輝「甘いな」

三人『…？』（雷華・ファイア・青葉）

鳳輝「豊華流はカウンター中心だから決め手に欠けるんだ」

まあ、四神流はカウンター技はまったくないけど防御技や回復技
が有るからなあ

紗「さて、其の拾突破記念

『彼と共に確認タイム・壱』いかがだったでしょうか？」

雷華「またいつか次回の突破記念で会いましょう」

鳳輝「またな」

… っ てこらああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！
勝手に終わらすなあ！！！！！！！！！！

青葉「… バイバイ」

フィア「また本編でなあゝ！！」

五郎「ってか俺あんまり喋ってねえ！！」

影薄、お前4回しか喋れなかったからなあ…

… では、 また

其の拾：彼らと共に確認タイム・壱（後書き）

感想・評価お待ちしております。

というよりください。

お願いします。

其の拾巻：彼VS泣いた方式（直訳）（前書き）

今回はちょっと微妙かも…

其の拾巻：彼VS泣いた方式（直訳）

「ついに見つけた…」

西上家の前に少女が立っている。

金髪に十字架づくしの格好

其の質以来の登場…

そついや名前決めてなかったな…

「適當過ぎるだろ！！」

まあいいや。

とりあえず彼女はチャイムを鳴らす…鳴らす…鳴らしまくる…が出ない。

「…どうなっているの？　ここのはずよね…」

「衝覇蹴撃」

ドガア！！！！

〳〵時は少し遡り〳〵

「いつくるのかなあ…」

雷華がぼやく

俺としたら速く来いよという感じだ
一刻も早く叩きのめしたいのだが…

「凰輝…」

「なんだよ紗」

「あれ…」

「あ、」

いたよ。家の前に
とりあえず…

「衝覇蹴撃」

「ちよっ…！！」

ドガア！！！！

とりあえず攻撃、と

くく暫くしてくく

「ウ、ウン」

「あ、起きたみたい」

もう驚いたよ。

イキナリ凰輝が攻撃するんだから

「おし、嬢ちゃん

遺言状はもう書いたか？」

「は？」

「イキナリ何言っているのよ！！！！」

「……四神流！ 覚悟！！」

「五月蠅い」

バツコーン!!

「~~~~~!!!!!!」

「凰輝!!人をフライパンで殴らないで!!」

終いに怒るよ!!

「まあ嬢ちゃん俺と闘いたいんだろ」

「嬢ちゃんじゃなくてアタクシにはアランカルト・クランベリーって名前があるの!!」

名前負けな気がする…

でもそう思っても口に出さないのが礼儀でもそんなの関係ない人にはどうでもいい

「明らかに名前負けだな」

「むかあ!! 四神流!! 覚悟は出来まして!?!」

怒ったときにむかあってという人を初めてみた…

「あゝこれ終わったら国帰れよ」

「OK!!」

なぜ納得したの!?

ともかく二人は庭へ私達三人は二階のベランダへ

「もう一度いわせてもらおう!! アタクシはアランカルト・クランベリー!!」

Cried styleの使い手!!」

「Cried styleって直訳すると泣いた方式っていう感じ

だぞ」

「~~~~~!!!!」

このぉ!! コレでも喰らえ!! Rain="blizzar
d!!」

嵐のような氣弾が襲いくるが、 凰輝はアッサリと全て回避。

「桜花裏拳」

ドガア!! スズザザザザ!! グシャ!!

「かはっ!!」

桜花裏拳の威力に庭の垣根がグシャグシャになっている
その破壊力にたまらずアランカルトは血ヘドを吐きだす。

「クッ!!」

「諦める!! 泣いた方式ごときが四神流に勝てる訳ないだろ」

「だあかあぁ!!」

Cried styleだって!! 言っているでしょ!!」

そのあと連撃が続くが、 凰輝はアッサリと全て回避

さっきの一撃が効いたらしくアランカルトの動きにキレがない。

「クッ!!」

「.....」

悪いがとどめとさせてもらおう」

「ならば!! 喰らえ!! 奥義tear machine-gun!!」

さっきの氣弾よりも大きさと数が倍以上ある
コレは避けられない！！

………って、え？

「なっ……！！」

「散壁正拳・連」

ガスッ！！ ドガア！！ バキッ！！ グシャ！！

避けた…

しかも、反撃したあ！？

うゝん、 やっぱりこいつは怖い…

「そ、 そんな…ゴフッ…！！」

「これが…力の差だ」

出血量が多すぎる…

た、 大変だあ！！

ち、 治療隊！！

つて治療隊ってなに！？

何なの！？ 教えて！？

「お、 落ち着いて下さい…」

雷華の言っていることが正しいので落ち着く

「とつとと国へ帰れ」

「……………」

「…言ってること酷すぎないか？」

フィアの言ってることも正しいが勝負は常に非常だ
彼女にとってもいい薬になっただろう

……それから彼女は二度と来なかった……

恐らく二度と来ないだろう。

さて、今日も頑張るか

其の拾巻：彼VS泣いた方式（直訳）（後書き）

マジで感想ください…

お願いします

其の拾貳：神様と共に修行開始（前書き）

遅れてしまつて申し訳ない

其の拾貳：神様と共に修行開始

ども、 鳳輝だ

最近凄く気になることが…

「お前らって修行とかしているのか？」

『……………』

凶星か…

修行しろよ

「うゝだつてゝ」

「修行って何するんだろ…」

そっからかよ…

腹立つから四、 五発ほど殴ってやった

〕〕 wait a minute 〕〕

「…という訳で

Let's battle together)さあ、一緒に闘
いましょう)!!」

「何故に英語？」

ハアイ、 紗ナイスツコミ

今回、 雷華とフィアの修行のために皆を呼び出しました。

「…何をすれば…？」

「俺も暇じゃねえんだよ!!」

紗が選んだのは鉄のナックル

肘まであるため攻撃防御何でもござれって代物

うん、 良い選択

じゃあ次はフィア

「この斧が良いかな？」

あ、 でもこの剣の方が…」

…何処の主婦だお前は

しかも、 どう迷ってるんだ

斧と剣の大きさ全然違うぞ

さて、 雷華は…」

「ん、この槍にしとこうかな？」

あ、 でもこっちの槍の方が長くてかつこいい…」

『槍』にするのは決まっているみたいだが

どの槍にするかは決まっていなみたいだな

では影薄は…」

「なんかこの剣持っていると勇者になった気分…」

なんか英雄気取っているし…ウゼエ…

なんか腹立つ…」

ドカ！！

「なっ…何するんだ！！」

あ、 殴ってしまったか

ウツカリウツカリ

俺は蹴ったつもりだったんだが
さて…最後は…え!?

「……………うん、これがいい」

青葉が持っているのは人二人分はある大剣。
軽々と扱ってるし……

まあ何はともあれ皆選り終わったみたいだな。
で、次

「オ―イ作者」

ドローン!!

「何？」

「フィールドを」

「OK」

出てきたのは河童かつばもどき擬

一応作者の聖なる写真だよ
どうでもいいが

「我が命により暗黒からいでし魂よ…この世とは異なる次元を生み
出せ!!」

「何その呪文!？」

紗ってよく突っ込むよなあ
と、辺りが漆黒に染まる

準備万端

「な、なんですか!？」

「スゲー!!」

「ルール

雷華、 ファイアvs紗、 青葉、 影薄

生き残った方の勝ち

体力は大体数字になって出てるので

サボったと分かったら俺から天誅だ

あとフィールドは別次元だからどれだけ暴れても自由だ

OK？」

「……それだけ？」

「それだけだ青葉

準備はいいな…？」

レディ………fight!!」

現在状況

・ 雷華

体力：620

武器：4m程の槍

・ ファイア

体力：660

武器：長剣

・ 紗

体力：785

武器：肘まである手甲

・ 青葉

体力：540

武器：3m以上の大剣

・柿田（：だつたよな？）

体力：315

武器：翼を模した剣

え？ 武器は何処から持ってきたって？
俺の部屋からに決まってるが何か？

其の拾貳：神様と共に修行開始（後書き）

体力値は適当です。

これくらいでいいかなと。

体力が0になったからといって

それは戦闘不能とかじゃありません

（所謂ただの基準みたいなもの）

其の拾参：神様と共に修行中・壱

「うおおおおお！！」

ガキン！！

ファイアが繰り出した一撃はアッサリと手甲によって弾かれた。
まったくよくやるなあ

そう思いつつ俺、 凰輝は他の奴等に目を移す

「ライデイン！！」

カッ！！ ゴロゴロ！！

ドカーン！！

「ゲゲフ！！」

雷華、 それ作品違うぞ

作者がスク○ア・エ○ックスに怒られるから止めなさい

あと影薄、 何だその悲鳴は
腹立つなあ

「…退いて」

「え？ うわあああああああ！！！！」

ヴォーン！！

青葉の放った一撃は影薄の脇を通りすぎ雷華へと迫る！！

「へ？」

あ、

ズバシユ！！！！

「いったあゝ」

彼女が放った強烈な一撃は肩口から浅く切り裂いただけだったが、発生した隙は大きすぎるはずだった

「隙ありい！！」

「…甘い」

バチィ！！

「ぐわあああああああああああああああ！?!?!?」

「ありや？」

雷華の放った雷撃は青葉を狙ったハズなのに彼女に当たらず後ろにいた影薄に当たる

あんなでかい大剣を持っていたのにアッサリと回避するとは…やるな、素人のくせに

「そ、そんなのありですか!？」

「あり」

うん、俺もそうする

第一俺は大剣よりも長剣を選ぶ

……関係ない？

だな、 次行こうか…

「うわぁ！？」

「… 豊華流『梅落』」

ドシャー！！

おお…

相変わらず見事な投げ技だな

豊華流を放つとき、 目付き変わるのも相変わらずだな…

ていうかお前等神とか悪魔なのに人間に押され気味になってんじゃねえよ

「…このお！！ 紅蓮弾！！」

「豊華流『菊鏡』」

「っ！？ うわわわわ！？」

ゴウ！！

自分が放った炎に逆に吞まれるフィア

ダメーシは小さくなさそうだ

さて雷華たちは…

ドシャア！！

「いったっ…」

「… 終わり…？」

「いっけ——！！」

五月蠅いぞ影薄
黙ってる

「っ……まだまだあ！！
らいげせんか
雷撃閃華あ！！」

どうん！！

「！！」
「はiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！！？」

バチチチチチチチチ！！！！！！

雷華の掌てのひらから出てきたのは黄でも白でもない
いわば銀の雷——

それを見た二人はあまりの意外さに隙ができ、
影薄はともかく青葉は大丈夫かよ！？

銀の雷に吞まれる。

「……どうです！！」
「……甘い……」
「し、死ぬかと思った！！」

ち、影薄生きていたのかよ
だが二人とも元気がない
あの雷の威力は半端ないようだ
特に直撃した青葉には……

中々楽しませてくれそうだ

「……あ、そういえばお前等」

『…？』

俺の言葉に皆が振り向く

「一応死なない限りは怪我は治るらしいから死なない限りは…」
「それって…」

流石紗

勘が鋭い

「死んでも蘇生不可だから」
『はiiiiiiiiiiiiiiiiiiii！？』

というかお前等この事考えろよ
よく考えずにやったなあ

くまだまだ続くよ！！く

現在状況（現在体力／最大体力）

雷華　： 3 2 4 / 6 2 0

ファイア　： 3 3 2 / 6 6 0

紗　　： 7 4 3 / 7 8 5

青葉　： 2 1 9 / 5 4 0

影薄　： 0 0 4 / 3 1 5

其の拾参：神様と共に修行中・壱（後書き）

体力値や技名等の突っ込みはナシで

其の拾肆：神様と共に修行中・貳

まだまだ続くぞ

司会は凰輝でお送りします

さて、続きを見るか

「貰ったあ！！」

「…甘い！ 甘すぎる！！」

ガッ！！ キーン！！

ファイアの放ったフェイントも紗には通用しなかった

まあファイアには可哀想な話だが紗は俺と十年以上付き合っている所謂幼馴染みってやつだ。

何回か組手リンチもしているの

生半可なフェイントは通用しない

…ん？ 何十回だったかな？

いや何百回だったかも…

まあいいや

さて、雷華と青葉は…っと

「チャンス！！」

「……」

ガッ！！ カキィ！！ カチン！！

始めは圧倒的だったが

前回強烈な一撃を受けたので青葉の動きは確実に鈍くなっている

…だがまだまだ勝負は先が見えない

「いけいけー！！」

「五月蠅い影薄」

ゴガア！！

「グワア！！」

あ、影薄殺っちゃった。

まあいいか

死なねえし

生きてる限りだけど

「…あ、」

「あ、」

「あ、」

「あ、」

あ、気付かれた

「……まあいいや」

あ、案外冷酷なんだね青葉

「ありやま」

あっさりしてるなあ紗

「……別に闘いが楽になるワケじゃないのに……」

だよなあ 雷華

「ん〜どうせなら紗さんがやられてくれればなあ…」

そうだよなあ ファイア

「俺の心配してくれよ!!」

「いや、 だがなあ…」

「うん…」

「大して役にたつてなかったし…」

「…正直に言つと…」

「だよねえ………」

………

『邪魔』

「ガ————ン!!」

ショック受けすぎ

大して役にたつてなかったじゃねえか。 お前

「作者——」

「お——つす」

『?』

「古より産まれし邪悪なる意志よ
いにしえ

黒金の鎧を纏いて指し示す者を討ち滅ぼさん!!!!!!」

「何その呪文!？」

「この空間からの追放呪文」

「無駄に立派すぎない!？」

立派すぎるだろうが

呪文は呪文

影薄は漆黒の衣ころもに包まれ消えていった

「戦闘再開」

頑張れ

「何か気が狂うなあ…」

その通りだけど頑張れ

「う、うおりやあああああああ！…！」
「甘い！！」

先に再開したのはフィアと紗

ガッキイイイイイイイイイイン！！ ドシャア！！

「カハッ…！」

受身も取れずに勢いよく投げられたからなあ…
ダメージは半端ないはずだ

「…御免なさいね」

「え？」

「豊華流…『花枯』はながらし！…！」

ドゴォー！！

「グフツ!!」

…そんな技あったか？ まあいいや

『花枯』は全体重+氣が込められた一撃、肘鉄らしい特に倒れた相手に放つのが一番威力が高そうだな

それを受けたフィアの体力も0

はい、二人目

「作者」

「OK!!」

作者の呪文と共にフィアの体も漆黒の衣に包まれて消える

「私は見ているから

二人とも頑張つて」

「お、お!!」

…次回、決着!!…

現在状況

雷華 : 302 / 620

フィア : 000 / 660 (失格)

紗 : 739 / 785

青葉 : 203 / 540

影薄 : 000 / 315 (失格)

其の拾肆：神様と共に修行中・弐（後書き）

よくよく考えたら体力値あまり関係ないような…
まあいいや（よくねえよ）

其の拾伍：神様と共に修行終了（前書き）

なんか終わり方が少し変かも…

其の拾伍：神様と共に修行終了

いよいよラストだ

鳳輝だ

「うおりゃあああああああ！……！！！」

「……甘いですよ……！！」

ガキイ！！ キイン！！ ガッ！！

槍と大剣は幾度となくぶつかり合うが始めと比べて互いに勢いが無い

「……全くだらしないなあ……」

「失礼ですね！！」

あ、心の声を喋ってしまったか……うっかりうっかりでも雷華、突っ込んでいる暇はないぞ

「……隙あり……！！」

ガッキイイイイイイイイイイン……！！

大剣が槍を勢いよく弾きとばす

……勝負ありか……？

「びゃ……『びゃくせんらい白夜閃雷』……！！」

「……二度は通じない……！！」

うお……！！ 危な……！！

「そろそろ止めんか」

ガン！！

「いったあ！！」

「彼女は普通の人間だ殺す気か」

「あ、」

ここでは死んでも蘇生不可だつて

青葉も限界だったのでこの空間から出す

意識を失っていたが死んではなかったので大丈夫だろ

さて最後、 紗vs雷華

だがこれは一瞬で決着が着いた

「『サンダータックル』！！」

「豊華流『たけながし竹流』」

ドシャ！！

勢い付いた雷華の突進を紗はあっさりと受け流す
あ、終わった終わった

「豊華流『花枯・双葉』！！」

ドスッ！！ ガッ！！

「グフッ！！」

「はい終わり〜」

「ええ！！ 何ですか！？ まだやれます！！」

「終わりは終わり。 死にたいのか？」

其の拾伍：神様と共に修行終了（後書き）

無理矢理終わらせた感丸出しですね。
すみません

其の拾陸：彼女の敵と初恋の相手（前書き）

新キャラ登場！！

其の拾陸：彼女の敵と初恋の相手

ピンポン

「はい」

どうも雷華です

今日は鳳輝さんが

『今日はテストあるから家にいる。』

昼前には帰ってくるから棚の物なんにも食べるなよ』
と、言っていたのでお留守番です

『テスト』ってなんなのか分からないですけど
お昼は何だか楽しみです

で、今は11時

鳳輝さんを待っていたところです

なのにさっきのチャイム
でも出なくちゃ

「はい」

「四神流の使い手がここにいと聞いたのだが…」

「!？」

「…その様子だといえるみたいだな…教えて貰おうか」

いた女性は腰まで伸ばした茶髪がよく似合う美女。

でも完全な無表情で赤く染まった顔が少し気持ち悪い……

その女性は一つに束ねた髪を揺らしながら腰に手をのばす

「…どこにいる」

「……」

女性は息を切らしながら腰から何かを抜き私に向ける

と

「……………え？」

左肩に激痛が走る

見ると左肩に小さな穴が開いている

「言え…言わないと次は……………」

ドウツ！！

その言葉全てを聞かず

私は雷撃を放つ！！

だがその女性は紙一重で避けるとまた黒い筒の様なモノを私に向ける！！

「……………右肩を撃つ」

「うつ……………！！」

次は右肩に穴が開く
な、何なんですか一体……………！！？

「雷華……………」

「ファイア……………」

「新手……………」

ファイが私の様子をみにきた
そして女性に気付く

「……誰？」

「知りません！！」

「うおい！！」

いや、そんな突っ込みされてもねえ……

「四神流の居場所……教えろ……！！」

「家の前で騒いでんじゃねえ！！」

ドカア！！

あ、凰輝さん今帰ってきたんですね

「凰輝、ナイスドロップキック！！」

「てめえらも騒いでんじゃねえ！」

ドガア！！ ガスッ！！

「ゲフッ！！」

「キャア！！」

い、痛い……

な、なんで私達まで……

「う……」

「休め、風邪引いている奴に俺が負ける訳無いだろう」

「か、風邪…？」

女性は相変わらず無表情のまま、だからなんて考えているのか全く分からない

「……………」

「チツ気絶したな。雷華、ファイア運べ」

「え？ ああ」

「え？ なんですか？」

「メガトンパンチ！」

ドカァ！！

「ギャフ！！」

「運べ」

「は、はい…」

お、鬼……

ともかく私達は謎の女性を家のソファーに運びお昼にしました

今日のお昼はラーメンというものです

とても美味しかったです

で

「何なんですか？ これ…」

私は女性が持っていた黒い筒について凰輝さんに聞いてみた

「銃だな…弾は入ってないみたいだが…」

『銃？』

「ああ、大したことないが
火薬の爆発力を利用して鉛の弾を飛ばし相手に致命傷を与える武器だ

弾を受けたら早く取り出さないと鉛中毒を起こす危険があるんだ」

「……って、無茶苦茶危ないじゃないですか！！ 私2発も受けたんですよ！！」

「ほお〜じゃあ取り出さないとなあ〜」

「…大丈夫…」

あ、起きた

ってイタタタタタ！！

「なっ！！ 何しているんですか！？」

「ん〜弾は入ってないな〜」

鳳輝さんが傷口をほじくりまわしているのもとても痛い……
というか心無しか笑ってません…？

「…『音無流』おとなしりゅうは氣を込めて弾換わりにする
だから弾は込めてない…」

「痛い！！ 痛い！！ 痛い！！」

弾を入れてないなら傷口ほじくりまわす意味無いですよ！！
「俺の趣味だ」

しゅ、趣味iiiiiiiiiiiiiiii？

へ、へんな趣味…

「
♪♪♪」

「た、楽しまないで下さい！！ 痛い！！ 痛い！！」

「あゝあ、 気の毒に」

ガンー！！

ファイアが嘲笑うように言っていたので殴っとききました。

「いてえー！！」

「痛いんですよー！！ 変わって下さいー！！」

「嫌に決まっているだろー！！」

「喧しいわー！！ お前らー！！」

ガンー！！ ゴンー！！

い、 痛い…

でも、 ようやく凰輝さんは傷口をほじくりまわすのを止めてくれました…

「…………… 変…………… フフツ」

「なんだ笑ったら可愛いじゃん」

『！？ 』

微笑んだ女性にあっさりと言い放つ凰輝さんに

驚く女性3人

特に微笑んだ本人は赤い顔が更に赤く染まった気がする

「？ 何をそんなに驚くんだ？」

「いえ、 そんなことも言えるだなんて……………」

「メガトンキーク」

ドカアー！！

「ギャン!!」

「な…なんだよその悲鳴…」

ひ、悲鳴についての突っ込みはなしで……

「……もう大丈夫…あとは親戚の家で休む……」

そついうと女性は立ち上がり家を出ようとする。

「あの…」

「…？」

「名前…なんていうんですか？」

「……レニー・クラウディア」

凰輝さんがレニーと名乗った女性に銃を返すと
そのまま自分の部屋に戻ろうとする

「……四神流」

「凰輝だ」

「…凰輝…まだ決着はついてないから…又来る……」

「……んーいつでも来い」

「………そうする」

そのままレニーさんは出ていった
………又来るのかな？

「モテる男っていうのは大変だねえ……」

「？ 凰輝なにか言ったか？」

「いや別に」

……あ!!!!!!

「私撃たれ損じゃん!!」

「今気付いたのか」

「遅!!」

うう

今度来たら雷撃を放ってやる

其の拾陸：彼女の敵と初恋の相手（後書き）

実は何気に今テスト期間中（勉強しろよ）
後、レニーは当分出てきません（こら）

其の拾漆：彼と共にショッピング（前書き）

凄く遅れてしまった…
色々とすいません

其の拾漆：彼と共にショッピング

どうも、 凰輝だ

今は料理の準備中だ

今日は……親子丼でも

「あ……」

卵切らしてた

オマケに醤油も切れかけだし

あ、電球も切らしてたし

やっぱ色々切らしてたじゃねえか

「凰輝、飯まだ？」

「お腹空きましたあ」

事情を知らぬ馬鹿二人
仕方がないので……

バキッ！！ ゴン！！

…殴つとききました

「いてえ！ 何すんだ！！」

「キャウ！？」

あはは、
いい悲鳴だ

「材料が切れたんだよ

買い物行ってくるから留守番してろ」

「えゝ！？ 行きたい！！」

「私もゝ！！」

買い物に行きたい馬鹿二人

やっぱり神や悪魔といっても心は女の子か

ここで殴って言うこと聞かすのもありだけどなあ…

「……よし、分かった

だが、何もねだるなよ」

『はゝい！！』

という訳で出発ゝ

ゝゝwait a minuteゝゝ

「ウワツ…！！ 何だここ…？」

「人が一杯ゝ！！」

今ここは商店街

俺は買い物するときいつもここに来る

ここにあるスーパ―も良いものが揃っているからなあ
まあ基本俺は小売店を利用するが

「おら、サッサと行くぞ」

『はゝい！！』

まずは、近所のスーパー
卵〜醤油〜

スーパー到着〜

「卵…卵…」

まずは卵……っと

あ、あつた

次は……醤油…

「あ！これ美味しそう！！」

「え〜！？甘過ぎないか？」

馬鹿二人はお菓子売り場で騒いでいる

無視無視

「醤油は……っと」

たしか調味料売り場に……

「あ！これなんか旨そう！！」

「え〜！？味覚おかしいですよ」

「ああ！？」

馬鹿二人が

無視無視無視無視無視

「真特選・和風超醤油改」は…つと」

ネーミングセンスは可笑しいが
旨いんだよなあこの醤油

あつたあつた
おつ

「ふざけんな!!」
「そっちこそ!!」

.....
とりあえず.....

ガン！！
ゴン！！
バキッ！！
グギャ！！

「ふぎやふ!？」

「
キャウン！？
」

「公共施設で騒ぐな……」

[illegible]

うっし。
黙つた

「最後の音ってなに？」

「
お
お
紗

「買い物か？」

「うん。塩が切れたから行ってこい、って兄貴から」

「へえ、あの兄貴帰ってきたんだ」

「うん」

紗の声に覇気がない
だろうなあ

あの兄貴じゃなあ

「凰輝、こんど頼むよ」

「え、若い女じゃないとなあ……」

あのドMが

「さっきの最後の音ってなんなのさ？」

「ん？ ああこの音」

俺は雷華の首を後ろから絞めると
その首を横に曲げる

グギャー！！

「グヒヤ！？」

「お、凰輝！？」

「や、止めなさい！！」

「ん、いい音」

あれ周り若干引いてね？
もう慣れたからいいことだけど

「…醤油どこだ…？」

おし、発見

あゝあとは……

「パニックつてきたあゝ」

もう一方の俺が電気屋に行つたのを見届けて
薬屋に急ぐ

「え？ あれ？ どっちに行けばいいの？」

「ア、 アタシ薬屋！！」

「じゃあ私電気屋！！」

雷華外れ

後で押し付けたれ

〵 wait a minute 〵

「ふええゝゝ」

「お疲れ雷華ゝ」

「雷華飯置いてあるぞゝ」

今、俺の家

あのと、俺の分身は一方的に雷華に荷物を押し付け
勝手に消えていった

『分裂気体』の特徴はこれ

いつでも消せて、そのときの記憶のみ引き継げる
因みに分裂気体を行つても力は1/2にはならないが
修行をしても効果はない

うゝん、 なんて便利

其の拾捌：彼女も我が家にやってきた（前書き）

今回から新キャラ（神？）登場です

勢いある落ち方だ!!

……あれ?あの方向って……

「……確かあの方向って凰輝さんの家じゃ……」
「……だね」

……なにかヤバい予感がする

〵〵凰輝宅〵〵

……どうも凰輝だ
午後は抹茶に限るさ……と、言いたい所だが……

「なんだよこの状況……」

あゝ庭に少女が突き刺さっている
背中に大きな白い羽根が生えているから神の類いか

……どうしよう

ダダダダダダダ!!

「ただいまあ!!」
「お帰りい!!」

ゲシィ!!

勢いよく帰ってきたフィアを勢いよく蹴りつける
雷華は無視……

できねえよ ♪ ♪

パッカーン ♪ ♪

「キャウ!？」

「アハハ♪ 雷華♪ コイツ誰？」

「ああ!! スチルさん!? なんでココに？」

言いながら雷華は少女を地面から抜く

スチルと呼ばれた少女は土を払うと俺に向き直る

「……はじめまして凰輝さん…私は鉄武神の一人スチルと申します
……以後宜しく」

「ん? ああ」

スチルが差し出した手を受け取り……

そのままブン回す ♪ ♪

ぐるんぐるんぐるん!!!!

「ひゃあああああああああああああ!?!?」

「おりゃあああああああああああああ!!!」

一応彼女は小柄だがあいつらも近くにいたから……

バキッ!! ガコッ!! バシッ!! ガスッ!! バシッ!!

うは、物分かりいな
まじで会いてえ

明日のお楽しみってことで♪

「OK」

………こうして送り届けられた本人（本神？）を無視し
我が家に新たに居候が来ました

うん、いい声で鳴いてくれそうだ（オイコラ）

其の拾捌：彼女も我が家にやってきた（後書き）

実はこれ昨日出すはずだったんです…ごめんなさい

其の拾玖：彼女は知る、彼の凄さを

「そういえばさあ……」

あ、
どうもスチルと申します

前回から凰輝さんの家でお世話にさせていただいてます

「何ですか？」

「雷華、お前ってさあどうやってココに来たんだ？」

「ん、あのときは『転送』してもらいました」

「……轉送？」

あ、『転送』についてはよく知らないみたいです
ね説明してあげようかな

「……
『転送』
ってなんだ？」

「悪魔はどのような方法で？」

「いや、変な魔方陣みたいなものに乗ってだな……」

うん、まんま転送ですね

悪魔も同じ方法でくるみたいですね

別にそれを知ったってどうしろというわけじゃないけど……

「でも何ですか？
いきなり」

「……いや……今度神界に殴り込みに行こうと」

い
や い や い や い や い や い や い や い や ! ? ! ?

㊦

何考えているんですかこの人！？

無理ですって！！

[illegible]

しかも、コチラに來ましたあああああああああああああ
あああ！？

ガキイイイイイン！！

「じゃないみたいだな……」

今、私が作り上げた鉄の爪とアイアンメイデンEXというものが
激しくぶつかり合っています

..... あ、 向こうに切れ目が入ってきました
一度切れ目が入りますとコチラのものです

「
おお
」

私の気合いと共に放たれた神氣しんきに凰輝さんが感嘆の声を上げました

パキイイイイイイイイイン……………！！

鋭い音と共にアイアンメイデンEXは両断されました
なんとか危機は去ったみた

「ドロップキック！」

ドカア！！

「ひゃあ！？」

「スチルさん！？」

い……………痛い……

な、何ですか……………？

「気に食わないから」

「何も言ってますんが！？」

「スチル…凰輝ってこういう奴なんだよ……」

「アイアンキック」

ドスッ！！

「ギャウー！！」

……………理解しました……

ええ……………彼がどんな人物か大体理解出来ました……

でも、毎日が辛くなりそうです……………ハア……………

其の貳拾：魔王降臨？それでも彼には関係ナシ（前書き）

気がつけばもう20話

それなのに感想があまり来ない…

感想ください

あと今回から新キャラ（魔王）追加です

其の式拾：魔王降臨？それでも彼には関係ナシ

くく魔界くく

「ちやお」

…独りでやつてて淋しくないか……？

………はじめまして…とても言おうかな

邪神王…と人は呼ぶ

あ、邪神王っていうのは神界での唯一神帝みたいなもので、
今俺がテレパシーで話しかけているのが『閻魔王』レナート
………の筈なのだが………

…第一何だよその挨拶は………

「あゝ邪神王、ちやお」

ちやお　じゃねえよ

「じゃあチャオ」

カタカナにするなよ

しても大して意味ねえよ

………ハア………

外見は肩より伸びた金の髪

服装は袖無しジャケットに短いスカートとアレだが

身長はスラリと高く、それに体格も『美しい』の一言に限る

だが何故性格がこんなに子供っぽいんだ………？

ん

「ねえねえ邪神王」

♪を付けるな♪を

「私も第三青界に行きたい」
……………何でだ？

コイツは450年前に一度行っているはずだぞ
更に も付けるな
ふと、第三青界が映し出されている水晶を見つめる
すると、『地球』という星で神の類いを見つける
おい…コイツって……………

……………スチル…？
「懐かしい もう一度会いたいなあ」
……………

スチルもレナートと同じ頃、修行に来ていた筈
何故…？ 偵察か…？
確かにこの第三青界にある星の一つ、『地球』は近頃凄まじい発
展を見せている
向こうも気を付けているのか……………？

神王
本当は唯一神帝の気紛れなのだが、そんなことを露知らない邪
……………面白そうだから内緒な、by 作者

ん…でもなあ
「えゝ いいじゃんいいじゃん」
お前に任せていいのか…
「……………何のことかな？ かな？」
……………何なんだよそれ……………
「『ひ〇らしのなく頃に』の竜宮〇ナだよ」
……………はあ……………！？

ひ○らしのなく頃に——竜騎○07が作り出した同人ノベルゲーム
凄まじいヒットをみせ、ゲームやTVにも進出した
最近では映画化したが……作者はまだ見ていない、というより見
る気ない

原作最高

因みに竜騎○07の最新作は『うみね○のなく頃に』 by 作者

…何なんだよ…さっきのは…？

「気ニシナ〜イ」

………パクツてんじゃねえよ！！！！

怒られる！！ コ○コロさんに怒られるから！！

「というワケで送って」

ああ、 ドコにでも行け

シュパン！！

彼女を送るついでに俺も第三青界に向けてテレポーションする
コイツ一人に任せられるかよ

〜第三青界〜

「……………ファル○ンキツク！！」

「ああ！？」

「今だ！！ 回転○り！！」

「ああ！？ ピカチ○ウ！！！！」

「貰ったあ！！！！」

「お、やるな」

あ、 お久し振りです

スチルです

え？今何しているんだって？

大○闘・スマツシユブラ○ーズDXっていうゲームだそうです

うゝん、 中々楽しいですね。これ

因みに選択キャラクターは私がミュ○ツゝ、 凰輝さんがファル○ン、 雷華がピカチ○ウ、 フィアがリン○だそうです

「ハハハ！！ のんびり解説している暇はないぞ？ ファル○ンナツクル！！」

「うわぁ！？」

「スマツシユ○段斬り！！」

「隠すところ全然違いますよ！！ ってわぁ！？」

「甘いんだよ！！」

……結果発表ゝ

1位 凰輝さん

2位 フィア

3位 私

4位 雷華

「10回連続だな」

ええそのとおりなんですよ。

10回連続で雷華が最下位になっているんです

「あ、 次変わって」

「…それは又大変な……」

「……まあなんとかしてくれるはずですよ……」

「」

全く、勝手に凰輝さんの家に住むことが決まったレナートは勝手に煎餅を食べている

だから、

「人のモノ勝手に食べているんじゃないやねえよ」

ドカァ!!

「!? ゲフゲフ……!! ……」

こうして凰輝さんが怒るのももつともで……

「というわけでこれからお前ら全員で一緒の部屋で雑魚寝な」

「どういうワケだよ」

「だよ」

………え?

………今なんて?

………同じ部屋で……?

「嫌です! 絶対嫌です!!!」

「え!? なんですか?」

「レナートは寝相が悪すぎるんです!!!」

「文句言わない」

「え!? ですが!!!」

「IUNA」

「はい……」

怖いです……笑顔で殺気出さないでください……

ほら、他の皆も怯えて……

いませんね一人だけですが

「凄いい!! どうやってするの!?!」

言わずもがなレナート

期待に目を輝かせないでください……

「いいか? 外見では笑顔を保ちつつ、心の奥底では『コイツなに考えとんじゃボケエ。なぶり殺されてえかオラ』と、考えるんだ」

怖ああああああああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああ!!!

さつきそう考えていたんですか!?

「なるほど!!」

「何故に納得!?!」

「怖!?!」

「『兄貴』って呼ばせてくだせえ!!」

「イトモ!!」

「なぜに!?!」

こうしてレナートは凰輝さんのことを兄貴と呼ぶようになりました。

……

べ、別に羨ましくないのですから!!

其の貳拾：魔王降臨？それでも彼には関係ナシ（後書き）

べ、別にスチルはツンデレじゃありませんから！！

其の貳拾巻：これが何気ない朝だと彼女は悟る（前書き）

サブタイトルとあんまりあってないかも…
まあいいや（よくない）

其の貳拾巻：これが何気ない朝だと彼女は悟る

「……………いったあ……………」

突然の痛みに私、雷華は目を覚ました
見ればレナートが私のお腹を蹴っていました……………
他の二人も同じ様な被害に……………うっわあ……………
フィアは私と同じ様に蹴られてました
お腹ではなくて顔面ですが

「○▼□▲\$*&〒♀#%†ㄒキ」

すっごく悶えてます。

というか呻き声凄まじいなあ……………
どんな夢を見ているんだろう……………？ 気になります……………

スチルさんは……………枕にされています
お腹に頭を置かれています

「うっうっ」

冷や汗ダラダラ流しながら呻いています
コッチはどんな悪夢を……………

「んっむっ？ んっ」

三人を下にして一人だけ幸せそうに寝ているレナート
なんか腹立つなあ……………
あ、凰輝さん

つて
……

「Geeetuuuup」

「起きています！！ 私には起きています！！」

バキヤ！！
グシャ！！
メキヤ！！
バキツ！！

「ふぎや ああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああ
ああああ！?!?!?!?」

□

「
H
A
H
A
H
A
♪
いい悲鳴だ
こえ
♪
」

ひ
ひ
ど
い
…

鬼だよ……この人……

「起きろやコラ」

は、
はひ……

とりあえず起きました

「朝飯出来てるぞ」

は い

朝御飯だあゝ
♪

wait a minutes

♪
『いただきまあ〜す』

「いただきます」

今日の朝御飯は〜

白米に〜 お魚に〜 お味噌汁〜

いただきまあ〜す

パクツ…

.....

『!?!?!?!?』

「」

「H A H A H A いい悲鳴だ〜」
こえ

「二度目だぞ…それ……」

かりや!?! かりや!?! かりやい!?!

本当は『辛!?! 辛!?! 辛い!?!』って言おうとしているんだよん by 作者

「タバスコたっぷり入れてやったから〜」

「たへ!?! 食へもにょにいたしゅりやしないでくりやちやい!!」

「

スチルがなんと言おうとしているか、 当ててみよう by 作者

「あはは〜 スチルったら何を言っているのかな〜」

「タバスコを直接入れたら分かるんじゃないかなあ〜?」

「ふにや!?! やめっ!! やみゅ!! やめ…ふみやああああ

ああああああああああああああああああああああああ

ああああああああああああああああああああ！！！！！！」

スチルさあああああああああああああああああん！！！！！！

くく朝食終了くく

「ひたたたた……」

「だ、大丈夫ですか……？」

「全然……」

大変ですね……

まあ今回は私じゃなくて良かった」

「雷華く貴女もしかして『私じゃなくて良かった』とても思っていた……？」

ぎつくう！！！！！！

「……ソ、ソナコトナイデスヨ……？」

『嘘丸出しじゃん』

ば、バレたあ……

「H A H A H A ！じゃあ雷華も同じ様な目に合うか」

え？ なに？ その唐辛子……

つて、フィアにレナート！？何で私の体を押さえて……

え？ やめ……

ふぎゃ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ ああ
!!!

「ああ…隣れ…」

シュツ!!

「うわっ!!」

「………今みたいに金属バットが飛んできます……
怖い……」

「先生ー俺眠いんでいつもの所でサボっときます」
『堂々とサボリ宣言!?!』

「上等じゃあオラ!! 今日こそ貴様を血ヘドの海に沈めてくれる
!!!」

『教師がそんなこと言っちゃっていいの!?!』
「あ、じゃあソコで立つときますんで」

凰輝が指し示したのは教室の後ろ

「ソコならいいぞ」
『いいんかい!!』

「………なんだろう……
このクラス突っ込みがむちゃくちゃ上手だ……
ギネス載るんじゃない?!? この一致団結力は……」

でも凰輝が譲歩(?!?)したのはただ単に早く寝たかっただけ
それ以上でもそれ以下でもない
え? 立ったまま寝れるのかって?
寝れるんだよ…… 凰輝は……

でも凰輝の寝顔楽しみなんだ〜♪

「……………なんでですか？」

「あ、雷華ちゃん♪続きは次回ね♪」

『続くんかい！！』

うん、やっぱりこのクラスの突っ込みは凄まじいね

其の貳拾貳：彼のクラスは突っ込みクラス・前編（後書き）

やけに男キャラが少ない気がします…
どしよ

其の貳拾参：彼のクラスは突っ込みクラス・後編（前書き）

1週間近く投稿してませんでした…
ドメン（ド！？）

感想募集中です

其の貳拾參：彼のクラスは突っ込みクラス・後編

「…でだ、この北条早雲はだな…」

………どうも青葉です

前回、紗さんが中途半端に終わらせてしまったので再び教室の風景です

「そして、中部地方では………長尾氏に…」

………歴史好きにはもう分かりましたよね？

ただいま、戦国時代を勉強中です

みんな真剣です

………だって………

「Z Z Z …… Z Z Z ……」

あ、隣の影薄が寝た

それに気が付いた重松先生

他の生徒は一気に防御体制へ

「柿田！寝るな！！」

シュツ！ゴキツ！！

「ぎゃあああああああ！！」

………こうなるからです

まあ自業自得ってことです

「……………」

もう一人寝ている人がいます

「隙あり！！」

凰輝くんです

シュツ！

「ファルファニオン！！」

『なんだよそれ！？』

奇妙なセリフと共に回避する凰輝くん

うん、 みんなナイス一斉突っ込み

…………… ファルファニオンってなに……………？

…………… よく分からない

「ちっ！ またか……………」

「カルカニアン……………」

『カルカニアン！？』

…………… 悔しがる重松先生に変な寝言を言う凰輝くん。そして突っ込

むクラス

このやりとりは20回以上やっています

よくみんな飽きないなあ…

と、 ここで、

チャイム鳴らすの面倒くせ〜

「ちっ！ チャイムか…」

『さっきのが！？』

相変わらずみんなの突っ込みは鋭いです
訳分かりませんねこの学校

「級長！ 号令！」

「起立！ 気をつけ！ 礼！」

『ありがとうございます！！』

「シルフォニアス！」

『シルフォニアス！？』

なにかゲームでありそう…

……一応彼に敵意はありませんから

で、

「♪♪♪」

「紗さん、なんでそんなに嬉しそうなんですか？」

「よく見て♪」

……今日の紗さんは様子がおかしいです

どこかで頭を打ちましたか…？

で、クラス全員が立ったまま寝ている凰輝くんの顔を……

「ん〜」(ε)

顔を……

1. $\{ \}$
 2. $\{ \}$
 3. $\{ \}$
 4. $\{ \}$
 5. $\{ \}$
 6. $\{ \}$
 7. $\{ \}$
 8. $\{ \}$
 9. $\{ \}$
 10. $\{ \}$
 11. $\{ \}$
 12. $\{ \}$
 13. $\{ \}$
 14. $\{ \}$
 15. $\{ \}$
 16. $\{ \}$
 17. $\{ \}$
 18. $\{ \}$
 19. $\{ \}$
 20. $\{ \}$
 21. $\{ \}$
 22. $\{ \}$
 23. $\{ \}$
 24. $\{ \}$
 25. $\{ \}$
 26. $\{ \}$
 27. $\{ \}$
 28. $\{ \}$
 29. $\{ \}$
 30. $\{ \}$
 31. $\{ \}$
 32. $\{ \}$
 33. $\{ \}$
 34. $\{ \}$
 35. $\{ \}$
 36. $\{ \}$
 37. $\{ \}$
 38. $\{ \}$
 39. $\{ \}$
 40. $\{ \}$
 41. $\{ \}$
 42. $\{ \}$
 43. $\{ \}$
 44. $\{ \}$
 45. $\{ \}$
 46. $\{ \}$
 47. $\{ \}$
 48. $\{ \}$
 49. $\{ \}$
 50. $\{ \}$
 51. $\{ \}$
 52. $\{ \}$
 53. $\{ \}$
 54. $\{ \}$
 55. $\{ \}$
 56. $\{ \}$
 57. $\{ \}$
 58. $\{ \}$
 59. $\{ \}$
 60. $\{ \}$
 61. $\{ \}$
 62. $\{ \}$
 63. $\{ \}$
 64. $\{ \}$
 65. $\{ \}$
 66. $\{ \}$
 67. $\{ \}$
 68. $\{ \}$
 69. $\{ \}$
 70. $\{ \}$
 71. $\{ \}$
 72. $\{ \}$
 73. $\{ \}$
 74. $\{ \}$
 75. $\{ \}$
 76. $\{ \}$
 77. $\{ \}$
 78. $\{ \}$
 79. $\{ \}$
 80. $\{ \}$
 81. $\{ \}$
 82. $\{ \}$
 83. $\{ \}$
 84. $\{ \}$
 85. $\{ \}$
 86. $\{ \}$
 87. $\{ \}$
 88. $\{ \}$
 89. $\{ \}$
 90. $\{ \}$
 91. $\{ \}$
 92. $\{ \}$
 93. $\{ \}$
 94. $\{ \}$
 95. $\{ \}$
 96. $\{ \}$
 97. $\{ \}$
 98. $\{ \}$
 99. $\{ \}$
 100. $\{ \}$
 101. $\{ \}$
 102. $\{ \}$
 103. $\{ \}$
 104. $\{ \}$
 105. $\{ \}$
 106. $\{ \}$
 107. $\{ \}$
 108. $\{ \}$
 109. $\{ \}$
 110. $\{ \}$
 111. $\{ \}$
 112. $\{ \}$
 113. $\{ \}$
 114. $\{ \}$
 115. $\{ \}$
 116. $\{ \}$
 117. $\{ \}$
 118. $\{ \}$
 119. $\{ \}$
 120. $\{ \}$
 121. $\{ \}$
 122. $\{ \}$
 123. $\{ \}$
 124. $\{ \}$
 125. $\{ \}$
 126. $\{ \}$
 127. $\{ \}$
 128. $\{ \}$
 129. $\{ \}$
 130. $\{ \}$
 131. $\{ \}$
 132. $\{ \}$
 133. $\{ \}$
 134. $\{ \}$
 135. $\{ \}$
 136. $\{ \}$
 137. $\{ \}$
 138. $\{ \}$
 139. $\{ \}$
 140. $\{ \}$
 141. $\{ \}$
 142. $\{ \}$
 143. $\{ \}$
 144. $\{ \}$
 145. $\{ \}$
 146. $\{ \}$
 147. $\{ \}$
 148. $\{ \}$
 149. $\{ \}$
 150. $\{ \}$
 151. $\{ \}$
 152. $\{ \}$
 153. $\{ \}$
 154. $\{ \}$
 155. $\{ \}$
 156. $\{ \}$
 157. $\{ \}$
 158. $\{ \}$
 159. $\{ \}$
 160. $\{ \}$
 161. $\{ \}$
 162. $\{ \}$
 163. $\{ \}$
 164. $\{ \}$
 165. $\{ \}$
 166. $\{ \}$
 167. $\{ \}$
 168. $\{ \}$
 169. $\{ \}$
 170. $\{ \}$
 171. $\{ \}$
 172. $\{ \}$
 173. $\{ \}$
 174. $\{ \}$
 175. $\{ \}$
 176. $\{ \}$
 177. $\{ \}$
 178. $\{ \}$
 179. $\{ \}$
 180. $\{ \}$
 181. $\{ \}$
 182. $\{ \}$
 183. $\{ \}$
 184. $\{ \}$
 185. $\{ \}$
 186. $\{ \}$
 187. $\{ \}$
 188. $\{ \}$
 189. $\{ \}$
 190. $\{ \}$
 191. $\{ \}$
 192. $\{ \}$
 193. $\{ \}$
 194. $\{ \}$
 195. $\{ \}$
 196. $\{ \}$
 197. $\{ \}$
 198. $\{ \}$
 199. $\{ \}$
 200. $\{ \}$
 201. $\{ \}$
 202. $\{ \}$
 203. $\{ \}$
 204. $\{ \}$
 205. $\{ \}$
 206. $\{ \}$
 207. $\{ \}$
 208. $\{ \}$
 209. $\{ \}$
 210. $\{ \}$
 211. $\{ \}$
 212. $\{ \}$
 213. $\{ \}$
 214. $\{ \}$
 215. $\{ \}$
 216. $\{ \}$
 217. $\{ \}$
 218. $\{ \}$
 219. $\{ \}$
 220. $\{ \}$
 221. $\{ \}$
 222. $\{ \}$
 223. $\{ \}$
 224. $\{ \}$
 225. $\{ \}$
 226. $\{ \}$
 227. $\{ \}$
 228. $\{ \}$
 229. $\{ \}$
 230. $\{ \}$
 231. $\{ \}$
 232. $\{ \}$
 233. $\{ \}$
 234. $\{ \}$
 235. $\{ \}$
 236. $\{ \}$
 237. $\{ \}$
 238. $\{ \}$
 239. $\{ \}$
 240. $\{ \}$
 241. $\{ \}$
 242. $\{ \}$
 243. $\{ \}$
 244. $\{ \}$
 245. $\{ \}$
 246. $\{ \}$
 247. $\{ \}$

か

「ファルファニアス」()

「ファルファニアス!?」

「か」

か
:
?

「可愛いいい
いいい
いいい
いいい
しいい
いいい
しいい
しいい
いいい
いいい
しいい
しいい
いいい
いいい
しいい
しいい

[illegible]

『青葉（ちゃん）！？』

「あ、青葉！？どうしたの！？」

[illegible]

wait a minute

……どうも紗です

今の状況は凰輝の寝顔を見た青葉が奇声（？）を上げながら凰輝に

其の貳拾参：彼のクラスは突っ込みクラス・後編（後書き）

なにか自分でもおかしいような気が、
でも、なにがおかしいかは分かりません
未熟だなあ…

其の貳拾肆：彼らは意外にできる人（前書き）

今回はあんまり本編とは関係ないような…

「どうも！ 篠田恭助しのたきようすけです！！

凰輝たちと同じクラス、身長はやや長身、体格もやや大きめいつも首にかけているヘッドフォンと頬についた二つの切り傷が特徴です！！

部活動は剣道部、こうみても全国大会出場経験があります！
よろしく願います！！」

はい、篠田君は其の式拾式にほんの少しだけ出ています
重松先生に責任を押し付けられました

「あれは本当に辛かった……」

……悲惨だなあ……

次は、しげまつりっか重松六花先生！

「……どうも、重松六花だ

凰輝たちのクラスの担任、担当教科は日本史

長い黒髪のポニーテールが特徴だ

部活動の顧問は剣道部

特技は、りゅうびのけんかの新撰組二番隊組長永倉新八が編み出したという
龍尾の剣”とバット投げだ

……一応既婚者だ

だから惚れちゃダメだぞ」

……いやいやいや……

「何が“いやいやいやいや”なんだ？」

一応これ小説なんで
姿は見えません

……重松先生は其の伍と其の弐拾弐、其の弐拾参と結構出ています

「人徳だ」

……そういうことにしておきましょう

さて、コレからは新しく出てくる人たち！

まずは………ながたにかな永谷加奈ちゃん！

「うつす！ 永谷加奈だ

凰輝たちとは先輩、後輩にあたるぞ！

所属は女子バスケ部

青葉と同じクラブだ！

キャプテンを任せられている！

これといった特徴はないショートカット、つり目の女！

今狙っているのは……フフフ」

………気になるけど聞かなかったことにしましょう

次は………つてあれ？

一回出てきてますよ

「気にするな！

俺は茂田根津しげたねつ！！

空手部の主将だ！

必殺技は正拳突き！

よろしく!!」

……あなた其の陸に出てますよ
ほら、 鳳輝に桜花正拳を喰らってた

「気にするな!!」

……色々と突っ込みたいですが、 さっさと進めましょう

……あれ? もう最後?

……失礼しました

……ではいよいよ最後!

あんざい みちぢね

安西道真君です!!

「……はじめまして

…安西道真です

… 鳳輝たちとはクラスが同じ……

鳳輝よりも長い黒髪が特徴……

特技は瓦割り……

……最高記録は15枚

……よろしく……」

……く、 暗いなあ……

「……よく言われる……」

瓦割りが特技って…… はっきりいってそんな風には見えないなあ

「……趣味はヤンキー狩り……」

其の貳拾肆：彼らは意外にできる人（後書き）

マジで出すかどうか考えてねえ！！
次回があるかすら考えてねえ！！

其の貳拾伍：彼女が我が家を訪れた

…こんにちは…レニーです
今回は初めての私視点…
…頑張ろう…

ピンポン♪

ただいまの位置…凰輝の家の前…

「はい…なんだレニーか」
「…遊びに来た」
「おう♪入れ入れ♪」

やけに楽しそう…
なにか良いことでもあったのかな…？
考えても無駄だからお邪魔します…

……凰輝の家は結構広い
コレなら…あの雷華やフィアとやらも楽に住まわせることが出来
ただろうな…

……最近、新たに2人入ったって聞いたけど…
…この家は5、6人どころじゃなくて、9人位は住めそうな
気がする…

……私が住んでもいけるかな？

「ジャッジャジャーン♪本日の主役の登場♪」

「……ああああああああああああああああ！！レニ
ーさん！！」

「た、助けてえ〜！！」

「誰？レニーって……」

……扉を開けるとソコは地獄絵図のような世界でした……

な、わけなくて……

……いや、近いんだけど……

……え？どんな状況だって……？

……雷華たち4人が上の物干し竿みたいなのから吊るされていて
その下には熱湯が……

……沸騰しているし……落ちたら熱いこと間違いない……

「レニー、これ持って」

「……？分かった……」

……凰輝から渡されたのはハサミ

……一体何をするつもりなんだろう……？

「このロープの束の内、一本を切れ」

……と、凰輝が取り出したのは16本近くあるロープの束……

……その先には雷華たちを結びあげ、吊るしているロープが……

……早い話、繋がっています……

「早くしないと皆落ちるよ」

「……………え？ ……あ…」

…………… 鳳輝が指し示した先には、 彼女たちを結びあげていたロープの内の一本らしきものがありました

…………… 途中で火がついた口ウソクが結ばれている……………

…………… このままではいずれ燃え尽きて切れてしまう……………

…………… 彼の言うこともあながち嘘ではなさそう……………

「…………… よし、 じゃあこれで……………」

…………… 私は思いきって、 ロープの内の一本を断ち切った……………！

ジヨキン！ …………… ひゅうううううう…………… ジャッパン……………！

「熱い！！ 熱い！！」

「あちちちちち！！」

…………… ありやま

落ちたのは雷華に大人の女性っぽい悪魔でした
哀れ……………

「原因貴女でしょう！？」

「…………… 何か文句でも……………？」

「イエ、 アリマセン」

…………… 軽く殺気を出して威圧するとアッサリと土下座に移る雷華
うん、 OK

「いやいやいや………」

「…アタシたち一体いつ助け出されるの…？」

残った2人がぼやく

「ハイ♪落下あゝ♪」

ジヨキン……！！

ひゅうううううう………ぼっちゃああん！！

「あちっ！？ あちぢぢぢぢ！？」

「！？！？！？！」

哀れ………助かる道はなかったみたいだね……

………あれ？　そういえば、何故この4人は吊るされていたの…？

………まあ、いいや

其の貳拾陸：神も虫歯になっちゃった（前書き）

最後にちょっとしたお知らせが
いや、ちょっとじゃないかも……
まあいいや、ちょっとで（オイ）

其の貳拾陸：神も虫歯になっちゃった

「…歯が痛い……」

雷華ちゃんどうしのかな？　かな？

あ、　ちゃお　レナートだよん

今日は兄貴（鳳輝）が『暇潰しになんか創って売ってくる』って行
ったつきりかれこれ6時間

正直暇だなあ……

で、　さつきから雷華ちゃんが呻いているの
なんで？

「…もしかして雷華さあ…虫歯じゃない！？」

「……虫歯？」

「虫歯は口内の細菌が歯に付着した糖分を酸に変化させ、　歯を溶
かすことです

　歯の溶け具合、　虫歯の進行具合によってC1、　C2、　C3
などと呼ばれ、　最後のC5になると歯が殆ど壊死（体の組織の一
部が死ぬこと）し、　抜か　なければいけなくなるんです

だから、雷華歯医者に行きましょう」

「え？　え？　は、はい……」

……なに言っているの、　スチル……？

訳わからん

雷華もつられてるし……

「ただいま」

「兄貴い！！　おかえりい」

「レナートただいまあ」

ベッチ——ン!!!!!!

「キャウツ!!」

グリー!!

「はうん!!」

ああ……兄貴だ…

この容赦しない踏みつぷりは間違いなく兄貴だ…

「……レナートってMなんですか……？」

「違うよ？ 多分」

『多分！？』

多分、

なにか文句でも？

「凰輝ーなに創ってたんだ？」

「木彫りの不動明王」

『すごっ!!』

凄いのか？

私だってその気になれば……

「2500万で売れたぜ」

『たかつ!!』

「流石兄貴

私は15両位しか売れなかったよ」

「虫歯の治療って…歯を削るんだよ…」

「…痛いんですか…？」

「めちゃくちゃ痛い」

「…わぁ…」

怖い♪怖い♪

「……やっぱり歯医者に行くのを止」お前に拒否権なし」………はい」

あはは〜♪

かわいいそう〜♪

「…変わってください…」

「I Y A D A」

「レナートなに言ってるの!？」

あはは〜♪

なんだと思う〜♪

〜 wait a minute〜

ギューイイイイイイイイイイイイイイイイイン!!

「うわぁああああああああああああああん!!」

「はい頑張ったね」

「ヒック……ヒック……もうやだ………」

子供が泣きながら出てきた
目には大粒の涙が

「こ、怖い……」

「諦める

虫歯になったお前が悪い」

「……か、帰って「言つとくけど逃げ出したら
ピ——」
だ
から」頑張ります……」

「悲惨だね」

「なんで楽しそうなんですか……」

「他人の不幸ほど楽しいものはないんだよ」

司会はまだまだ私、レナートがお送りします」

「はい、次の西上雷華様」

「え？ は、はい！」

受付のおばさんに呼ばれ思わず立ち上がる雷華
西上って名字は兄貴が『めんどくさいから西上でいいんじゃない？
で決めました
』

で

ギューイイイイイイイイイイイイイイイ！

「ひぎやあああああああああああああああああ……」

ただいま雷華ちゃん歯の治療中」

「いい悲鳴こえだなあ……」

「いい悲鳴こえかあ……」

あ、雷華ちゃん出てきた

「フエツ…フエツ…もうやだあ……」

「お疲れ、雷華

後でシュークリームかなんか買ってやるよ」

「わあゝいゝ」

「わあゝいゝ」

「レナートには買ってやんねえよ」

「ええええええええええええええええええええええん！

酷いよお！！」

「H A H A H A っいい悲鳴こえだゝ」

うう………

「わがままですね……」

其の貳拾陸：神も虫歯になっちゃった（後書き）

実は、私、針井龍郎先生主催の七夕小説企画『星に願いを』に参加しました

一応、短編で

ファンタジー＋コメディ風味に作っている途中です（途中かい）

7月1日から7月7日までに投稿するのでよろしくおねがいします

其の貳拾漆：彼らと共に学校生活

「ふあああああ……」

……お、はじめまして……かな？
篠田恭助と名乗ります

「……なんですか、その挨拶は……」
「思考読まないでください！」
「うるせえよサムライヤローが」
「侍を馬鹿にするな……！」

今の日本があるのも侍のお陰なんだよ！

「……あの……恭助さん……」
「……なに？ 雷華ちゃ……うおわあ……！」
「なにごちゃごちゃ話してる……！」

金属バットがキタ——！！

………え？ なんで雷華ちゃんを知っているかって？
えゝと、事の始まりは20分前………

「うーっす」

「遅刻だ西上！！ “ファイナルスパイナル”！！」

「それ直訳すると“最後の背骨”だぞ

ついでに“桜花正拳・乱”」

「鳳輝が突っ込んだ！？

ついでにで必殺技！？」

スパパパパパ！！

吹き飛ぶバット

それは勢いよく襲いかかった

クラス全員に

バキヤ！ ゴシャ！ ガアン！ ドスツ！ ゴリイ！ メキヤア！

全員に命中はしなかった

哀れな6人に命中

最後の音だけはおかしかったよな？

「スパイナルって背骨って意味だったのか！？」

「今さら知ったの！？」

作者もついさっき知りました

作者……しっかりしてくれ……

と、……だ、誰だ？ こいつら……

現れたのは4人の女性たち

いずれも美人だ

2人は俺たちと同じ年くらい

1人は11、 2歳くらいの少女
最後の1人は20歳前後の美女

「あゝこいつらはだな……」

そうして彼女らについての紹介が始まった

こうして1人、 約5分。 彼女らの説明に費やした
その間重松先生は微笑みながら凰輝の紹介に耳を傾けていた
あゝこうして笑っていると重松先生は美しいよなあ……

……… いつもそうしていればいいのに………

〓〓回想終了〓〓

「篠田あ！ ついでに柿田あ！ てめえら全員死刑だおらあ！！」
「
いきなりなんだ！？

「なんで俺まで！？」
「ノリじゃね？」

「理不尽だああああああああああああああああ！！」
「

ゴキヤア！！

叫ぶ柿田に対し無情なまでに当てられる金属バット
額に受けた柿田はそのまま椅子から転げ落ちる

「…憐れな…」

「…実はそう思っただけだよ…」

「あ、分かった？」

「…顔が笑ってます…」

怖いなあ…

もしかしてレナートって人は（人じゃないけど）ドSなのか…？

ファルス！ フォルス！ フェルス！ ファルス！

「…つと、今日はここまでか」

『今のがチャイム！？』

やっぱりオカシイだろこの学校！！

さっきのものはチャイムの欠片もねえだろ！！

「お昼だあ…」

「はいはい」

待ちに待った？ 昼休みの時間

雷華とフィアが勢いよく階段をかけあがる

「凰輝さ——ん！！」

「早く早く！！」

「……………“衝覇正拳・双”^{ふたえ}」

ドガァ！！ バキヤ！！

『鬼か！！』

「うるせえんだよあいつら」

だからっていきなり必殺技放つな！！
思わず紗さんと突っ込み重なったぞ！！

「お弁当♪お弁当♪」

「へへーん♪いいだろ♪」

4人はどうやら凰輝に作ってもらったみたいだな
まずは雷華から……

“雷帝”（ご飯の上に海苔で雷、オカズを使って帝）

『すごっ！！』

「苦労したぜ」

「じゃ、じゃあアタシは…」

“爆炎”（雷華のと同じ様に）

『またすごっ！！』

どうやってやったんだ！？

しかもさっきより難易度高くねえか！？

「私はなにかな〜♪」

“闇乃女王”（海苔で闇乃、オカズで女王）

『すげえ！！』

4文字いつちやった！！

「じゃ、じゃあわ、私は……………？」

“鉄帝蓮華草”（海苔で鉄帝、オカズで蓮華草）
てつていれんげそう

『何故に蓮華草！？』

「なんとなくだ」

5文字かよ！！

どんどん難易度がつてるぞ！！

……………じゃあ凰輝は？

“黒翼滅龍牙・滅調”（海苔で黒翼滅龍牙、オカズで・滅調）
こくよくめつりゅうが ほつていじようへ

『すげえええええええええええええええええええええええ！！』

「もうこれ芸術じゃん！！」

紗さんの突っ込みで俺の頭に“弁当アート”なるものが浮かんだ
弁当に彩られた様々な文字……………

……………なに考えてるんだ…俺……………

……………あれ？

「…なんか忘れてるような……」

「私も……なんだろう？」

「…思い出せない……」

「まあいいんじゃない？　忘れたってことは大したことじゃなかった
ってことだろ」

「………んーそうだな

まあ気にしないでおう

美女たちに囲まれてでの食事なんてそう滅多にないことだし

くく一方その頃くく

「…うう………」

みんなから忘れられた影薄こと柿田

寂しく夏の風が彼の頬を撫でていった………

其の貳拾捌：彼の愛用妖刀初登場！（前書き）

…新キャラ（？）登場

あと、後半ややシリアスに

其の式拾捌：彼の愛用妖刀初登場！

「オラオラオラア！！ このメスブタがあー！！」

「ああ！ もつと！ もつとおー！！」

「……………なに見てるんですか？」

「S Mビデオ」

「……………S Mビデオ？」

「良い子は気にしちゃいけないモノさ」

「なら白昼堂々見ないでください」

……………良い子の皆は気にしちゃダメです

スチルです

雷華とフィアが“？”を浮かべてる間にビデオを止めましょう

「そういえばさーっ兄貴っ」

「ん？」

「この刀ってなに？ 工具入れに入っていたんだけど」

レナートが取り出したのはいかにも妖しげな刀

妖刀と例えるべきでしょうか

……………というより工具入れに刀って……………

「ああ“黒龍”か忘れてたわ

元の場所に戻しといて」

「はいっ」

《待て待て待てえ！！》

「！！！！！！」

突然刀から声が！？

ウィッシュブレイド

意思を持つ剣！？

始めて見た……………

「なんだよ鋸ノコギリが」

《私は鋸ではない！！“妖刀黒龍”だ！！》

「分かったよ“妖刀鋸丸ノコギリマワ”が」

《鋸ではなああああああああああああああ！！！！》

……………なんだろう…誰かとダブる…

……………気のせいですね、うん

「……………ああ、コイツはこの……………妖刀黒龍だ」

「今、鋸って言いかけませんでした……………？」

「言ってねえが」

《言いかけただろ！？》

「へし折られたいか……………？」

《ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい》

「D A M A R E」

《は、はい……………》

……………妖刀相手でも容赦ないですね…

「なんで凰輝さんが“意思を持つ剣”を持っているんですか？」

ウィッシュブレイド

「ノリだ」

「ノリで持てるものなんですか！？」

「すげえ！！」

「さすが兄貴！！」

なんて勘違いを!?

凰輝さんも変なことを言わないでください!!

《そんなわけないだろ!!

私は西上家に代々伝わる名刀だ!!

……いや妖刀か》

「ですよ……」

「まあ鋸でも切れ味は一級品だよ

手入れは1ヶ月に1回には確実にしているしな」

《鋸ではない》

「でもなんで黒龍は意思を持っているんですか？」

「気合いだ」

「そんなわけないでしょうに……」

さつきから話しているのは私と凰輝さんと妖刀・黒龍の2人と1本だけ

後の面々はみんな頭に“？”を浮かべています

《はるか昔に悪霊として都を荒らしていたのだが

西上の奴にボコボコにされた挙げ句

刀に封印されて……

それ以来、妖刀として崇ろうとしていたのだが

西上の奴らはしぶといし……挫けないし……逞しいし……

明治という時代になってから廃刀令とやらで出番なくして……

……》

………んゝなんだろう

凄く可哀想な気がしてきました

やろつとしていることはよくないことなのに………

「まあ俺にもあまり必要ないからこの現代で鋸としか利用法がないからなあ……」

《酷いなオイ》

「凰輝さんは剣術強いんですか？」

「黒龍となら鉄骨80本ぐらい楽に叩つ斬れるぞ」

『すごつ！！！！！』

《ふん、当然だ》

「包丁でも鉄骨は9本は斬れるが」

「本当に人間かよ……」

フィアの嘆きを軽く受け流し頷く凰輝

……あれ？そういえば……

「レナートはなんで工具入れを開けたんですか？」

「……ああ、なんか壁が壊れてて……」

行ってみると確かに壁に大穴が

……なんで？　ここは誰も使つてはいないはず

「……感じるな」

「？　なにがですか？」

「お前らと同じ様な気配が……」

私たちと同じ……？

それってこの壁を壊したのは神や悪魔つてことですか……？

「……ついでにほら……穴に焦げた跡がある……誰かが雷か炎を当てたんだろっ……」

『……………』

まさか…まさか…ね…

「……………ついでに…」
『？』

バキィ！！

「八つ当たりだ」

「ふみゅ」

「きゅ」

目を回す雷華とフィアを見つめ

私は改めて西上凰輝の怖さを悟った……

あの穴は材料調達から修理まで全て凰輝さん1人でやり、
3時間半で修復しました
わずか

あの穴は半径90cmはありましたよね……………

其の貳拾捌：彼の愛用妖刀初登場！（後書き）

短編小説『さあ、この広い大空に』を掲載
いつか言っていた七夕小説です
そっちも見てください
感想もよろしく

其の貳拾玖：彼らの正体は未だ不明（前書き）

今作初めてのオールシリアス入りまーす！

其の貳拾玖：彼らの正体は未だ不明

くくくくくく

「……………で？ お前は勝手に穴空けて戻ってきたってわけか……………」

読者諸君は覚えているだろうか

其の陸の最後に出てきた謎の男……………いや、墮天使といった方が正確か……………」

とりあえず男にしておく（適当だなオイ）

「え、ええ……………」

そんな男の前にいるのは魔物、としか例えようのない風貌だった

「……………お前には、奴の観察を命じた筈だ……………何故に勝手な行動をした……………」

周りには千差万別であるが皆、魔物、としか例えようのない奴らであった

「……………いえ……………私の翼をもぎ取った女神がいたもんですからつい……………」

ゴウー！！

「……………！？」

ぎゃああああああああああああ……………！！！！！！
「……………」

魔物は弁明を全て言えず、突然火だるまになって燃えだした！！

「私情では決して動かない……お前らはそう誓ったよな……？」

もはや、完全に消し炭になった魔物に冷徹な眼差しを向けると男は薄く笑う

その笑みに周りの全てが凍りついた様に動かなくなった

「……………ルシファー様」

突然現れたのは巨大なカラスだった
翼を2対もった誰が見ても特殊なカラス

「……長月か……」

「ええ……」

……あの少年の正体分かりました……
西上鳳輝、四神流の現継承者です」

『！？！？！？』

四神流、現継承者と聞き

男——ルシファーは目を見開く

それに吊られるように周りの魔物たちもざわめきだす

「……………“四神流”っか……」

意外な強敵だね」

コチラも其の陸で出ていた女性
名をリリスといった

「……リリス……手はあるのか……？」

「ごめん。 五里霧中」

「リリス様…もう少し考えては…？」

魔物の1人（1匹？）がリリスに言う

だが、 リリスは悪びれることなく言い返す

「四神流は圧倒的な強さだよ

何万の軍勢に、何百の策があっても倒せるとは限らないわ」

「確かに……それにあの鳳輝という奴は四神流の歴代でも相当の強さを誇るそうです」

長月と呼ばれたカラスの支援にリリスは威張り顔になる

「リリス…威張り顔になるなよ…」

ルシファアの呆れ顔に周りの雰囲気もいくばか気楽になった

だが状況は変わらない

「……さて、 どうするかだ……」

長考しだすルシファア

「…ルシファア様我らは下がっていた方が……？」

「…ん、 ああ………」

ボンッ！！

リリスを除く全ての悪魔は一斉にかき消える

………いや、 かき消えるというよりは移動した、 といった方が正

確か

ただ残された2人は黙りこむ

彼らの頭の中には様々な計画が練られていた

だが、それがなんの計画かは作者もまだ考えていなかった

「適当だなオイ！」

「誰に言っているんだ？」

〓第三青界〓

「……………」

「どうしたんですか？」

雷華の問いに凰輝はなにも答えず

蹴り飛ばした

ドッカア！！

「キャウ！？　」

「ちよつと黙ってる」

「は、はい……………」

スチルは凰輝が感じていた“何か”を悟った

いわゆる“妖氣”を

僅かに残った神氣に惑わされて気がつかなかったが

魔物や妖怪などが放つ妖氣をほんの僅かに本当に僅かだが確実にあったのだ

だが、大した実力ではなさそうだがそれよりも神氣の方が氣になったスチルは凰輝の考えが分からなかった

凰輝の考えに気がついたのは他に只1人

レナートだった

「…………妖氣…………か…」

薄い笑みからは闇に長けた者らしい邪悪さが浮き出ていた

だが、彼女の笑みに気づいたものは誰1人としていなかった

其の貳拾玖：彼らの正体は未だ不明（後書き）

冗談抜きで話は進んでます

彼らはいわばラスボス

でも、目的もなんも考えてませんww

其の参拾：彼と共に確認タイム・弐（前書き）

今回は本編とは全く関係ありません

其の参拾：彼と共に確認タイム・弐

遂に来たぜ！

其の参拾突破あー！！

『イエーイ！！』

『ハイハイおめでとうおめでとう（棒読み）』

……見事なまでに二極化してるなあ……

雷華「今回はキャラ整理！」

フィア「主な登場キャラを一挙公開！」

レナート「お楽しみにいっ！」

ちよっ……それ俺のセリフ……

凰輝「とつととやれ」

……ハイハイ

行くよ——（棒読み）

パラメーターは普通が1000だから

＋説明

・格闘

単純に戦闘力

・知識

いわゆる賢さ

・魅力

性格も含めた、人を引き寄せる力

家族は姉のみ両親は中学前から他界

肝心の姉も今アマゾンに虎を倒しに行っているとか……

茶髪の髪は肩まで届くほど長く、骸骨のネックレスは常に愛用している

あかのすず
十 赤野紗

・年齢 17 歳

・身長 162 cm

・体重 乙女の秘密で

・格闘 14330

・知識 1620

・魅力 9370

・人道 2400

・直感 13090

・趣味 掃除、他人を慰める、修行

・特技 突っ込み（？）

・流派 豊華流

凰輝とは15年以上の付き合いを持つ苦勞人

そのためか、突っ込みと危機判断力に長けている

常に虐められていたにも関わらず、性根が真っ直ぐに育ったため人望が多い

豊華流は本来古代武術の中では下の中だが、凰輝との組手リッチによって鍛えられたため、実力が高い

この小説では貴重な突っ込み役
とMの兄がいる

腰まで伸びた黒髪は美しく、いつも巫女服を着ている

†^{らいか}雷華

- ・年齢 16 歳
- ・身長 158 cm
- ・体重 マル秘で♪

- ・格闘 1355
- ・知識 765
- ・魅力 1015
- ・人道 1155
- ・直感 425

- ・趣味 昼寝
- ・特技 雷吸収
- ・属性 雷

第三青界に修行に来た見習いの神

雷神だが他の神にはない吸収能力がある

頭が少し悪く、とても鈍いため、よく凰輝に振り回される

神としてもまだまだ未熟で頑張っている…らしい

辛いものが大の苦手

家族構成は不明

だが、高等神の血筋を引くらしい……

紫のボサボサショートカットに小さい翼、服装は少し変わっている

†ファイア

・年齢 16 歳
・身長 161 c m
・体重 内緒だ

・格闘 1515
・知識 995
・魅力 1030
・人道 993
・直感 1005

・趣味 会話、遊び
・特技 武術
・属性 火

凰輝の家に修行に来た悪魔

雷華と比べて実力は上

剣の扱いが少し上手く、 火術と併用した攻撃も得意とする
修行は雷華と比べてしっかり頑張っている

家族構成はやはり不明

茶髪ของボサボサショートカットは下手すると凰輝よりも短く、
の短パン、 タンクトップを着ている 黒

なみまちあおは
十 並町青葉

・年齢 17 歳
・身長 155 c m
・体重……秘密

・格闘	1980
・知識	2115
・魅力	1500
・人道	2000
・直感	1075

・趣味 可愛いものの収集
・特技 怪力、格闘

凰輝と同級生

普段は冷静沈着で少し毒舌家だが、可愛いものが関わると人が変わる

バスケをしているだけだが、普通に武術も強い

異様なまでの怪力で、3mはある大剣を軽々と持ち上げる

家族構成はやはり不明

茶髪のショートカットは整えられており、十字架のネックレスを首からかけたり、左腕に巻いている

＋スチル

・年齢 417歳
・身長 144cm
・体重……言う必要あるのか？

・格闘	6110
・知識	9800
・魅力	2150
・人道	2000
・直感	3900

- ・趣味 知識収集
- ・特技 料理
- ・属性 鉄・武

鉄武神の1人

唯一神帝に無理矢理青界に落とされたが、今の生活に不満はないらしい

学ぶのが好きで、特に料理の勉強が大好き

子供扱いをなによりも嫌う

家族構成は不明

両親はいまだ健在らしい

鎧を着ており、銀髪のパニーテールはとても長い

＋レナート

- ・年齢 416歳

- ・身長 172cm

- ・体重 H I M I T S U

- ・格闘 8950

- ・知識 3250

- ・魅力 15900

- ・人道 800

- ・直感 5200

- ・趣味 他人弄り、料理

- ・特技 魔導剣、工芸

- ・属性 闇

闇に秀でた闇魔王の1人

子供の様な性格だがスタイルはよく、アホな男は必ずついてくる

戦闘技術に秀で、闇の力を宿らせた魔導剣を使う

得意武器は大鎌

半端ない強さの凰輝を慕い兄貴と呼んでいる

工芸が得意で昔は結構腕を振るったのだとか

家族構成は不明

輝かんばかりの金髪は腰にギリギリ届き、漆黒の翼はフィアたちとは比べ物にならない位大きい

＋レニー・クラウディア

・年齢 24歳

・身長 168cm

・体重 ……

・格闘 8050

・知識 2450

・魅力 5420

・人道 1100

・直感 9650

・趣味 修行、料理、観察

・特技 気配を消す

・流派 音無流

音無流の使い手

気配と感情が現れにくい、というまさしく暗殺者の才能を生まれ

つき持っている……というよりは貧しい環境のなかで自然に鍛え
上げられ先代に見いわれて、今にいたる
四神流の凰輝に挑んだが風邪にやられ、凰輝に助けられ惚れた
家族はいない
腰まで伸ばした茶髪をひとくりにし、漆黒の瞳は表情が読めな
いくらい深い

……こんなもん？

凰輝「普段の小説より長いぞ」

うう……反論できない…

柿田「おい！」

青葉「…次はいつするの…？」

柿田「こら！」

いつか……とりあえず区切りのいいときにしようかと……

柿田「無視すんな！」

紗「……どうしたの？」

柿田「俺の紹介は！？」

あ、ゴメン忘れてたわ

柿田「お——い——！」

柿田吾朗 かきたごろう

・年齢 17 歳
・身長 187 cm
・体重 74 kg

・格闘 920
・知識 880
・魅力 29
・人道 980
・直感 965

・趣味 …… なんだっけ？
・特技 …… あり？

影薄、ヘタレとしか例えようがない男
スポーツ刈りに近い髪型に左腕に着けた銀のブレスレットが唯一の
特徴

……… よし！ 今度こそ終わりだろ！

柿田「俺の紹介酷くね！？」

家族紹介は！？」

鳳輝「お前はこれでちょうどいいんだよ」

紗「…家族紹介不明が多いなんて…ズボラだなあ…」

……… 素直に傷ついた

雷華「さあ！ 今回の確認タイム、いかがだったでしょうか？」

フィア「いつも応援ありがとうございます！」

スチル「そして、これからもよろしく願いします！」

ちよっ「……！！ それ俺のセリフ……」

「……… もういいや」

「……… 次回から本編に戻ります」

これから“神様と私”をよろしくお願いします！

其の参拾巻：彼女らのお手製料理の味は？

「……ほいっと」

どうも、 スチルです

え？ 今なにしてるって？

ブレーンオムレツを作っているところです

今凰輝さんは紗さん家に遊びにいらしています

…… 紗さん頑張って

「ま〜だ〜♪」

「スチルさん♪早く〜♪」

「腹減ったあ〜♪」

後ろでブチブチ言っている3人組、 雷華、 フィア、 レナート

……… 今少しだけ凰輝さんの気持ちが分かった気がします…

殴りたい……

「ハイハイ…あと少しだから…」

憤りを必死でこらえ、私は言い返す

……… そうだ

「ねえ、 ついでだからあなたたちも料理を勉強してみない？」

『え〜〜』

「私はある程度できるよ」

「……… 意外……」

まさかレナートが料理ができるなんて……

思わず、 声に出してしまいました……

すると、

「ただいま……お、プレーンオムレツか」

「あ、 おかえりなさい」

「凰輝さんおかえり」

「凰輝」 おつかえりい」

「兄貴」

ダッ……ベチィ！

凰輝さんが帰ってきました

さっきの音は凰輝さんに飛び付いたレナートが凰輝さんに叩きつけられた音です

「なんか話でもしてたのか？」

「え？ あ、 はい実は……」

〃〃説明中 〃〃

「なるほどなあ……よし！ 料理やれ！！」

『ええええええええええええええええええ！？』

「YARE」

『はい……』

愚痴を言う2人に満面の笑みで殺気を放ちながら言い放つ凰輝さん
怖い………

で、

「では今から“第1回 神様料理講習会”謎の毒殺事件簿、犯人は誰だ〜”を開催します」

「イエーイ」

「…毒殺事件…？」

「……毒殺事件簿って……」

「……………不吉すぎます……………」

凰輝さんの謎のセリフに反応する私たち
それぞれの反応が誰かはご想像にお任せします

「今回作るのは“玉子焼き”です」

「ポピュラーだね」

「なお、今回の生け贄は赤野紗、並町青葉、
ディア、篠田恭介、そしてドコカの影薄です」
レニー・クラウド

「…生け贄ってなに……？」

「生け贄………」

「あれ？影薄って俺のこと？」

「では料理開始——！！」

『無視！？』

彼らの突っ込みを華麗にスルーし、いざ、料理開始い——♪

「完成いゝ」

「…こんなもんかな？」

「では、できたところで……毒味といきましょう」
「……毒味……？」

ドキドキ……

「…じゃあ紗はこれを……」

「…なんでこんなに白いの……？」

紗さんに渡されたのは、雷華の作った玉子焼き
パクツと一口……

「……………甘い……………」

…ですよね……

「…砂糖入れすぎ…」

……やっぱり……

「評価は？」

「100点満点中……」

「ドキドキ……………」

「-9点」

「マイナス！？」

意外と辛口な紗さんでした

「じゃあ…篠田！ お前にはこれだ！」
「

「少し醤油を入れすぎたかな？」

「…そうかもしれません…」

「……何点ですか？」

「……85点つてところでしょうか…」

「…もう少し上だと思ったんだけどな…」

修行不足かなあ…

で、最後

「影薄、喰え」

「……………イヤだ」

「KUE」

「は、はい……………」

最後の影賀さん……………だっ たっ け？

まあいいや

彼に渡されたのは、レナートが作った玉子焼き

……………ごめんなさい

私にアナタは救えません

一口……………

パタッ！

「影賀くん！？」

「……………ご昇天しましたね…」

「ご昇天！？」

「ありやりや？ 刺激が強すぎたかな？」

「刺激！？」

「とりあえず起きろ」

ぎしやあー!!

「さっきの音はなに!?」

紗さんの突っ込みも虚しく(?)

影賀くんは二度と目覚めませんでした……

注・影薄は死んではいません

彼は病院へ運ばれていきました

命に別状はないようです……たぶん by 作者

「やっぱり濃硫酸をいれたのがいけなかったのかな……」

猛毒じゃん

其の参拾貳：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・前編（前書き）

そついや、もうすぐ夏休み

宿題うざくないですか？

うざくない、と言ったあなたとは友達にはなれません

其の参拾貳：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・前編

どうも、日増しに暑くなる日々をお過ごしの皆様、このくそ暑い毎日をどうお過ごしでしょうか
久々に話をさせていただきます鳳輝です

「鳳輝〜！ 早く早く！！」

「兄貴い〜 ♪ あれやりたい♪」

騒いでいるのは悪魔2人

今、玉藻神社での祭りに参加しております
一応4人とも着物です

…………… 疲れた

元の口調に戻るか

神の2人はワタアメを与えて、大人しくしている

「もう1個食べていいですか？」

「♪〜♪〜」

2人とも幸せそうだ

たまにはこんな日があってもいいよな……………

とでも言うとも思ってたか…………… ククククク…………… ♪

「なんなのその邪悪な笑みは……………？」

「おや、紗じゃないか♪ どうしたんだい？」

「…なんでそんなに上機嫌なんですか……………？」

「おや、青葉も♪ 2人ともなんで巫女服でどうしたんだい？」

紗だけでなく青葉も巫女服、かえって新鮮だけど十字架は外した方がいいと思うのは俺だけではないはず

周りの奴らが殺気じみた視線を送ってくるのは気のせいではない

6人の美女に囲まれているからなあ……………ククク♪

悔しかったら俺みたいにもてみな、バーカ

「今日は青葉ちゃんと一緒に演舞をするから」

「演舞？」

「そうか、今年から青葉がパートナーか」

「パートナー？…なんのことですか？」

「演舞のパートナー」

玉藻神社の演舞は2人でするからな」

「へっ…」

「……………」

バキッ！ どかつ！ ゴキッ！ もりっ！

「ふぎや！？」

「内心『どうでもいい』って思っていたろ」

「さすが兄貴♪よく分かったね♪」

「……………ごめんなさい……………」

「……………まあ午後8時に始めるから見に来てね」

そう言つて紗と青葉は去っていく

「……………あれ？ 青葉さんは今年からって言つてましたよね？ じゃ

あ去年までは誰だったんですか？」

スチルの質問はもつともだ

神社裏で俺はカツラを被り、化粧、変装をして……………

「出来上がりつと」

『……………』

さすがに無言の面々
最初に口を開いたのはスチルだった

「私より女っぽい……………」

さいでつか

「兄貴綺麗……………」

嬉しいねえ

「…今度アタシに化粧の仕方を教えてくれ…」

「いつでもどうぞ」

「……………」

雷華は無言

……………そろそろ女装をとくか…
そもそもあんまり化粧なんて好きじゃないし

お？

演舞の話は次話か

……………早い話がネタ切れか

頼りないなあ…ダメ作者が

其の参拾貳：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・前編（後書き）

実は、うちの学校

宿題に読書感想文があるんです

書いたり、読んだりするのは好きなんですけど…

其の参拾参：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・後編（前書き）

夏休み1発目！！

あと、何回投稿できるかなあ…

其の参拾参：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・後編

ドンドンドンドン！

祭りの締め、ともいうべき最後の行事
祭囃子が始まった

司会はいかわらず俺、 凰輝が務めている

「…楽しみです、 どんな演舞なのか」

スチルは一番マトモな反応、 というよりは一番知的好奇心を剥き出しにしている
他の面々は…

「く〜」

「ん〜」

「オキロヤ♪オラ♪」

バキィ！！ グシャア！！

『ヒギヤフ！？』

雷華とフィアの馬鹿2人は立ちながら寝る、 という凄く器用なことをしていたが、 俺が半ばむりやり（というより強制的に）叩き起こす

で、 我が家一の大馬鹿者、 レナートは……
いねえな、 どこ行つた？

まあいいや、祭囃子が始まる
探すのはその後でもいいだろ

くく一方そのころくく

「……………ここどこ？」

チッス♪レナートだよ
早速だけど……………迷った……………
後で兄貴に怒られるよお……………

「ねえねえ、君1人？」

振り向けばなんか、少しかっこいい男が1人
あれ？これって“ナンパ”ってやつ？

「ねえ、もし良かったら一緒に遊ばない？」
「却下」

男の誘いを私は一蹴する
兄貴いわく

『ナンパするような軟弱者は油断すると一気に付け上がる
始めっから強気でいけ』
だそうだ♪

「えくそんなこと言わずに……………ねえ？」

「…………却下」
「…………こいよ」

男が取り出したのはダガーナイフと呼ばれるもの
なにこれ？ 脅迫ってやつ？

え〜と…こういうときは…兄貴いわく…

『あくまで、平和的に解決しろ

事後処理が面倒くさいから

向こうが暴力で脅すのなら、コッチも力でねじ伏せろ』

……………うん、コレでいこう

「おい、聞いているのか!？」

バキィ!!

「ヘゲツ!？」

まず、向こうのナイフを捌いて、顔面に肘打ちを叩き込み……

ブウン!! ……ドシャ!!

「オゲツ!？」

捌いたナイフを持つ手を掴んで一本背負いで投げ飛ばし……

グリィ! ……コーン!!

「グオオ!？ ……ハウウ!!」

倒れたところに顔面を踏みにじり、男の急所に踵落とし

「会心の一撃い」
「く……お……」

勝利のガッツポーズ」

「……レナート、なにしているんだ？」
「あ……どなた様？」
「……篠田恭助です」
「……ああ」

なんだ」篠田って子かあ」
正直分からなかったあ」

「……素直に傷ついたぞ……」
「あり？ 聞こえてた？」
「ええ……喋ってましたよ」

まあ、いいや

「なにしにきたのさ」
「……道に迷った」
「あ 仲間だあ」
「仲間って……」

迷い仲間だあ」
え？ そんなの仲間じゃないって？
いいじゃんいいじゃん」

「とりあえず動こうぜ、ずっとここにいるよりはまだだから」

「あ、ナンパ？ だったら却下」

「じゃあナンパじゃないっていったら？」

「OK」

「いいのかよ……」

「イインダヨ、グリオンダヨ」

「それはさすがにダメだろ！ しかも隠すところ間違っているだろ！」

クククク

魔王に不可能はないのさ

「クククク…呑気なものだな」

「！？」

「？」

いきなり現れたのは、 全身真っ黒の男
怪しいので……

「die」（訳・死にさせ）

「え？ ちよつ、 まっ…ヘグウ！！」

ダッ…ゴギヤア！！！！

「いきなりなにを！？」

「瞬殺、シャイニング・ウィザード」

「せめて、 話は聞いてあげようぜ！？」

「大却下」

「大！？」

大

お、黒ずくめの男が被っていたフードがとれ 男の姿が丸見えに
……可愛い少年でした

「…君いゝなんでさつきへんことを言っただのかなあ」
場合によっちゃあ首と体が永遠のお別れをしなくちゃいけないな
あゝ」

「ひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひいひい！！」

「じよ、冗談…ですよね…？」

うーん、本気なんだけどなあ……まあいいやゝ冗談で

「……あれ？ 違った？ おかしいなあ……」

「……一体なにがだ？」

「いや…友達に頼まれてさあ…ここだって聞いたんだけどなあ…」
「友達ってコレ？」

私が指差したのは私をナンパしようとして振り返ちにあつた奴
今はだらしなくのびている

「ああ…そいつそいつ…ってなんでコイツのびてんだ？」

「いや…えっと…」

「勝利のメガトンキークツゝだよ」

「また振られたのかよ……ダラシのねえ奴」

おや、あんまり気にしなかったみたいゝ
美少年はナンパ男を肩に軽々と担ぐと、さっさと帰っていく

「ああそうそう、なんでここにいるんだ？」

「道に迷ったゝ玉藻神社への道教えて」

「それなら……」

美少年に道を聞いて私たちは玉藻神社へと急ぐ

〳〳祭囃子終了後〳〳

「33ゲットオ——」
♪

「遅いぞ、コノヤロ——」
♪

ベキイ！

スライディングで滑り込んだ私を出迎えてくれたのは
兄貴のスライディングだった
だけど私はとっさに恭助を盾に攻撃を防いだ！

「ヘグツ！？」
「

あ、篠田」

「…だ、大丈夫…？」
「

へ…平気じゃないっす……」

あはは〳
♪

恭助変」
♪

そのまま恭助は紗に連れられて怪我の手当てを受けたんだって」
♪

………あり？

そういえばあのナンパ野郎、
だんだろっ…

なんで美少年に人を驚かすよう頼ん

まあいつか♪

其の参拾参：お祭り騒ぎはばか騒ぎ・後編（後書き）

お祭りは実は行く気0

うわ、俺なんて引きこもり予備軍

其の参拾肆：彼の意外な弱点とは・前編（前書き）

今回、 凰輝の意外な弱点が明らかに——！！

其の参拾肆：彼の意外な弱点とは・前編

「……あ、やべ、明日“アレ”か」

「？なにがですか？」

どうも、雷華です

凰輝さんが明日なにかヤバイことがあるらしいのですが……

「借金でもしたか？」

「するかアホ

たまに誰かに貸しを作ることはあっても人には借りを作らねえ」

フィアの冗談に不機嫌ながらも真面目に答える凰輝さん
貸しは作るんですね

「じゃあなんなのさ？」

《……凰輝よ、もしかして“アレ”か？》

「そう、“アレ”」

フィアのボヤキを無視して話す黒龍と凰輝さん
黒龍も知っていたってことですか……？

「なんなのですか？ いったい……」

「人には言えないこと？」

スチルさんや、レナートの質問に凰輝さんは口を濁らせながら答えた

「……ん……まあ……人には言えねえ……」

《言えないな、 アレは…ククク…》

「黒龍よ、 お前に自殺志願があったとは初耳だな」

《え？ いや…じ、 冗談、 だ、 よ、 な？》

「そつえば刀が折れる音ってどんなだろうな」

《まじ、 すいませんでした》

殺気をギラギラさせる凰輝さんに平謝りする黒龍

……訂正します

平謝りする様な声を出す黒龍、 でした

「まあ、 明日になれば分かるさ」

『は…はあ…』

なんか上手くはぐらかされた気がする……

〃〃翌日だ〃〃よ でも、 そんなの関係ねえ！ そんなの関係ねえ

！ はい、 オッパッピー （少し古！ しかも長！）〃〃

「お〃い、 起きろ」

「ふあ〃……え？」

司会はまだ私、 雷華がしています

いつもどおり凰輝さんに起こされたのですが……

「お、 凰輝さん……？」

「ん？ なんだ？」

「凰輝さんって元々そんなに声高かったですか……？」

「それに背も低いし……」

..... なんてだろう

..... 凰輝さんが幼児化しても勝てる気がしません.....

「まあ、 どうでもいいかな」

「いいの!？」

「いいんだよ」

..... そうですね、 なんてあの男子たちは襲いかかってきたの
だろう.....

まあいつか

..... え!？ これ続くの!？

Yes
♪ by 作者

其の参拾肆：彼の意外な弱点とは・前編（後書き）

え？ 弱点じゃない？

… “一応” 弱点です

其の参拾伍：彼の意外な弱点とは・中編（前書き）

一応、弱点です。

其の参拾伍：彼の意外な弱点とは・中編

まだまだ司会は雷華です

「そういえば、 紗さんは凰輝さんの体質を気にしたことはないんですか？」

「あるっちゃあるけど……『まあ、 こういう奴なんだ』って割りきったよ」

「…いつ割り切ったんですか…？」

「ん…4、 5歳くらいのころから」

「…意外に早いですね……」

「気にしちゃダメだよ」

「は、 はあ………」

紗さんは突っ込み役なんだけどやっぱり普通の人よりも常識が違う気がする……

「……よし！ 今日の体育はコレだ！」

……だ、 だ、 誰？

「ウチの体育の黒田先生」

私の疑問に紗さんが答える

今まで出番がなかったところをみると今回きりか新しいレギュラーか

〳〳体育の時間〳〳

はい、司会は代わりまして紗です

凰輝は服装を変えてタンクトップに短パンと動きやすい服装
周りの男子がチラチラ視線を送っているのが腹立ちます
え？ 私はＴシャツにハーフパンツ
１番楽なんだよなあ

「よし、今日は“例のヤツ”やるぞ」

『おおおおおおおおおおおおお！！！！』
』

先生のセリフにテンションが上がる生徒たち（特に男子）
彼らのテンションについていけない雷華ちゃんたち
私はそんな彼女らに説明する

「凰輝を体育の時間（１時間）内に捕まえたもの勝ちのゲームなの
捕まえた人には今学期の体育の成績が５（最高の成績）貰えるの」
「へ、へえ……」

ちなみに作者の同級生に体育中アホやって成績１（最低の成績）を
つけられた人がいるらしい
その人は運動部らしく、しょっちゅう弄られるそう

……なんで私こんなこと知っているんだろう……

「…さて…どう逃げようかな…」

凰輝は逃走方法を考え中
ちなみに今まで１度も凰輝が逃げたことはなし
捕まったことは実はある

「よい…ドン！」

『おおおおおおおおおおおおお！！』

黒田先生の言葉と共に一斉に凰輝に襲いかかる男子勢
そんな男子勢に対し凰輝は素早く身構え……

「散壁正拳・乱」

ドドドドドドドドドドドドドドドカア！！

“散壁正拳・乱”で撃ち返す

その一撃一撃を受けた男子はそれだけで沈黙する

………まあ、お大事に

「………もらった…！」

いつの間に凰輝に近づいていたのか青葉ちゃんが凰輝に抱きつく
凰輝はそれを空中に飛び上がることで避け……

「“衝覇蹴撃”！」

ドウー！

“衝覇蹴撃”を叩き込む

その一撃を受けた青葉ちゃんは地面に叩きつけられるがスグに起き
上がる

「流石は青葉♪」

落下しながら呟く凰輝

凰輝が屋上から無傷で降りてきた

他の3人はファイティングポーズへ私も豊華流の構えをとる

「3人か…まあ“連”や“乱”を出さなくても勝てるかな」

「上に行った奴らもいずれは戻ってくるぜ」

「ん？ ああ、トラップを仕掛けといたから当分は下りてこれねえよ」

どんなトラップかは容易に想像ができますけど、想像しません

『！？ ぎゃあああああああああああああああああ！！！』

ハイ掛かった

恭助君は顔を強張らせるが他の2人は変化がないいや、変化がない様にしか見えない

「…さて…“残り4人”…」

ダッ！

駆け出したのは道真くん

そのまま凰輝に接近し、素早くワンツーパーチを繰り出す普通の人にとっては速いだろう

だけど、古代武術家にとっては遅すぎる

「遅い！」

バシッ！ ビシッ！

道真君のパンチの隙を突き、 鳳輝は仕返しとばかりにワンツをお返りする

2つとも顔面にヒットし、 道真君は仰^のけ反る

その隙を突くかのごとく鳳輝は道真君の左側頭部を右手で押さえると、 ジャンプし、 右側頭部に膝を叩き込む！

ゴガア！

本来右から受けた衝撃は、 左へと受け流され、 ダメージは緩和される

だが、 今回のように左を固定してしまえば衝撃の逃げ道は失われ、 頭部はその衝撃をそのまま受けることとなる！
道真君は耐えきれずそのまま崩れ落ちる

「 残り3人 ”」

鳳輝の宣告が殺気を孕んで響き渡る

……… 後3人でどうやって鳳輝を捕らえろと？

（…後編へと続く……… たぶん（たぶんかい！）…）

其の参拾陸：彼の意外な弱点とは・後編（前書き）

今日は家族が旅行で俺1人だけ留守番
なんという気楽さ

其の参拾陸：彼の意外な弱点とは・後編

「……“あと3人”」

「……どうするよ……」

「……分らない……」

「……さて……どうしよう……」

凰輝は女性化してはいるが、その勢いは衰えることを見せない……
……というか、衰えない

……おっと、司会はまだ私、紗が行っています

恭助君はそこら辺にあつた手頃な木の棒を拾い、構えをとる

長さもほどほどで、丁度いいらしい

私はカウンターが得意だけど、堪え忍ぶだけ

青葉ちゃんは普通に構えている

まあ、彼女は普通に強いのである程度は戦えるだろう

「行かねえなら……コッチから行くぞ」

ダッ!!

凰輝は勢いをつけて、突っ込む!

私は体勢を整えて、迎え撃つ体勢はできた

だけど、他の2人は体勢を整える時間をとれず、凰輝の攻撃を受ける!

「“桜花正拳・双”!」

ドカツ！バキッ！

“桜花正拳・双”を受けた2人は大きく引き下がる
よく見れば恭助君は木の棒でガードしていた
間一髪、と言いたところだった。木の棒にはヒビが入り、今にも折れてしまいそう。

「くそっ！一体どうすれば…」
「まだまだ行くぞ！“散壁蹴撃・連”！」

ドウ！バキッ！ガスッ！

散壁系の攻撃は氣を打ち消し中和する
そのために私が張った“氣界”も無効化し、私は攻撃を捌ききれなかった！

「つう……！！」

私は後ろに翔んでダメージを抑えたが、他の2人はモロに喰らい吹き飛ばされる！

……言っておくけど、相手を吹き飛ばす桜花系じゃないよ……

「……まあ準備運動は済んだかな」

「……はあ！？」

肩をグルングルン回しながら呟く凰輝に驚きを隠せない私たち

「行くぞ！必殺“女王陛下の鎖鋸”！」
クイーンズ・チェーンソー

四神流の技じゃない！？

……というか黒龍！？
いたの！？

《気付いてなかったのか……》

……ごめんなさい、全く気付かなかったです

鳳輝は黒龍を抜刀すると、型をとらず、静かに息を整える
すると、邪悪な氣が黒龍の周りを渦巻き、まるでチェーンソーのよ
うに回転する！

……というか……

……というか……

『主人公が邪悪な氣を出すとかおかしいだろ（でしょ）！！』
「別にいいだろ」

……まあコメディだからいいけど……
鳳輝は黒龍を構えたまま突っ込む！

フウウン！

変わった音を立てて黒龍が一閃する
間一髪で避けたが、体を過ぎるときに感じた嫌な感覚
あれはヤバイ

「あんなのあり……！？」

「黒龍の“妖氣”と俺の“氣”を合わせた我流劍技……“暗黒劍”と
でもいおうか」

「“暗黒劍”……」

「あ、ちなみに他の種類もあるから」
「今言わないで」

フウウン！ヒュウン！ヴォオン！

変わった音を立てつつ、黒龍が斬りかかる

その一閃一閃は私たちを攻め立てるようではなく
ただ遊んでいるようだ

なんか腹が立つなあ……

「そろそろ1人に消えてもらうか」

「……はあ……？え？ちよ、まつ」

「女王陛下の鎖鋸・砲^{シヨツポウ}」！

ヴォオオオオン！……ドウン！

「グオ！？」

黒龍から放たれた黒い鋸状の円が恭助君を大きく吹き飛ばす！

木の棒でガードしてたがその木の棒もあつという間に一刀両断された

「一応、死なねえように手加減はしたぜ」

「……どれくらい？」

「999999999999分の1くらい？」

『……………』

恭助君は気絶したので、残りは2人
え〜と……………

……………どう捕らえろと……？

と、いきなり青葉ちゃんが前に出る

「……………我流“紅燕^{ベニツバメ}”」

ヒュッ！

鋭い一撃が凰輝を襲う

いや、一撃というよりも一閃の方が正確か
だが、その一閃を凰輝はあっさりと受ける
そして

「……捕まえました」

「……あ」

青葉は凰輝の体にしっかりと抱きついていた

ゲームセット

こうして、体育は青葉の勝利で終わった

〵〵翌日 〵〵

「……」

「……」

「……」

「……」

「……なんだよ」

じ——と凰輝を見つめる神と悪魔

それにイラついた凰輝は4人を火攻めにしましたとさ

めでたしめでたし

「……全然めでたくない……」

うるさいな

其の参拾漆：彼の姉も半端ない……（前書き）

彼の姉が登場します

言っとくけどこいつ凄いよ

其の参拾漆：彼の姉も半端ない……

……はい、こんにちは青葉です
ただいま、日本史の授業中です
本来クラスには30人いたのですが、今はもう17人しかいません

「……よっ！ほっ！」

「……誰だ……？」

突然聞こえた気合いの入った声
それに対し殺気をみなぎらせながら聞く重松先生

「知らん」

珍しく授業に出ている凰輝君が反応しました
その瞬間、全員が防御姿勢へ
きっと全員が全員、（凰輝のどアホ——！！）と、思っているで
しょう

「“デッドストライク”！！」

ヒュウウン！

「甘いわ“斬撃正拳”」

спан！

きりもみしながら飛んできた金属バットが、あっという間に真っ二

つになりました

1本は恭助君に直撃
もう1本は窓の外へ

「いてっ！」

「いたっ！」

『……………え？』

前者は恭助君、後者は……………誰ですか？

それは窓の外から聞こえてきました

窓にいた面々が一斉に窓を覗き……………

そして、凍りつきました

「ほっ……………つと！」

ぴょん…すたっ！

窓から謎の女性が出現しました

やや長めの髪は少し脱色してはいるが茶髪

タンクトップとハーフパンツはほとんど脱色し、元の色が分からないくらいになっています

長旅をしていたらしく、服装も髪もボロボロで、リュックサックもくたびれきっています

「あ、姉貴」

「おう！凰輝！久し振りだな！」

『……………え？』

凰輝君と女性の会話に目が点になる面々

「……………あああああああああああああああ！？琥鈴さん！？」

……………琥鈴…

変わった名前ですね…

「よっ！紗！いい女になったじゃん」

「……………」

凰輝君と、紗さんがいうには琥鈴さんは凰輝君の姉で、20歳凰輝君並に強く、最近までアマゾンに修行に出かけていたとか

「そういえばさ、なんで帰ってこなかったんだ？半年前には帰ってくる予定だったろ？」

「ついでに南極にまで足をのばしてきたからさ」

『な…南極うううううううううう！?!?!?』

「ついでで南極って…」

「南極……………」

一体、なにをしに行ったのでしょうか……

「ん……………ああ北極熊か」

『……………?』

「結構手強かった…」

『手強かった！？闘ったのかよ!!!』

「そもそもアマゾンには虎を倒しにだな…」

「あれも強かった」

「……………“銃”で、ですよネ？」

凰輝君と琥鈴さんの会話に女子生徒の1人が入る

「ああ！？私がそんなモノに頼るとでも！？」

「え？いや……」

「てめえ、私を舐めているのか！？死にたいのか！？」

「ご、ごめんなさい！！」

「“ごめんなさい”ですんだら警察いらねえんだよ！！」

「いや、警察関係ないでしょ」

女子生徒に絡む琥鈴さんに突っ込む紗さん

「でも、凰輝といい、琥鈴といい、変わった名前だよな」

呟いたのは恭助君

それに対し、凰輝君が言い返す

「ん？ああ、ちなみに親父は玄次げんじお袋が龍華りゅうか
実は俺たちの名前に共通点があるんだよな」

「共通点？」

尋ねてきたのは重松先生

もう授業はほったらかしですよな

「親父は玄武げんぶ、お袋は青龍せいりゅう、姉貴が白虎びゃくこ、そして俺が鳳凰ほうおうで朱雀すざく、
もう分かるよな？」

「四神…ですか？」

「イエス」

なんという偶然

それにしても作者凝りましたよね

其の参拾捌：この姉弟の思い出話も人外なり（前書き）

最近、RPGツクールVXを買いました
すつごく面白くて、暇さえあればずっとやりたいです（コラ）
なので遅れるかもしれません（オイ）

「そうだな…なんか昔のことを思い出してきたぞ」
「どんな昔話ですか？」

琥鈴の呟きに反応する雷華
ふむ、私も少々興味があるな

「凰輝がまだ5、6歳くらいのころに間違って凰輝のジュース全部飲んじゃって」

「ああ、そのとき俺紗がしたと思ってボツコボコにしたなあ」

「あ、あれ？」

「あと、俺も姉貴のおやつ勝手に食ったことがあった」

「ああ、そのときも私は紗が勝手に食ったと思ってキン〇ドライバ
ーかけたっけ」

「あ…あり??」

な……なんかヤバい雰囲気…

「そうだ、俺あるとき姉貴のノートに落書きしたことあるわ！」

「え！？あれ凰輝！？私てつきり紗がしたと思ってマッスル〇パー
クを…」

「なんか私に災いが来てません！？あの頃なんでこんなにボツコボ
コにされるか分からなかったんだけど！！」

哀れ、紗

まあ、別にいいけど

……もしかして私の呪いは西上家ではなく、紗に降りかかっている
のでは…

だとするならば、これはこれでいい感じ

「なにがだ、オイコラ」

《思考を読まないでくれるかな》

「却下」

《おい》

そんな感じで（どんな感じだ）2人の思い出話はさらにエスカレート

「そうそう、あの調子に乗っていたクソガキをフルボッコにして裸で泣いているところを写真で撮ったこともあったなあ」

「ああ、あれか」

あの日以来、周りの奴らの視線が変わったよな」

「……………」

「怖い……………」

そのクソガキに言っておくが、喧嘩を売る相手を間違えたな
こうなれば、あの2人はお前を精神的に痛めつけ続け、最終的には
社会から抹消される

この西上姉弟、琥鈴と凰輝はそんな2人だ

「いやあ、あの後先公に呼び出されたなあ」

「でも、“あの写真”を用意しといてよかったな」

『“あの写真”……？』

「兄貴くなんなのそれ」

“あの写真”に興味津々の神と悪魔ども

私も大体どんなのか想像つかない

口を開いたのは紗だ

やけに暗い

「みんな……」

世の中には“知らなければいけないこと”と“知っても知らなくて
もいいこと”と“知ってはいけないこと”の3種類があるって知っ
てた……?」

『……………』

《……………》

みんなが一斉に押し黙る

私も思考停止をするのが正しいようだ

しばし、沈黙が流れ……

「…お開きにするか…」

「お前らも飲めや♪」

「飲めや♪」

お開きにしようとした凰輝の言葉を封殺するかのごとく、飲みまく
る琥鈴とレナート

結局、このまま2人は朝まで飲み続けた
後の面々は自由解散となった

……………私はいつになったらこのうるさい部屋から出れるんだ?

「よっしゃ! まだまだ飲むぜえ!!」

「アイアイサー!!」

マジうるせえ

其の参拾玖：彼らの夏の過ごし方とは（前書き）

ようやく、夏休みのお話を書けた…

其の参拾玖：彼らの夏の過ごし方とは

「こおんのくつそあつついのに補習なんぞやってられつかああああああああああああああああああ！！」

「Shut up。（訳・黙れやこのゴミ野郎が。）」

～～開始早々申し訳ありませんが少々お待ちください～～

「ちゃんと補習しろよ」

『ハイ。了解シマシタ。』

……………どうも、お久しぶりです。 青葉です

今は夏休みの補習中です

ちなみにさっきの声は突然叫びだした男子生徒に凰輝君が切れて…

……

……………すみません。これ以上は秘密で

「……………ヒマだな」

「……………そうですね」

ちなみにただいま補習を受けているのは8人

凰輝君と私、そして紗さんは補習を受けているわけではなく、サボる人がいないか見張る役です

私は実は学年で1番賢いんです
だから教える役に選ばれたんだと思います

鳳輝君は突然の暴走者への対処役
さっきの行動を見れば分かりましょう

紗さんはそんな鳳輝君のストッパー

鳳輝君が暴走しないようにする役らしいですけど…
…彼を止めることなど神さえ不可能でしょう

そんな3人を監視役に選んだのは重松先生
もの凄く適役だと思うのは私だけではないはず

「先に言つとくけど…お前ら

もし、休み明けのテストで欠点とつたら…少なくとも2学期
は楽に過ごせると思うな」

……補習の初めに鳳輝君が言った言葉です

彼が言つと冗談には聞こえませんが

彼も冗談で言っているわけではなさそうです

きつと、重松先生に頼まれて言ったのでしょう

というわけで、今のところ補習の出席率はほぼ100%、
素晴らしい
素晴

でも、それに実力が伴うかどうかはその人しだいでしょう

「そついえば最近影薄の姿見ねえよなあ」

「アイツ入院したんじゃないかったけ？」

「え？　なんでだよ？」

「なんでも毒を盛られたって……」

「ハイ！　話は止め！　集中集中！」

とある2人のボヤキを遮る凰輝君

注意された2人はあわてて課題に集中する

きつと、原因が自分にあることを自覚しているのでしょう

「彼の辞書に“罪悪感”なんて言葉はないよ……うん。」

この言葉は紗さん

そんなこと言われても……いえ、その言葉、現実感ありすぎです

……ところで……

「影薄って誰？」

私のボヤキが全員を硬直させた

……私、なにか変なコト言いましたか？

……一方そのころ……

「兄貴なにしてるんだ？」

現れたのは俺の弟、柿田陸^{りく}
唯一、最近お見舞いに来てくれる奴だ

「そついや、さっき受付に兄貴宛になんか届いてたけど」

「お？ ケーキか」

「2人で食うか」

「だな」

くく西上家くく

「レナート、俺が作ったケーキ知らねえか？」

「ん？ ああ、それなら影薄にあげたよ」

「……あれは、毒殺y…雷華お仕置き用ケーキだぞ」

『……………』

翌日、影薄の入院が伸びると共に、その弟も入院したという連絡が入った

警察はただの事故として扱ったらしい
それに異を唱える者もいたが、その者たちは翌日には警察を辞め
たらしい…

西上凰輝……なんて恐ろしい奴……！！

其の肆拾：彼らが思う肝試しとは（前書き）

これから、長編に入ります

現時点で自分の作品の中で一番長い長編です

其の肆拾：彼らが思う肝試しとは

「……でね、それを見た彼女たちは2度と生きては帰れなかったんだって……」

「えゝこわゝい」

「誰から聞いたんだよ。そんな話」

…あ、どうも

スチルです。

いつもの補習が終わって、凰輝さんたちが帰る準備をしていたときにこの話です

本当につまらない怪談ですね。もし、みんな死んだのなら誰が言い出したんですか

そういえば、凰輝さんも紗さんもそんな話はしないですよ

「紗さんの家は神社ですから、色々な怪談話がありそうですね」

…」

「怪談話？ それは寺でしょ

……まあ家には髪が伸び続ける人形が30体くらいはいるけど」

「十分怪談話ものですよ……」

「あ？ 怪談と言ったら化け物だろ

ケンタウロスだのサイクロプスだのケルベロスだの」

「いえ、それはおかしいかと……」

やはり、2人の感覚は少しおかしいです

でも、そんな2人も昔は怖い話で盛り上がった時期があったのではないのでしょうか

1度聞いてみましょうか

「2人は怪談話で盛り上がった時期はあったんですか？」

「ああ、一応小さい頃にはやったよな
肝試しとか」

「うんうん、したした。」

「どんなん？　どんなん？」

興味津々にフィアが尋ねる

私も凄く興味がありました、　彼らの次のセリフはまさしく予想外でした

「亡者が潜むという洞窟ひそくに行ってみたり」

「実際に出たから焦ったよね」

「まあ、返り討ちにしたけどな」

「か、返り討ちに……」

「ど、どうやって……」

「あとは……あ、魔界の大冒険も肝試しに入るかな？」

「入るんじゃない？」

「……………」

「いやあ、あのときは実際に魔物に襲われたからビビったよね」

「まあ、フルボッコにしてやったがな」

「鳳輝さん怖い……………」

「あ？　一応紗も関節外したりしてたんだぞ」

「投げ飛ばしたりね」

「……………」

最強カップル。　ココに推参。

この2人は強すぎます

というか……

「魔界に通じる所なんてどこにあるんですか？」

「ん？ ああ、家の近所にちよつとね」

「結構近いぞ、今から行くか？」

『いえ、結構です。』

見事なまでにそろった遠慮の声

声の主は雷華にフィア

お化けや魔物が怖いのでしょうか

「よし！ 明日か明後日くらいに久々に行くか！！」

『ええええええええええええええええええええええ！？』

彼女らの真意が伝わったのか伝わっていないのか

凰輝さんの一言に、驚きと不満の声を上げる2人

……きつと、彼は彼女らがお化けが苦手なのを悟って、決めたコトでしょう

一応無駄だとは思いますが止めてみましょう

「凰輝さん、いきなり決めるのもなんなんですからまたいつかの機k「青葉もこいよ、懐中電灯は各自持参、今夜集合な」……分かりました」……」

無駄でした

ええ無駄でした

無駄でした

……微妙な俳句になってしまいました

凰輝さんはルンルン気分ですし、紗さんは先に帰りましたし、

青葉さんは携帯を弄っていますし

雷華とフィアは半泣きですし、レナートはやけに楽しそうだし

少し寂しいな……

ココで私は冥界にいた“ある人物”を思い出す

……“あの人”まだいるのかな……？

其の肆拾：彼らが思ふ肝試しとは（後書き）

ちよつとだけですが、 伏線数箇所あり

其の肆拾巻：彼らと共に冥界探検・巻（前書き）

宿題がまだ終わっていません…
どうしよう

其の肆拾巻：彼らと共に冥界探検・巻

――夜――

「……うっし、全員来たな」

「……まあ、もう突っ込むのは面倒くさいのだが……」

「ん？　なんだ、恭助」

「ココどこだ？」

「玉藻神社の近くにある森にある魔界の入り口である洞窟の前」

ふむ、　なんという説明的文章

おっと、　司会は黒龍が務めさせてもらう

今、洞窟の前にいるのは鳳輝、　紗、　雷華、　ファイア、　スチル、

レナート、　青葉、　恭助、　そして見知らぬ女性2人

琥鈴も行きたがっていたが、　11時になると爆睡していたのでそのままにしていた

《鳳輝よ、　誰だこいつらは？》

「ああ、　レニーに……お前は誰だ？」

「……あ、　加奈先輩じゃないですか

なんでここに？」

答えたのは青葉

先輩ということは年上か

その少女はショートカットにつり目、　服装もどこにでもありそうなものだ

青葉が言うにはその少女は永谷加奈

バスケット部という団体の先輩で、最近引退したばかりだという

恩人に近い人物らしいが、彼女はある人物をずっと見つめている
その視線は危なげに感じるのだが、視線の先にあるのは紗だ
その視線に気づいたのか、紗は少し青ざめている

「おし、行くか」

凰輝が言い、一行は洞窟へと入る

洞窟からはなにか妖しい雰^{あや}囲気が漂いつづけている

さあ、闇の底への冒険が始まる

「ココ、魔界じゃありませんよ？」

暗く、深い闇の色を称えた洞窟の中

呟いたのはスチル、それに反応したのは凰輝たちだった

『……………え？』

「うん、違うね」

「え！？　じゃあココどこ！？」

「“冥界”です」

「……………“冥界”？」

スチルの言葉に聞き返したのは、　凰輝、　紗、　青葉、　恭助、

加奈、　レニーたち人間に、　雷華とファイア

おら、　雷華にファイア

お前ら一応神と悪魔だろ

スチルいわく冥界とは、　死者の魂が集う場所で、　そのほとんどが人外の姿形をしており、　中には特殊な力を手にした者もいるという

大半が現世での記憶を持っているが、　中にはその記憶が失われ、

自我が崩壊した者もいる

自我が崩壊した者は、　そのほとんどが人間、　もしくは亡霊たちに牙を剥く

そういえば凰輝たちも魔物らしき奴らに襲われたと言っていた

そいつらは凰輝や紗が５秒で全滅させたそうだが、　油断は禁物と言えよう

「読者への説明は終わったか？」

《ん？　ああ、　ちょうど終わったところだ》

凰輝の言葉で説明を打ち切る

どんな奴らが現れるかも説明したかったが、それは後でもいいだろう

暗闇の中を彼らは進む

「お、お化けなんていませんよね……」

「い、いない……いない……」

「だったら離れろ、ここにいる奴らの仲間入りしたいのか」

『すみません……』

しがみついていた雷華とフィアを無理矢理引き剥がし、
方を懐中電灯で照らすと、漆黒の岩肌が現れた
鳳輝は前
どうやら、この暗さは光が届かないだけではないらしい

「……誰？」

ビクウー！！

最後尾にいた青葉の言葉に、
雷華とフィア、
恭助の3人がびく
ついて振り返る
そこには…ワンピースを着た少女がいた

あくまで、それだけならまだいいえ？　じゃあどう違うかって？

雷華たちの青ざめた顔を見れば半分は分かるだろう

「ねえ……私の頭知らない……？」

『っ！！　ぎゃああああああああああああああああああ！！
！！』

その少女は

頭がなかった

フラフラと、こちらへ手をのびながら近づく様はB級のホラー映画にありそうな展開だ

だが、実際に見たら半狂乱に陥ることは間違いない

「あばばばばばば」

「フィア、落ち着け」

「ヒヤッホオッ！！」

「……雷華ちゃん大丈夫？」

「K O O Lになれ、K O O Lになれ、K O O Lになれ」
「……」

パニックに陥る3人と突っ込む3人
うろろろする少女は半ば無視されている

少し憐れ

「あの……頭ってこれ？」

「あ、これです！！」

いままで出番がなかったレニーが持ってきたのはバレーボール大のイビツな球体

それが少女の頭らしい

少女が受けとる前に、 凰輝が奪い取り、 レナートに放り投げる

「パス」

ポーン

レナートの頭上に来た頭はレナートがバレーのトスのように繰り出された手に弾き返される

ポーン

それをさらに凰輝がトスし……

ポーン、 ポーン、 ポーン、 ポーン、 ポーン、 ポーン

「か、返してえ」

少女の嘆きを無視し、 外道2人はトスを止めない

ポーン、 ポーン、 ポーン、 ポーン

「ハイハイ、 もうオシマイ」

紗が頭を凰輝から奪い取り、 少女に返す

頭はぴったりと首とつながり、切れ目が見えなくなった
やがて、明るい顔が上がってくると、そこには可愛い少女
の顔が

「ありがとう、紗さん！」

「……あ！ 叶子ちゃん！？」

「おお、久しぶりじゃねえか」

「……懐かしいですね」

叶子という少女と懐かしそうに会話する凰輝、
紗、青葉
それについていけない他のメンバー

……どうやら、この冥界探険もそれほどは恐ろしくはなさそうだ

其の肆拾貳：彼らと共に冥界探検・貳（前書き）

今回は久々に短め

其の肆拾貳：彼らと共に冥界探検・貳

司会は相変わらず私、黒龍が務めさせてもらう
彼らは相変わらず冥界の中、叶子の説明を聞いている

「……なるほど、昔行つたときに会って知り合つたんだな」

説明を聞いた恭助が納得したように言う
それに鳳輝と紗が頷いて反応した
どうやら青葉は別の時に知り合つたようだ

「青葉はいつ知り合つたの？」

「…昔のことです」

「いえ、それはもう分かってますから」

スチルの突っ込みが響く

「昔、私が住んでいたマンションにいたんです」

『……………へ！？』

青葉のセリフに数人のすつとんきょうな声が重なる
今、この冥界にいるということ
頭が外れたということ
この2つを合わせると…

「数年前でしたっけ？ その娘がバラバラ死体になって発見された

んです

警察がたくさん来てました

あ、ちなみに第一発見者は私です」

『っ！！　ぎゃああああああああああああああああ！！』

」

「……普通、　そういうのってトラウマになたりしないか？」

淡々と説明する青葉に悲鳴を上げる神と悪魔

そして呆れたように呟いた恭助

恭助の言うとおり、　普通こういうのは深い深い心の傷になるものだ
おとなじく幼心にとって“死”というのは恐ろしすぎる

そういう“傷”が成長しても“死”という概念に恐怖を抱かせる
だけど、　彼女にそんな感じはしない

「ニセモノの死は恐くはないです

ホンモノはどうかは分かりませんが」

「そういうもんかね」

「そういうもんじゃない？」

話し合う2人

端から見れば、　非常に仲がいい

2人は幼いころから一緒にいたらしいが、　紗はいつも凰輝に虐め
られてきた

そのためだろうか、　彼女は人一倍凰輝に関して熟知している
凰輝への交渉も彼女が1番優れている

「あ、　ちなみに私両手両足全部外れるよ」

「分かった！！　分かったから！！　今ココで外さないで！！」

ポコポコと手足を外す叶子にビビりながら叫ぶフィア

そんな彼女に呆れながら凰輝は先へと促した

「オラ、 サツサと行くぞ」
『はい』

緊張に固まっていた初心者の心を叶子が解きほぐしたようだ
気楽な返事をする神たち

「あら？ お客さん？」
『っ！！ ぎゃああああああああああああああああ！！』
□

出てきたのは異様に髪の毛の長い半裸の女性
斑の毒々しい肌が彼女がもう冥界の住人であることを告げている

「クスクスクス。 私を無視するなんて酷いじゃない？」
「あ、 流美華さん」

流美華と言っらしい女性は大人っぽい感じの微笑みを見せる
凰輝たちと知り合いらしいが、 今回はさすがに青葉も知らなかったようだ

「わあ、 みんな可愛い
これは怖がらしがいがありそうね」
「か、 勘弁してください…」
「他の冥界の住人に会いたいな」
「クスクスクス。 じゃあ他のみんなに教えてあげるわ
あゝ楽しみ」
「か、 勘弁してください」

雷華たちの嘆きも聞かず、　流美華は冥界の奥へとスタスタと歩いていく

……… 本当にこの冥界探険は飽きが来ない

其の肆拾参：彼らと共に冥界探険・参（前書き）

夏の宿題がまだ終わってない
ヤベ

其の肆拾参：彼らと共に冥界探険・参

司会はまだまだ黒龍が務めさせてもらう

どうやら、 作者はあまり会話しない奴の方が司会にしやすいらしい

さて、 今の状況は

其の肆拾式のあと、 先に進んだ鳳輝たち

次々に現れた亡霊たちに雷華とフィアは絶叫

恭助も始めの方は叫んでいたが、 もう慣れたらしく大したことで
は叫ばなくなった

だが、 やはり突然現れるとスチルと一緒に驚きの声を上げていた
鳳輝、 紗、 青葉、 レニー、 レナートは全然叫ばず、

鳳輝やレニーに至っては脅かしに来た亡霊たちを睨み返して、 逆
に亡霊たちをビビらせていた

レナートは亡霊が現れる度に『きゃゝ』怖ゝいゝ』などと、 お前
怖がつてないじゃん、と、 言いたくなりそうな声を上げていたし、

紗と青葉は完全に亡霊を無視
それに凹^{へこ}まされた亡霊もいる

可哀想に

「ひつく…えつぐ…もうイヤだあ…」

「ふえええええええん…帰りたいよう…」

「雷華さん…フィア…頑張ってください…もうすぐ帰れますよ」

泣き出した雷華とフィアを慰めながら、 スチルは鳳輝に目配せを
する

その目は『そろそろ帰りましょう』と語っているようだ

鳳輝もそう理解したらしいのだが、“理解する”と“了承する”はまったくの別物だ

「さあゝまだまだ先に行くぞゝ」

《やっぱりかこの鬼め》

「フツ、それは俺にとつて誉め言葉の1種だな」

《なるほど、“鬼畜”も誉め言葉に入るのか？》

「“鬼”よりも素晴らしい誉め言葉さ」

『……………』

そこから先は全員無言になる

紗はもはや諦めがついたらしく、懐中電灯で洞窟の中を照らし回っている

「いなくいいなくいばあゝつ！！」

『つ！！　ぎゃああああああああああああああああああ！！』

！
『

《人を驚かすのに“いないいないばあ”はないだろ》

突然出てきたろくろ首に泣き叫ぶ雷華とフィア

私の突っ込みは暗い洞窟内に虚しく響くだけだった

同じ気持ちだったのだろう、鳳輝は馬鹿にしたように鼻で嘲笑い

紗と恭助は少し嘲笑うようにため息をついた

青葉も鼻で嘲笑い

レニーとスチルは楽しげに微笑み

レナートはそこおかしさに大爆笑した

誰1人として彼女らを救おうとはしない

非情だと言いたいが、彼女らが怖がって泣き叫ぶのはココに来て、もう何十回も聞いているので、心配するのも疲れたのだろう

「オラ、 サツサと行くぞ」
『ま、 待つてくださーい』

凰輝だけが懐中電灯を持っている訳ではないのだが、 1番頼れる
のが先に行くのは怖いのだろう

他のメンバー、 特に雷華とフィアが慌てて後をついていく
1番最後を歩くのは紗だ

その後ろ姿は凜々しさが滲み出していた

「凰輝さん……」

「なんだ？」

「ここって……」

「河^{かわ}」

その言葉どおり今、 彼らがいるのは河だ

漆黒の流れの中になにかの骨が浮かんでいるのがこの河を危険と知
らせているのか、 不気味さを演出させているのか分からない

「凰輝さん…^{かっすいなみわたり}なんで水の上に浮いているんですか？」

「四神流“割水波渡”」

「へ、 へえ……」

「相変わらず便利だねえ、 四神流は」

「まあ、 あ、」

「？」

突然なにかを思い出した凰輝に全員が？ マークを浮かべたそれに呼応するように紗もなにかを思いだし、 青くなる

「もうすぐ滝だから」

「……………はあ！？」

「ああゝまたか、 またあの滝か」

「あの滝って…」

「お前ら……」

死なないようにな」

「……………」

はあああああああああああああ！?!?!?」

先にはゴウゴウと音を立てて流れ落ちる滝
けて、 低くはなさそうだ

「……………どうでしょう……………」

ああああああああああああああ！！！！！！」

バチャン！ どぼぼん！ どぼん！ どぼん！ どぼん！
！ どぼん！ どぼぼん！

凄まじい水音の中、 我が主、 西上凰輝は“割水波渡”を使用し
たまま水面の上にいた

その後に来た凄まじい水の塊かたまりに打たれ、 周りが見えなくなった後、
そこには舟の残骸と凰輝しかいなかった

「あいつらどこにいったんだ…？ たつく…」

凰輝は少し考えた後、 急に両手を合わせ「南無阿弥陀仏」と言っ
た後こう言い切った

「おめえら……安らかに眠れよ…」

『眠れるかあ！！』

「なんだ…いたのかよ……ちっ…」

「え？ なに？ さっきの舌打ち…」

舟の残骸からその姿を現した紗と恭助

この3人以外は流されてしまったらしく影も形も見当たらない
どうやらはぐれてしまったようだ

「……しゃーねえ、 探すか」

「サッサと探して早く帰りましょう」

「…くそ、 ドコに行っただよ」

3人は2組……凰輝1人と紗、 恭助の2人組……に別れると別々
の道を歩く

まったく、どうしたもんかな…
別に私が探すわけでもないんだが

其の肆拾肆：彼女の恩人、その力は（前書き）

“あの人”登場

あと、これ昨日投稿する予定だったのに…すいません

其の肆拾肆：彼女の恩人、その力は

「おい、起きろ」

「ん……」

私はスチル、前回滝に投げ出された金づちの私ですが、どうにか生き残れたようです

いや、普通、神や悪魔は滅多なことでは死なない同族が“神殺しの力”を持った者しか私たちは殺せない

「だから、起きろ」

「ん……」

ペチペチと誰かが私の頬を叩いているらしいそれに引き付けられるように徐々に目が覚めていく……

「早く起きろ、犯されたいか」

「んのわあ!？」

突然言われた衝撃のセリフは私の浮上途中の意識を一気に引っ張り上げた

私は神だけど女です

見た目幼女だけど一応400歳はこえている

そんな私に対し無礼極まりない言葉

その言葉を言った本人を真っ直ぐに見据えつつ、私は文句を言おうと起き上がった

「誰ですか！ そんなジェラシーのな……!!」

「よっ！ 久し振り」

「……あ……」

ジェラシーのないセリフを言ったのは、

私を起こしたのは、

私の長年の憧れ

命の恩人

その名前を口にしたいのに、

思い切ってその体に抱きつきたいのに、

言葉が出ない

涙のみが溢れ出てくる

結局、私は大声で泣き叫びながらその体に抱きついただけだった

「……うわああああああああああああ……！！」

「おお、子供っぽいのは治ってないなあ
よしよし」

「もう、子供じゃ、子供じゃな、ふえ、ふええええええええええん……！！」

文句を言いたい、その名前を大声で叫びたい

そんな私の意思に反し、体はただ泣いてすごることしかできなかった

彼もそれを理解したのだろう、もうなにも言わずただ私の小さな背中をポンポンと叩いてくれた

そんな優しさが嬉しかった

涙が枯れ果てるほど泣いて、他の人には見せられないような顔になってしまった私は、とりあえず私が流されてきたという泉で顔を洗った

まさか、“あの人”と会えるなんて…

私の心は踊りだしていたが、かろうじて理性で抑え込み

顔を洗いながら私はどんなことから話し始めようかと考え込んでいた

「いつまで顔を洗ってるんだ？」

「あ、ごめんなさい」

知らない間に相当長いこと顔を洗ってたらしい

私は顔を洗うのを止めて、彼に向き直る

まずは、さつき言えなかった再会の言葉を

「本当に久しぶりです…もう2度と会えないと思ってました…くろがね鐵さん…」

「まあ、冥界は広いしな」

鉄武神王《鐵》

私の先輩で、今はこの冥界でのんびりと隠居生活を送っている

鉄武神の王なのについて思う人もいるかもしれないが

数が多すぎるため、大抵の神王はどこかのんびりと過ごしている

私は1度彼に命を救われたこともあり、憧れを抱いている

私はもうその顔を見ることもないと思っていたが…

「……で？ お前はなんでココにいるんだ？」

「ええ、実は……」

《ぐおおおおおおおおおおおおおおお！！！！》

『！？！？！？』

ここまでの経緯^{いきさつ}を話そうとしたとき、突然聞こえてきた叫び声
1つではない、複数
しかも、囲まれた！

「ちつ、久々の再会に水を差しやがって」

「半分は…任せてください！」

「…ああ、頼んだ！」

私と鐵さんは互いに背中合わせになり、それぞれの敵に向き合う
私の前にいるのは3体
3体全員が鬼のような角^{つの}を生やしている

「…“アイアンウォール”！！」

私は両手を地面につき、鉄の壁を生み出す！
生み出された鉄の壁は鬼を2体吹き飛ばした！
残りの1体が私に迫る！

「こい！ “鉄剣” スチールエッジ！！」

鉄剣、端から見ればただの剣

武神は己が属性の武具を呼び出すことができる
これが武神と武神じゃない神の違いだ

呼び出されたのは巨大な鉄の剣

私の身長の上2倍以上はあるその大剣を私は手に取り、一刀の下、
鬼を両断する！

ザシュ！！

鬼は真つ二つになり、その場に崩れ落ちた
一息ついて、 鐵さんを振り返る
そして硬直した

「お、 そつちも終わったか？」
「は、 はい……」

そこには地面から生えた無数の鉄の針……いや、 槍というべきく
らいの大きさのものは私が相手した数より倍近い数の鬼を貫いていた
その姿を見たまま私はため息をついて呟いた

「まだまだ敵いませんね……」
「修行すればお前もまだまだ強くなるだろ」

呟いたはずの言葉は彼に丸聞こえだった

… 本当に敵わないなあ…

状況を説明した私は鐵さんの言葉を待った

「なるほどなあ……」

「ドコへ行ったらいいですかね…？」

言ってから私は失言に気がついた
彼は鳳輝さんのことをまったく知らないだろう
だから、聞いても無駄なのでは…

「…もしかして、そいつって西上か？」

「え？ ああ…はい、そうです」

なんで名前じゃなく名字を？

そんな私の疑問は次の彼の言葉に解消された

「西上の奴なら辰次に聞けば分かるんじゃないか？

辰次はたしか…この道の先にある神殿みたいな建物の中にいたよ」

「…本当ですか！？」

「…たぶん…な、」

「あ、ありがとうございます！！」

なにも手がかりがないよりは、まだマシだ
それに、鳳輝さんのご先祖様にもお会いしたいし

私は鐵さんが指し示した道の先へと走り出す
先はまだまだ暗闇が広がっていた

鐵はスチルに手を振り続けたが、やがてその姿が見えなくなると、手を下ろした

「へえ…アレが後輩？」

突然現れた謎の女性

それに驚くことはなく、鐵は振り返らず少しバカにしたように言い返した

「まあな…可愛い奴だろ？」

「……………そうね」

その女性はクスクスと笑うように呟き、そしてその声は温厚なものから剣呑なものへと変わった

「……………で？ どうするの？」

「どうするって……………」

「“銀の意思”……………」

「!?!?!？」

突然言われた謎の言葉

それに鐵は驚いたようにその女性を振り返る

女性が続ける

「彼女じゃないけど……いるのよ凰輝が連れてきた中に」

「………なんとかなるだろ」

「……ま、そうよね」

そう呟くと、女性はやも形も見えなくなった

残された鐵は劍呑な眼差しを孕んだまま、スチルが走っていった道を睨み続けていた………

其の肆拾伍：彼女を憎む復讐者（前書き）

今回はレナートのある1面が

其の肆拾伍：彼女を憎む復讐者

…… 久々に巡ってきた私視点 ♪

私はレナート、 闇魔王

あの滝から落ちたあと、 私は自力で泳いだんだ ♪

…… 気がついたら別の場所に浮かんでいたんだけど

「さて、 どうしようかな…」

私は周りを見渡す

ドコを向いても真っ黒な岩肌、 漆黒の湖ばかりだ
周りを向いてもそこは見知らぬ場所ばかり

「本当にどうしよう…」

ココがどこか分からず、 少々途方に暮れていた

すると

「…… よっ」

「！？ …… お前は…！！」

近くにあった洞窟から現れたのは

……

……えと……

「どちら様でしたっけ？」

「俺の名前知らないのかよ!？」

「えと……シキヤマ？」

「誰だよ!？」

ん、だつて知らないものは知らないし

その男は黒髪に黒眼、全身が黒づくめで周りほとんど同化している

ん、本当にこんな奴知らないなあ…

「俺の名前は…グレイト・ジョージだ!！」

「……………」

「なんか反応しろおおおおおおおおおおお!」

「」

「……………」
「ディスカバイト・ナチュラリー・ヘクタリー・カノン
”!!”」

ボウツ!!

「え? ちよつ、ちよつ、ちよつ、たんまああああああ
あああああああああ!！」

キイイイイイイイイイイイ……………

ドカアアン!!

私の手のひらから放たれた漆黒のレーザーは1度無数に分裂した後、
グレイト・ジョージとやらに目掛けて収縮、そして直撃、大
爆発

「粉碎…玉砕…大喝采!!」

「それなんて遊○王!？」

ふむ、最近のアニメとかにも少しは詳しいらしい
私は再びジョージとやらを見据える

「で、一体ジョージとやらはなににしたのかな？」

「……貴様に復讐しにきたのさ」

「……私、なにかしたっけ？」

しばし、無言

やがて、彼は両手を突き出すと、静かに詠唱を始める

「“フレイギガ・コリーフィティア・ブリーア”!!!」

「……古代呪文!？」

私は少し驚いた

古代呪文

簡単に言えば、古より伝わる、呪文

古代神聖語と呼ばれるもう滅びた言葉を使い、呪文を発動する
それぞれの言葉に役割があり、それを組み合わせることで効果が

生まれ

神、 悪魔以外にも使用が可能だが、
使用するには相当の修行が必要

まあ、 私がさっき使ったのも古代呪文だけど

ジョージが言い放った、 呪文
それは焰ほのおの剣を呼び出す呪文だ

その呪文どおり、 彼の手に焰の剣が生まれでる

「フハハハハハハ！！ どうだ！！」

「……」

「怖じけついたのか？ 怖じけついたんだな！！」

「…… “デイスカバイト・ラインディ・コーリフィティア・ラン
タキア・カノン”」

ゴウツ！！

「……………へ？」

私がさっき唱えたのは、 稲妻を纏った闇の槍を呼び出し、 そのま
ま敵目掛けて射ち放つという高等呪文（古代呪文は長ければ長くな
るほど威力が増し、 制御も難しくなる）

その槍はジョージ目掛けて飛び、ジョージをそのまま貫く

「……がはっ……！」

「……“デイスカバイト・コーリフィティア・ブリーア”」

私は槍を生み出したまま、闇の剣を呼び出し、ジョージに突きつけた

「ま、待て……！！！」

「……グッバイ、リベンジャー」

私は、

闇の剣を、

なんの躊躇いもなく、

振り下ろした

「ふう……………」

もはや、ジョージとやらは動かない

私は湖に映った自分の眼が白黒逆になっていたことに気づき、
自
分の頬を叩く

「……………いけない、 いけない」

また、あの“力”が目覚めてしまったか
一応自重はしているつもりでも、ふとした拍子に目覚めてしまう
これからはもう少し気をつけよう

私は再び湖に映った自分の顔を見る
瞳の色はいつもと同じ、金色に戻っていた

「……………まずは……………アレ……………」

私は湖を越えた先にある大きな神殿を見つめた
まずはあそこに行ってみよう

湖の周りを回りながら、 私はふと考え込んだ

あのジョージとやらは

なんで“私”に復讐しようとしたのだろう……

其の肆拾陸：その嘆きは呪詛のごとく（前書き）

冥界編まだまだ続くよ——♪

あと、レニーの力が少しだけ分かります

其の肆拾陸：その嘆きは呪詛のごとく

「……………」

……………どうも、レニーです

金づちの私ですが、近くに流れていた木の板に背中が乗って助かりました

今はその板に乗ったままゆらゆらと湖を流れています

「……………どうしよう…」

「…もしもし…大丈夫ですか？」

「……………？」

気がつけばもう岸近くにまで、流れてきたらしい

岸で青葉と名乗ってた少女が手を振っている

手と足をばたつかせ、岸にまで辿り着くと、青葉が手を差しのべてくれた

その手を握りしめて、岸に上がると、雷華とフィアという2人もいた

2人とも少し安心したように私を見つめた

「……………ここは？ ……」

「わたりません、 私たちもさつき近くに流れ着いたんです」

「…これからどこ行きたいんだよ…」

私の質問に雷華とファイアが次々に答える

青葉は懐中電灯を持っていたが、ここは薄暗いが明かりなしでも見えないことはない

青葉もそれに気づいているのだろう、懐中電灯のスイッチはオフにしてある

ここで、奇妙な音が聞こえた
なにか呟くような……

「……なにか聞こえない？」

知らず知らずの内に私は呟いていた

「……え？」

「な、なにが！？」

「……なにか……呟くような……」

「……人……ですかね……？」

「凰輝さん！？」「

「レナートだ！！」

「……2人のとは違う声のようです」

期待に胸膨らますように言った2人のセリフは、
青葉の言葉によ
って打ち消された

私も耳を澄ませ、集中する

「あの……レニーさん？」

「……音無流“兔聴^{うちよう}の技^ぎ”」

静かに集中した私は、その呟きを聞き取った

《……オン・ディスカバイト・スロツキリ・ヴァンタイア・ストウ
リヤティ・オン……》

「……これは……？」

「なにがですか？」

「……………」

音無流“兎聴の技”は聴力を高める技

なので、近くで声を出されると、例えそれが囁き声でも私には

“！”マークでしめすと“……………”なみに大きく聞こえる

言わずもがな、私は耳に凄まじいダメージを受けた

「……………○×△□@*＆▲ 〒↓三Ω†♪ ｷｯ！！！！」

「」

「え？ あ、あの……」

「……………ごめん、ちょっと黙ってて……」

「……………はい……」

もう1度“兎聴の技”を使ったが、なにも聞こえなかった

こちらに近づく足音以外は、

「……こつちに気づいたようです……近づいています」

“兎聴の技”を止めて私はみんなに報告する

戦場、とは少し大袈裟な言い方だが、闘いは常に情報がスムーズな方が有利だ

武器も同じ、兵力も同じ、士気も同じでは、正確な情報が多い方が勝利する

逆をつけば、正確な情報が多ければ、多少の戦力の差は翻る

今回の敵の力は未知数だ
報告にこしたことはない

「誰…でしょうか…」

「味方でしょうか」

「怪しい奴には変わりないけどな」

足音は近づいてくる

私たちは戦闘態勢をとる

と、

「フレイギガ・ナチュラリー・ストウリヤティ・カノン」！！
「！？！？」

謎の声、それと共に放たれる爆炎の螺旋
それはバラバラに別れて、 私たちに襲いかかる！

「……音無流…“散弾の技”」

焰の螺旋を迎え撃つは、 分裂した気弾

それはすべて紅い渦を撃ち抜いた！

「！？」

向こうが怯んだその瞬間、 私は2発目の“気弾”をさつきと同様、

持ってきたモデルガンから放つ

「……音無流……束縛の技」

その氣弾は正確に敵に叩き込まれ、もんどりうつのが見えた
そのまま、もがいてはいるが立ち上がる氣配はないので、警戒し
ながらも向こうに進む

現れたのは、青年だった

酷く不細工ぶさいくな

私の後ろに控えていた3人は一斉に吹き出すほど

「…わ、笑うなあ!!!」

「い、いや、だ、だって…」

「…わ、笑うなって、い、言われなくても…」

「そ、それで、わ、笑うなって、言う方が……」

憤る不細工、いまだ笑いを堪えている3人

私も、なにか言いたい、その不細工っぷりに声が出ない

「…く、くそっ! “ドレンティア・ヘクター・ブ……!”」

彼が唱えた謎の呪文、それをすべて唱えきる前に口を蹴る

少々冷酷だが、 謎の呪文詠唱を止めるには最善の一手だ

「……再び、 妙な呪文詠唱を始めたら…容赦なく…撃つ…」
「は、 はひ……」

モデルガンの銃口を不細工の口先にねじ込み脅す

雷華とフィアには周りを見渡すよう頼み、 少しずつ情報を引き出していく

不細工ことブ・タヤ・ロウガはすべてのイケメンを恨んでいた

この時点で“アホじゃねえか”という心の声が聞こえた気がするが
気にせず進めよう

古代呪文、 と呼ばれる高度な技術を手にした彼は、 ここでその
呪詛を詠唱中、 奇妙な物音を聞く

そっちに釣られ、 歩いていくと私たちに会った、 というわけだ

……………正直に言つと

「…くだらない……」

「くだらないだと!? 貴様には不細工の嘆きは聞こえんのか!？」

「

「…聞こえるわけじゃないですか……」

青葉も呆れたように呟く

さて、この男をどうするかだが…

「あー！ 凰輝さん！！」

「こっち！ こっち！」

向こうからやってきた凰輝に任せよう

「……なんだ？ この超不細工なブタヤロウは？」

「だっ！ 誰が「実は……」」

〃〃説明チユー〃〃

「……なるほど、よし、死ね！！」

「はあ！？ なん……！！」

「“桜花蹴撃”」

どつかああああああああああああああああん！！

凄まじく美しい蹴りが不細工に当たり、その不細工は吹き飛んでいく

その軌道は美しい弧を描いていた

きつと2度と会わないだろう

凰輝に連れられて、 私たちは凰輝の先祖、 “西上辰次” に会い
に行くため、 大きな神殿へと向かった
少ししたら全員に会えるだろう

そんなことを考えず、 私は辰次なる人物の姿を勝手に描いていた

其の肆拾漆：彼の先祖、その名は辰次（前書き）

今回で、 冥界編（そんなのあつたか？）は終わりです

其の肆拾漆：彼の先祖、その名は辰次

「ふう……」

私ことスチルは大きな神殿に辿り着いた

遠くから見ても大きかったが、近くで見るとさらに大きい

「…す、 凄い……」

「そう？」

「！？」

突然後ろから声をかけられ、思わず振り返る

そこにいたのは……

「お、 ここだな」

我が主、 西上凰輝はようやくここ、 巨大な神殿に辿り着いた

なお、 司会は黒龍が相変わらず勤めている

神殿は相変わらず、 呆れ返るほどデカイ

「あ、 凰輝」

「ん？ 紗か」

「スチルちゃんは？」

「知らん」

反対方向からやってきた紗、 恭助、 レナート
どうやら、 あと残りはスチルのみのようだ

「スチルさん…どこに行つたんでしょうか…」

「早くしねえと、 夜が明ける」

「もう一度この辺を探し「お探し物はコレ？」……誰だよ？」

突如上から聞こえた声に一同の視線が集まる

現れたのは小柄な女性、 遠くから見れば子供に見えなくはないだ
ろう

だが、 近づけばその鋭い顔つきから“修羅場”をくぐり抜けた武
人の表情が見てとれる

いや、“修羅場”をと言うよりは、“人の醜い部分”をと言っ
た方がいいかもしれない

彼女を見た恭助たちは不審な視線を女性に向ける

2人を除いて

凰輝と紗は懐かしさを込めた視線を投げかける

そして、

「久しぶりだな！ … お袋！！」
『……………』

え？
『

「龍華おばさん…久しぶ」私はまだまだおばさんっていう年齢じゃない！」……………！！」

ドカア！！

上から龍華が跳び蹴りを放つ

それは見事なまでに紗の頭頂部にクリーンヒットし、紗はそのまま転げ落ちる

私も久々の再会に声を震わせながら、再会の言葉を述べる

《久々だな…龍華よ》

「ん？ ああ！ 鋸！！ 久しぶりじゃん！！！」

《…もういい、慣れた……》

『……………』

久々の再会だったが、なんか吹き飛んだ気がした

ふと見れば、龍華はスチルを肩に担いでいる

スチルはゼイゼイと息を荒げながら、龍華に身を委ねている

一体なにがあつたのか、推測できることは3つ

1つ目は長旅で疲れたスチルを龍華が助けた。というケース

だが、スチルはそれなりの手練れ
体力も一応あるはずだ

2つ目はここに来て凶悪ななにかに襲われたスチルを龍華が助けた。
というケース

これも1つ目と同じく、スチルはそれなりの手練れ
そうそう簡単にここまで弱らせることは難しい

それに彼女の衣服は乱れてはいるものの、傷は浅いし、少ない
これだけの傷でここまで彼女を弱らせることができるだろうか？

3つ目

これが1番有力

「どうせ、お袋がスチルに抱きついてパニックを起こしたスチル
が勝手に疲れただけだろ？」

「ち、力が凄すぎるんです…死ぬかと思いました……」

それが正解か

「早く行くぞ、話が進まねえ」

凰輝が他の面々に呼びかける

その点では私も同感だ

そうして、我々は龍華と別れて、神殿の奥に進む

この先に凰輝の先祖にて、 四神流の開祖

西上辰次が、

いる

そこにいたのは、 白髪の青年だった

凰輝と比べても、 差に变化がないくらい高い
貫くような視線はその者の強さを誇示している
何百年着続けたのか、 はおっているコートはボロボロになっては
いるものの
その全身を包み込んでいる

「ふああああああああああああああ……寝む」

辰次は大きくアクビをすると、 その鋭い眼差しは一瞬で能天気な
ものへと変わる

雷華やスチルは半ば呆れ返りながら、 その青年を見つめていた

やがて、 辰次が凰輝たちに気づき、 軽い挨拶を交わす

「うつす…久しぶり」

「結構でかくなったなあ、 お前」

「お前が縮んだんじゃないかねえのか？」

「はっ！ どこのジジイの話だ？」

「お前」

「俺は生涯現役だっつーの」

「900年近く生き続けたクセに

人間は60過ぎたらジジババなんだよ」

「俺は人間を超越した！」

「じゃあ、 てめえは化け物だな」

「てめえに言われたかねえな」

「あっそ、 じゃあな」

「おう、 また10年後にこい」

「OK」

そう言って、 踵^{きびす}を返す凰輝

『……………』

え？ 終わり？ 』

「なにしてるんだ？ 帰るぞ」

「どうしてですか？」

「作者が限界」

「オイ、 しっかりしろよ」

紗の突っ込みが炸裂する

彼女としてはもう少し他の面々と話し合いたいのだろうか

凰輝は辰次の脇をくぐり抜け、 その先の岩肌を手をつける

そして

「火を司る朱雀よ

水を司る青龍よ

雷を司る白虎よ

木を司る玄武よ

土を司る麒麟きりんよ

そして……

すべての中心に位置する黄龍「じゅうりゅう」よ」

岩肌が熱と光を帯びていく

そして、 その光は段々強くなっていく

凰輝の服が、 風もないのにはためく

「開^{ひら}け、 冥^{めい}界^{かい}の戸^こを
開^あける、 あ^あの世^よとこ^この世^よとの境^{さかい}目^めを」

岩^い肌^{はだ}に扉^{かど}ができたかのごとく、 光^{ひかり}は中心^{しんしん}に集^あい、 縦^{たて}に切^きり開^{ひら}く

「現^{げん}世^せの聖^{せい}氣^きを、 冥^{めい}界^{かい}の邪^{じゃ}氣^きを、

我^{われ}はすべ^べてを受^うけ入^いれよう

汝^{なんじ}に祈^{いの}り、 汝^{なんじ}に唾^{つば}吐^はき、 汝^{なんじ}を讃^{ほめ}え、 汝^{なんじ}を罵^{ののし}倒^{たお}し、」

岩^い肌^{はだ}の光^{ひかり}はさら^{さら}に強^{つよ}くなり、 後^{のち}ろにいた雷^{らい}華^かたちはその眩^{くら}しさに
目^めを覆^{おほ}う

「汝^{なんじ}が聖^{せい}術^{じゆつ}を、 汝^{なんじ}が呪^{のろ}術^{じゆつ}を！ 今^{いま}、 我^{われ}に示^しせ！！ 四^し神^{しん}流^{りゅう}！！
！ “境^{きよう}界^{かい}裂^れ波^ぱ” ！！！！」

凄^{せい}まじい光^{ひかり}の乱^{らん}舞^ぶ

誰^{たれ}もが、 その眩^{くら}しさに目^めを瞑^{つむ}る

そして、 光^{ひかり}が完全^{かんぜん}に収^{おさ}ま^まったあと、 岩^い肌^{はだ}があ^あつた場^ば所^{じよ}には西^{せい}上^{じやう}

家^{いえ}が見^みえていた

鳳^{ほう}輝^きはそこに入^いり、 無^む事^じ帰^{かえ}宅^{たく}

『……………』

え??」

「どうした、早く来いよ」

「え? ええ??」

「え? 凰輝? なんで?」

混乱するメンバー

紗は少し冷静になって、 凰輝に尋ねた

「なんなの? さっきの技…」

「四神流“境界裂波”」

「そんなのあつたっけ?」

「さっき作った」

「オイ」

揃う突っ込み

ちなみに呪文じみた詠唱はぶっちゃけ関係ナシ

「帰るぞ〴〵置いていかれたいのか」

「いえ!!!」

雷華とフィアと恭助がほぼ同時に声を揃えて叫ぶ
やっぱり怖いのだろう

そそくさと西上家に帰っていく雷華たち

ただ1人、 青葉は少し名残惜しそうに後ろを見つめている

凰輝も再び冥界の中へと入り、 なにもない虚空を睨んでいる

「凰輝さん?」

「……ああ、 行こうぜ青葉」

「……………うん……………」

青葉と凰輝はもう一度虚空を睨み付けると、西上家へと戻る
レナートもスチルも気づいている
私も気づいた

あの神殿に……………いや、冥界に入ったときから……………

誰かが私たちをつけていた

其の肆拾漆：彼の先祖、その名は辰次（後書き）

ぶつちやけ境界裂波の詠唱は適當です

其の肆拾捌：彼の日記に書かれた事実・壱（前書き）

みなさんは日記をつけますか？

俺はつけません。絶対

其の肆拾捌：彼の日記に書かれた事実・壱

「……あれ？」

「どうしたのさ？」 雷華

早く片付けないと鳳輝から “ブラッディインスネイク 血塗れの双頭蛇” っていう技を喰らうよ」

うつす、 司会をやるのは久しぶりだな
アタシはファイア

今は雷華たちと片付けをしている
ちなみに鳳輝、 琥鈴、 レナートは出かけている
早く片付けないと鳳輝から “新技” 喰らう…
雷華は今、 本棚を整理中

……… なにか見つけたのか？

「…… “ 良い子の絵日記 ” ？」

「 名前のところに “ にしがみ おうき ” って書いてますよ」

「 鳳輝の絵日記か！！ 」

「 しかも “ 6 歳 ” って…… 」

この瞬間、 アタシたちの心は 1 つに固まった
どこぞのスポーツ選手たちより固まった

以後は鳳輝、 6 歳の日記である

なお、 途中の や《》欄はアタシたちの反応である

~~~~~

7月20日げつようび（はね）

平仮名だ……

平仮名ですね……

でも上手……

きょうからなつやすみ

なんとなくノリでにつきをつけてみる

《ノリ！？》

さつそく、この“良い子の絵日記”にちようごくあくにんである  
おれがかいてみた

《“ちよう”！？》

けっか、なにもおこらないくだらん  
きにくわないのであしたはすずをいじめよう

紗さん……！！

なんでだろう…涙が止まらない…！！

ウソ

《ウソかい！！》

あねきのごはんにせいさんカンをまぜて、  
ストレスかいしょう♪

《殺人鬼——！！》

せいさんカリってなんですか？

雷華…このアホ

あしたは1にちじゅうトイレにこもりっぱなしのはず

ウケケケケケ

劇薬盛ってそれだけ！？

げ……劇薬？？

雷華黙ってて

あしたがたのしみだ

………

「…なんていうのか…」

「…子供の頃から飛ばしすぎ…」

「せ、せいさんカリとか劇薬って一体…」

『気にしちゃダメ』

「は…ハイ………」

さて、 続き続き

~~~~~

7月21日かようび（はれ、 たぶん）

《たぶん！？》

きょうはびみょうなてんきだった
あねきがはんにちじゅうトイレにこもった
たいがいはなにもないびみ
ようないちにちだった

《原因あなた——！！》

~~~~~

「あれ？」

「どうしたのさ」

「日付が飛んでる……」

『オイ』

~~~~~

12月31日木曜日（曇り）

久々にガキのころの絵日記を見つけた

2日しか書いてなかった

まあ、いいや

うわっ、 適当

とりあえず普通に最近感じたことを書いてみる

受験勉強くそだりい

《受験勉強？》

あまりにダルいので最近調子にのりだした白石を殴っておく

《なぜに!?!》

あと、裸の写真を撮る

また調子にのりだしたらコレをインターネットに流す

《よく分かんないけど外道だ!!》

~~~~~

「……あ、」

「また、日付が飛んでるの？」

「うん………」

~~~~~

3月21日水曜日(嵐)

《嵐!?!?!》

確か、あの日はものすごいぽかぽか陽気でしたよ!?!?

今日、空からバカが1匹降ってきた

バカ!?! バカって私のこと!?!?

バカじゃん

どうも、頭のネジが2、30本ほど外れているらしい

《2…2、 30本つて……》

家に帰ったらなんかいた
だから、 問答無用で攻撃

《オイ》

雷を喚べるらしいので一応置いてやる

一応……

あとで思う存分いじめるがな

《……………》

3月22日木曜日<ruby><rb>(ノリ(

</rb><rp>(</rp><rt>ノリ!? </rt><
rp>)</rp></ruby>

紗の家に不法侵入する

《いきなり!?》

とりあえず許可をもらう
コレでいじめ放題だ

イヤッホウ！！

《そのノリが逆に怖い！！》

で、家に帰ったらまた不法侵入者がいた

あ、アタシだ

とりあえず攻撃

最近開発した精神的拷問を試そうとしたのに……ちっ

《なぜに舌打ち！？》

まあ、家にはまだまだ経済的余裕がある
一生遊べるほど

いつの間に……

そういえば気にしたこともなかったな……

だから新たに下僕が増えてラッキー♪

奴隷って書いて消した跡があるんですけど……
どっちもかわらねえよ

明日からいじめ放題だ

グッエツエツエツエツ

《なにその笑い方！？》

「また日付が飛んでる……」
「サボりすぎです……」

4月17日 月曜日（晴天か曇天）

《え？ どっち！？》

今日買い物の帰り、調子に乗ったヤクザを半殺しに
ちよつとだけ狂暴になった

イエイ

《なぜに！？》

そしたらなんか四神流のことを知ってるやつがいた
マジで腹が立つ
四神流は俺の誇りだ
それを気安く口にするなど言いたい

鳳輝さん……

まあ、雷華やフィアでストレス解消したからそれでよし

《え？ あれって八つ当たりだったの？》

よし、あとであの女半殺しだな

《ストレス解消出来てないじゃん!!》

~~~~~

「あれ？」

「また日付が飛んでるの？」

「ううん、次で終わりみたい」

「え——！？」

~~~~~

4月21日金曜日（雷華の頭の中が晴れ）

なにが言いたいんですか!？

バカだ、ってことだろ

なんか来た

即、返り討ちにした

名前と流派は忘れてしまった

まあ、いいや

《ひどい!!》

~~~~~

「What were you doing?」（訳・なにをしてい

たのかな君たち♪」

『……………』

「Bloody twin snake!!」

ドガア!!バキィ!!

『ぎゃあ——!!』

私たちの悲鳴は玉藻町全体に響き渡った…らしい

………そういえばあの日記

続きはあるのかな？

其の肆拾捌：彼の日記に書かれた事実・壱（後書き）

もしかしたら続かないかも…

其の肆拾玖：知らぬ恨みと爆炎の拳（前書き）

今回は新キャラと新技登場

サブタイトルは見たら分かるはず（たぶん）

其の肆拾玖：知らぬ恨みと爆炎の拳

「凰輝さ〜ん」

「ん？　なんだよ雷華

今、他の古代武術家たちとポーカーしてるんだよ」

あれ、司会をやるのは久々かな？

紗です

今、凰輝の家でポーカーをしています

まあ、なんにも賭けてはいないからスリル感は薄いけどね

「……来た」

「おゝよしよし」

「……うゝん、まあまあかなあ……」

セリフは上からレニー、凰輝、私です

手札はスリーカード

他の2人はよさそうなので、ここはドロップ（降りること）した  
ほうがいいかなあ…

ちなみにスリーカードは日本だけの言い方らしいよ

本来はスリー・オブ・ア・カインドって言うらしいよ

フォーカードはフォー・オブ・ア・カインド

ファイブカードはファイブ・オブ・ア・カインド

どうでもいい豆知識だよ

…話を戻そう

2人はニヤニヤしているし、私は…降りようかなあ…

「……ドロップ」

そう言うと共に私は5枚のトランプをテーブルに置く  
パサッという音と共に微かな風が来た

それと同時に凰輝が笑う

「へへっ♪俺は役<sup>ブタ</sup>なしでしたー♪」

「しまったあ!!」

「お、凰輝さん反則ですよ!」

「そうだぜ!!」

「はっ! ポーカーではこういうのは基本の常識なんだよ!!」

「……私はフルハウス」

「……………」

勝者、レニー

と、スチルちゃんがここでジュースを持ってきてくれたので少し  
休憩することに

「……そういえば凰輝」

「ん? なんだ?」

「…最近修行とかしてる?」

「……あゝ、そっぴやしてないな……」







パシッ

白石くんが放った一撃は鳳輝の手のひらにあっさり受けとめられた

「てめえがどのどいつかは知らないが…とりあえず死ね」

同級生だよ、 中学時代の

「……え？」

「四神流奥義“朱雀闘氣・放”<sup>はなち</sup>！！」

ゴヴッ！！ バジユッ！！

「ぐわああああああああああああああああ……！！」

キラーン

……… 説明

鳳輝が放った“朱雀闘氣・放”は早い話が焰の鳥だ  
その紅蓮の鳥は鳳輝の手から離れ、白石くんへと直撃  
そのまま夕焼け空へと白石くんを連れて飛んでいた

うん、 最強

「……うっし……まあまあかな」

「うん、 もう突っ込まない」

「早くポーカールの続きやるぞ」

「ハイハイ……」

「……分かった」

その晩、 大西洋を横断中の船に奇妙な物体が落ちてきたそうなの  
NASAはそれを宇宙から来たものとして調査中だとか  
また、 焔の鳥が世界中で飛んでいるのが確認され、 世界中の学  
者たちはその正体に頭を悩ませているそうなの

心当たりはものすごくあるのだが、 言わないことにしよう

其の肆拾玖：知らぬ恨みと爆炎の拳（後書き）

なぜ、白石が凰輝を憎んでいたのか…

前話を読んでみて考えてください

ちなみにレギュラーにする予定はありませんw w

其の伍拾：彼らと紡ぐ

小さな話（前書き）

今回はプチ短編集

其の伍拾：彼らと紡ぐ　小さな話

くくセミく

「そついえば凰輝さん……」

「どうした雷華？」

凰輝だ

今回はしょうもない短編集らしい  
作者がヘタレで本当に申し訳ない

あ？　俺は読者には優しいんだぞ

ほんの少しだけだが

雷華は庭先でなにかを見つめている

その声は少し寂しげというべきか

俺もついでに庭先に降り、　雷華の近くへと行く  
雷華が持っているのは……………

セミの死骸？

「セミの死骸がどうしたんだ？」

「セミって1週間しか生きられないんですよ…」

確かに

少々語弊があるが

セミの幼虫は2、3年ほど土の中で過ごす

中には5年近くも土の中で過ごす奴がいるとか

そして、成虫になって木の上で鳴き、メスを探す

その間はわずか1週間程度

ヘタすると3日って奴もいるらしい

「けどそれがどうかしたのか？」

「儚くないですか？ たった1週間ですよ」「1週間、おやつ抜き」

「……………」

割り込んだ俺の言葉に雷華は少し考えたあと、言った

「1週間って案外長いんですね…」  
「まあな」

〃〃地球儀〃〃

「レナート…なにしてた？」  
「地球儀回してる——」  
「なんでだよ？」

再び凰輝だ  
レナートが居間で寝転がりながら地球儀をぐるぐる回している  
古そうな地球儀だ  
倉庫から出してきたのか？

「倉庫から引つ張り出してきた——」  
「なんでまた」

「なんとなく——」

「でさあ、兄貴い……」

「あ？」

少し口を濁しながら話すレナート

相変わらず地球儀はグルングルン回している

「倉庫にはさあ……いろんなモノがあつて、それには名前が書いてあつただけどさあ」

「ん？ ああ……」

お袋からは常に“自分のモノには名前を書け”ってしつけられてきたからなあ

でも、それがどうしたんだ？

「“コレ”には大した意味はないよね？」

レナートは地球儀をピタリと止めるとその表面を見せる

そこには“こりんのもの（よてい）”と書かれてあった

姉貴……

まあ、その……なんだ

「気にすんな」  
「うん、じゃあ、気にしない」

くく 衰えくく

《伝説に挑戦！！ はたして彼らは達成できるのか！？》

「なあ、 凰輝……」

「なんだ？ ファイア」

凰輝だ

今、 “いきなり！！ 黄金○説” を観ている  
知ってるよな？ 知らない奴は帰れ

「なんで人間って辛いことをヒイヒイ言いながらやるんだ？」  
「頑張っているところを視聴者に観てもらって高い視聴率を狙っているんだろ

日本人つてのは“努力”とかっていうのに弱いからな」  
「へ〜……でも……」

ん？ なんだよファイア

あ、 ちなみに今黄金○説 では海女さんと一緒に海で貝を採ってる  
すげえよ○田

「でもさ……これって昔、 人間が普通にしてたんだろ？ なんで  
今さらヒイヒイ言いながら頑張るんだ？」

「それだけ人間の体力は衰えてるってことだろ  
気にすんな」

特に作者とか

「ふ……ふ……」

「なんだ？ その不信の眼は」

「いや、 だつて……」

ファイアの眼は明らかに疑っている  
そんな眼をしていると拷問するぞ、 久々に

「だつて……私の周りに運動神経が鈍い奴なんていないじゃん」

あゝ………その、 なんだ

「作品の壁を超えてみる」

「作者が非社交的だからムリ」

だろうなあ

〳〳創る者〳〳

「よっ……ほっ……」

「凰輝さん……？」

話しかけてきたのはスチルだ

「ん？　なんだ？」

「なにしているんですか？」

「木彫り物を彫ってる」

「いえ、そうじゃなくて……」

なんで“素手”で彫ってるんですか？」

「四神流“斬撃指閃”だ」

「いえ…そうじゃなくてですね……」

「ノリだ」

「………もういいです」

あ、指閃っていうのは指でチョンチョンとやることだ  
最近編み出した新技だ

威力が小さく、攻撃範囲が狭いかわりに消耗も少ない

まあ、大抵はこういう風に細かいところを削ったりするだけだ  
けだな

むう………結構難しいな…コレ

「………なに彫ってるんですか？」

「ん？ …… ああ」

ちょうど完成したし

俺は彫っていた物をスチルに投げ渡す

彫っていたのは……

「…………… 私？」

「まあな、 全員分彫ろうと思ってな」

「へえ… そうですか…」

スチルの眼には喜びや感謝の感情が浮かんでいる

まあ、 でも……

「凹凸がない分彫りやすかったけど、 小さいから苦勞したぜ」

「…………… どうせ、 私は幼児体型ですよ……」

ありゃ？ すねちまったか  
まあ、 気にしないけど

くく知識くく

「鳳輝、 なにしてんだ？」

「あ、 姉貴  
宿題だよ  
見て分かれ」

あ？ 俺だつて宿題ぐらいするぜ？  
夏休みや冬休みの長期休暇だつて1回もサボったことはないんだぜ？  
だから、 なんだその不信げな目線は

「へ」

.....

教えてあげよつか？  
」

「別にいいよ、 できないわけでもないし」

第一、 あんた中卒じゃねえか  
高2の勉強したことねえじゃねえか

「大丈夫、 大丈夫」

「あ、 てめえ宿題盗るな！ 返せ！！」

勝手に俺の宿題を取る姉貴

調子乗ってる拷問するぞ？ もう、 あんたよりつええんだぞ？

ああ？

姉貴は少し考えたあと、 俺の机に宿題をポンツと置くと、 気難  
しそうに言った

「ま、 まあ、 二つというのは本人がやらなきゃ……ね？？」  
」

分からなかったんだな

其の伍拾巻：彼らと楽しみめ体育祭！（前書き）

細かいことは気にせずに

其の伍拾巻：彼らと楽しみめ体育祭！

……………そこはいつもとは違う雰囲気にも包まれていました

「ぜったいに勝つぞおおおおおおおおおおおおおお  
お！！！！」

『おおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』  
「うるせえよボケ共が」

内臓ぶちまけられてえか、オラ」  
『マジ、すみませんでしたあ！！』

切れる凰輝さんに土下座する集団  
彼らは“空手部”と言う集団らしく

……………

とても暑苦しい……

あ、私はスチルです  
今日は“体育祭”という日らしく、大半が身軽な格好をしていて  
燃えています

凰輝さんも、 紗さんも、 青葉さんも、 恭介さんも、 みんな  
身軽な服装をしている

少し違うのは頭になっているハチマキ

凰輝さんと紗さんは青、 青葉さん、 恭介さんは赤

他にも黄や緑、 白はまあいいとしても、 藍はありえないと思うのは私だけではないはず

何気に私や雷華ちゃんやフィア、 レナートも身軽な格好をして（鈴さんたちから借りました）それぞれ別々の色のハチマキをします

そう、 私たちもひそかに参加します

「頑張るぞ——」

「お——！！」

気合いを入れ合うレナートたち

私は心配になって凰輝さんに聞いてみた

「あの……本当に大丈夫なんですか……？」

「大丈夫だ。」

「え？ でも……」

「だから大丈夫だ。 不審に思われたら“凰輝の連れ”だと言え

十中八九通用する」

「……え？ ええ？？」

「校長の許可は取った」

「え？ 校長？」

よく分かりませんが、きっと脅すかなにかして……いえ、深く  
考えないようにしましょう

私は、緑のハチマキをしています  
彼らいわく、“翠組”<sup>みどり</sup>だそうです

……普通に“緑”でよくありません？

ちなみに雷華は“緋組”<sup>あか</sup>、フィアは“蒼組”<sup>あお</sup>、  
レナートは“愛組”<sup>あい</sup>です

……なんで“藍”<sup>あい</sup>じゃないんですか？

ちなみに他の組は“姫組”<sup>き</sup>、“代組”<sup>しろ</sup>です

なんか……変じゃありませんか？

「おい！！ ソコのガキ！！！」

「……え？ 私ですか？？」

「そう！ なんで、お前も参加するんだ！？」

「え？ いや、あの……」

私に語りかけたのは黒田先生

覚えてます？ 其の参拾伍に1回出てきたきりの人です

「もうちよつと大きくなってから来な！！ アッハッハッハッハッ

！！」

「……………」

プツーン♪

「私は“西上鳳輝に連れられて”来たんです！！！」

「……………」

言ってやった

そうしたら、 一気に顔を青ざめる黒田先生

…………… なにかあったのでしょうか？

「……………」

「あ、」

ダッ……………！！

一気にダッシュで逃げられました

……なんで、……なんで……なんで逃げ出したんですか……？

詳しく考えないようにしましょう

「さあ……て」

腕捲りをしながら気合いを入れる凰輝さん

他の面々も次々と気合いを入れて、それぞれの位地につく

ちなみにチームのメンバーの確認

緋組

並町青葉

篠田恭介

雷華

蒼組

西上凰輝

赤野紗

ファイア

翠組

スチル

愛組

レナート

代組  
ナシ

姫組  
ナシ

《今から“第69回玉藻高校体育祭”を始める！！  
生徒、参加者は今すぐ規定の位地につけ！！  
繰り返す！！ 今から…》

「……なんで命令口調なんですか？」

トウエンティフォー  
「24を意識しているらしいぜ」

トウエンティフォー  
「……24？」

《以上！！ ジャック・バウアーがお送りした！！》

《あんた島田洋司やろうが！！》

………シーン

………とりあえず、次回から始まります！

乞うご期待!!

〃〃現在得点〃〃

|    |   |   |   |
|----|---|---|---|
| 緋組 | 0 | 0 | 0 |
| 蒼組 | 0 | 0 | 0 |
| 翠組 | 0 | 0 | 0 |
| 愛組 | 0 | 0 | 0 |
| 代組 | 0 | 0 | 0 |
| 姫組 | 0 | 0 | 0 |

其の伍拾巻：彼らと楽しみ体育祭！（後書き）

24を実際に見たわけではないんだよなあ…  
そついうのをネタにしている芸人がいたからつい…

24ファンの皆様

マジでごめんなさい

其の伍拾式：彼らと競え体育祭！

《ただいまより、 “徒競走” を行う！

選手のみんなは規定の位置に集まれ！

》

「だれが行くのか？」

「俺。」

どうも、 紗です

いよいよ始まった体育祭

全ての組が必死に準備をしています

その中でゆつくり準備をしている男

そう、 西上凰輝

「さてと、 行ってくるか」

「ハイハイ、 頑張って」

軽く腕を振り回しながら、 肩を鳴らしつつ出陣する凰輝

全員の準備が整い、 それぞれのレーンにつく

そして、

「よゝゝい……」

ドゥーン！！ ヒュゥーン！！

「ゴール」

『……………え？』

……………あゝ

いらないかもしれないけど一応説明を

銃が鳴る、 凰輝が走る、 凰輝ゴール、 終わり  
もう、 それ以上でもそれ以下でもない  
本当にただそれだけ

……………少しは手加減してあげて

《……………結果を発表する！！》

1 位蒼組、 2 位代組、 3 位緋組、 4 位翠組、 5 位姫組、  
6 位愛組》

このあとは凰輝のような圧倒的なレースもなく

結果

愛組 + 3 3  
姫組 + 2 9  
蒼組 + 2 8  
代組 + 2 8  
翠組 + 2 6  
緋組 + 2 2

ちなみに6回レースで、 1位が10点

2位が7点  
3位が5点  
4位が3点  
5位が2点  
6位が1点

ヒマな人はどの組が何位をどれだけとったか数えてみるのもいいかも

「…だらしないですね」

「愛組と11点差か…」

「つ、次に期待しましょう！！」

「このまま突っ切ろうZE」

緋組からは落胆と期待の声があがる

愛組からは期待と喜びの声があがる

蒼組はただ1人西上凰輝が不満の声をあげていた

「たつく…3位かよ…」

「だ、大丈夫だよ！！ 騎馬戦とか、組対抗リレーとかは得点高いから！！」

「あとで、あのボケ殺す…」

「お、 凰輝落ち着け！！ 落ち着いてくれ！！」

あのボケっているのは1番最後に最下位になった人

今のうちに逃がしておこうかな……

次は昔なつかしパン食い競走

翠組からはスチルが出場している

小柄ながら1番速い

やがて、 6つあるうちの1つのパンにかぶりつく

ハムッ……

「！？！？！？！？」

突然つまずいてもいないのに地面を転がりだすスチル

「当たったね……」

「当たったな……」

そう、 我が高校には毎年のようにパン食い競走が行われている  
そして、 その6つあるパンのうち、 1つになぜかあんのかわり

にワサビが入ったパンがある

どうやらスチルがそれにかかったらしい  
いまだゴロゴロ転がり続けているスチルは、  
他の人に抜かされな  
がらも3位で無事？ ゴール

「だ、大丈夫！？」

「…ひえんひえんらいひょうひゃあひはへん…（訳…全然大丈夫じゃありません…）」

「たつく…だれだよ…言つとけつて言つたろ」

………こういうことがあるため、  
パン食い競走は徒競走よりも得点が高い

なお、このあとは2回連続でうちのクラスにワサビパンがきた  
けど、  
凰輝の怒りの方が恐ろしいのか  
なんと3回終了で25点という高得点で終了

ちなみにパン食い競走の得点は

1位 15  
2位 10  
3位 8  
4位 5  
5位 3  
6位 1

各組の結果は

蒼組 + 25

緋組 + 23

翠組 + 23

愛組 + 19  
代組 + 19  
姫組 + 17

「おつし！ 抜いた！！」

「このまま突っ切ろうぜ！」

わずか1点差だが、確実に蒼組は愛組を抜いて、首位に躍り出る

緋組も蒼組と8点差とほんの少しだが差を詰めることができた

そのあと、1年や3年の競技が続き、翠組が首位に躍り出た

《今から昼休みだ！！ しっかり栄養と休養を取り、後半戦に挑め！！》

その言葉に張りつめていた空気も若干和らぎ、各々が自由に昼食をとる

「後半の方が得点が高いからな、しっかり喰えよ」

凰輝がそんなことを言わなくてもフィアちゃんたちはお弁当を必死で頼張っている

凰輝も今回はなにも言わず、自分が作ったお弁当を食べていた

「…得点差…大丈夫か？」

「言っただろうが、後半の方が得点が高いんだよだから、今は喰え」

今、 翠組と蒼組の差は27点  
少々厳しいが、 全くというわけでもない

「そっいえば凰輝ってこういうのに結構熱くなるんだな」  
「ん？ ああ……」

「これはノリだ」  
「……………」

え？  
「だからこれはノリだ」  
「……………」

もう、 どうでもいいや……

昼食が終わり、 4×200mリレーも順調に進んだ

……え？ ココで切るの？

Yes♪by作者

〔現在得点〕

緋組 202

蒼組 197

翠組 209

愛組 152

代組 150

姫組 160

うつわ……点差偏りすぎじゃん

ほっとけ by作者

其の伍拾参：彼らと争え体育祭！

《次は騎馬戦だ！ 参加するものは今すぐ入場門に集まれ！！》

「頑張れよ」

「鳳輝こそ！！」

司会は俺、 鳳輝が勤めさせてもらう

騎馬戦には…………お、 知ってる奴らが全員出たら

「…………負けませんから」

「鳳輝、 勝たせてもらうぜ！！」

緋組とは1番最後に戦うことになっている  
最初は代組との勝負

俺、 紗、 フィアは全員騎馬の上に乗っており  
さらに、 フィアは大将用のハチマキを絞めている

《はじめ！！》

『おおおおおおおおおおおおおお！！！！』

「1人につき、 2人で潰せ

余ったのは俺と紗で潰す」

突撃してくる代組に冷静に応戦する蒼組  
それに指示を飛ばす俺

紗は俺の言うことを聞かず、 敵に突撃している

囲まれたら紗の方が圧倒的に不利になる

普通ならば

だが、紗は普通じゃない  
あつという間に周りの3人のハチマキを机の上にある紙を取るよう  
にパツパと取っていく

それに鼓舞こほされたように蒼組のみんなも突撃していく

普通、騎馬戦では8騎で戦う  
だが、最後の代組大将のハチマキが頭から離れたときには蒼組は  
7騎も残っていた

圧勝

次は翠組との勝負

スチルが大将をしている  
始まると同時に総力戦となった

紗が次々と取っていくなか、スチルもウチの1人と渡り合っていた

「おりゃ！」

「危なっ！」

蒼組の1人が腕を振り回すが、スチルはしゃがんで回避する  
小さくて軽いから下の奴らは楽だろうな

「西上凰輝！ その首もらった！！」  
「邪魔」

右からやってきた翠組<sup>ザコ</sup>の1人を右パンチで沈める

あ？ 反則だあ？

知るか

見られなきゃいいんだよ、見られなきゃ

スチルは紗と押し合いをいている

2人の足元には青と緑のハチマキが散らばっている

2人の細い腕が筋を立てて、ピクピクいつている

「…な、中々やりますね…」

「スチルちゃん、ごめんね」

「……え？」

会話を無視して謝る紗

スチルの返答は宙を舞う

「おりやああああああああああああああああああ！！！！」

「う、うわああああああああああああああああ！！！！？」

「

スチルの小柄な肉体は紗の腕の動きに合わせて騎馬から転げ落ちる

どしゃあ

小柄な肉体に相応しい軽い音を立てて、スチルは地面に叩きつけられる

翠組<sup>ザコ</sup>の面々はまだいたが、大將が殺られれば（殺ってません）そ

れで終わり

周りを見れば、  
蒼組おれたちは4人程度しかいなかった

愛組の戦いはすぐに終わった

調子に乗って突撃してくる大将とレナートを俺がそれぞれに正拳突きで叩き落とす

反則じゃないぞ

レナートも大鎌を振りかざしてきたから正当防衛だぞ

正当防衛

で、次は代組との戦い

………って

『……なっ！ なんじゃこりゃあああああああああああ  
ああああ！?!?!?』

重なる蒼組おれたちの声

そう、奴らは大將を1番上にしてピラミッド状に立ちはだかつていた

合計1コ

ハチマキをしている、いわば騎馬の上にいるであろう連中はピラ

ミッドの上あたりにいた

一番下の真ん中にいる奴が嘲笑うように言う

「フハハハハ！　どうだ！　これぞ最強の陣形！！　誰にも破れまい！！」

「……それはいいんだけど……」

どうやって戦うの？」

紗のセリフに硬直する世界

代組もそこまでは考えていなかったらしい

俺はおもむろに近づくと、　4段目のはしっこにいた奴を引っこ抜く

揺れるピラミッド

退避する俺たち

そして、

『うわあああああああああああああああ！？！？！？』

ぐじゃぐじゃぐじゃぐじゃぐじゃぐじゃあ……！

豪快な音を立てて崩れ落ちる代組  
完全勝利としか言いようがない

そして、この戦法は最弱だと言いたい

そして、最後の緋組との決戦

蒼組も緋組も今まで完勝だからこれに勝った方がこの騎馬戦の優勝組となる

「行くぞおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

『おおおおおおおおおおおおおおおお！！！』

「絶対負けねえぞおおおおおおおおおおおおおお！！」

「

『おおおおおおおおおおおおおお！！！』

』

それぞれが士気を高めあうなか、青葉や恭介は騎馬の準備をする  
なんだ、アイツらは下か

そして雷華は大将用のハチマキをしている

俺たちも騎馬の上に乗る、士気を高める

俺も氣を高めようかと思っただが、下の奴らが気絶したら困るので  
止めておく

《最終戦…用意…始めえ！！》

パン…！！

軽い、大きな音を立てながら煙を吐く拳銃  
それを合図に緋組対蒼組の総力戦が始まった

体当りの衝撃に耐えきれず崩れる騎馬

耐えたもののバランスを崩し、そのスキに敵にハチマキを取られた騎馬

あつという間に緋は3騎、蒼は4騎失った

「雷華！！今ココで決着つけてやる！！」

「望むところです！！」

『ああああああああああああああああ！！！！』

奇声を上げながら取っ組み合いを始める大将騎2騎  
そのぶつかり合いはまさに神々の黄昏ラグナロクのよう

見とれている場合ではなく、俺と紗はそれぞれ2騎ずつ討ち取った  
気がつけば蒼組ウチのもう1騎も崩れていた  
まあ、そんなに期待はしてなかったが

つまり、今蒼組は3騎、緋組は1騎

困めばいいのだろうが、ココは2人で心行くまで闘やらせておこう

幾度となくぶつかる2騎

ファイアが出した手を捌き、反撃にでる雷華

それを上手くかわし、再び手を伸ばすファイア

が、ここで

蒼組ファイア大将騎の騎馬が組んでいた腕が滑った  
不運としか言いようがない結末

バランスを崩すフィア

そのスキを逃さず、 雷華はフィアのハチマキを奪い取る

ゲームセット

《優勝は緋組い！！》

司会の大声は蒼組内に虚しく響いた……………

次の1年の競技中、 フィアはずっと体育館裏にいた  
なにをしているのかは大体分かる

だが……………

俺は立ち上がると体育館裏に向かった

「ファイア……」

「……………」

「……………」

なにも言わないファイア

薄っぺらい励ましなどかける気などさらさらない

ただ1言

コレだけを言いにくた

「ファイア……」

悔しくて泣いてるヒマがあるんなら……………」

強くなって見返してやれ……!!

お前の真価は戦闘だろ……!!」

「分がつ……！！ 分がしまじだあ……！！」

1年の競技は蒼組おれたちが勝つたらしい

まだまだ逆転のチャンスはある

〃〃現在得点〃〃

緋組 3 1 7

蒼組 3 0 7

翠組 2 6 9

愛組 1 6 2

代組 2 1 5

姫組 1 8 5

其の伍拾参：彼らと争え体育祭！（後書き）

実は、 騎馬戦ネタが浮かんだために体育祭編をしたようなもの

其の伍拾肆：彼らと終える体育祭！（前書き）

いよいよ体育祭編も最終章！  
結果はあなたの目で確認を

其の伍拾肆：彼らと終える体育祭！

どうも、 凰輝だ

最近俺の影薄くね？

まあ、 いいや

遂に競技もこれで最後となる体育祭

最後の競技……それは…

「 全学年メドレーリレー 」？ 」

「 ああ、 この体育祭の目玉みたいなやつでな

各学年からそれぞれ3人出てくるんだ」

「 それに優勝したら100点！ 最後にして最大の逆転チャンスつてわけ！！ 」

「 へっ…… 」

「 まあ、 それでだ…

不運にもウチの組から1人気分を悪くして休んでる奴がいてな」

騎馬戦が終わった辺りからな

やつぱあれか？

アイツの鳩尾に肘を叩き込んだのがいけなかったのか？

「 そいつの代わりに出てもらいたいんだg」出る！ 絶対出る！！

「 あっそ」

メラメラと闘志を燃えたぎらせながら、 フィアは俺の言葉をさえ

ぎる

4、 5 発くらい殴りたくなっただがここは堪えておこう

Cool down

Cool down

《いよいよ！ 最後の競技“ 全学年メドレーリレー ”だ！！  
出場者は集合場所に集まれ！！》

「おつし、 行くか！」

「おう！！」

「頑張つてね！！」

紗の応援を受け、 俺とフィアは集合場所へと向かう

「行くぞおおおおおおおおおおおお！！」

野郎共おおおおおおおおおおおお！！！！！！

『うおおおおおおおおおおおお！！！！！！』

「shut up（訳・黙れやボケ共）」

くくちよつと待つてねくくく

《位置について…用意…！！》

タウン！！

拳銃から乾いた音が響く

それと同時に6人が一斉に走り出す

全学年メドレーリレー

まずは1年からだ

「うおおおおおおおおおおおおおおお！！」

代組のくそやかましい気合いの声に他の組が怯む

最初に広がった差は埋めようがなく、そのまま1位で代組の2番手が走り出す

次々と渡されるバトン

緋組から恭介が3番手として走り出す

意外に速い

首位を貫いていた代組との差を一気に詰めて、追い越す

この逆転劇にはどの組も予想していなかったのだろう

声が次々と漏れる

「やるじゃねえか恭介！！」

「先輩頑張つて！！」

「地味にすげえぞ！！ 恭介！！」

「地味だけどすごいつす先輩！！」

「地味だけど！！」

《速いぞ緋組！ 地味だけど！！》

「俺ってそんなに地味……？」

バトンを4番手に渡したあと、恭介は燃え尽きたように呟いたそうだ

青葉いわく

彼女は普通に「地味だ」と返答したらしい  
俺も同意見だ

他の組の4番手、5番手の活躍もあつてか

6番手にバトンが渡るころには、ほとんど横並びになっていた  
蒼組ウチからはフィアが緋組からは雷華が出ている  
そっぴいえばスチルとレナートは出てねえな

「うりやああああああああああああああああ！！」

「だああああああああああああああああ！！」

「ほわたああああああああああああああああ！！」

全力疾走する緋組、蒼組、愛組の3人

他の3組をぐんぐん引き離していく  
というか最後の声はなんなんだ？

「うわつと！」

雷華がバランスを崩す

それにつられるように愛組の奴もバランスを崩し、こける

タイミングが

悪かった

《ああ〜つと！！ 蒼組！ 愛組に引つ掛かりこけたあ！！》

3組の中で最後尾にいたフィアは愛組の奴がこけたために、その体に引っ掛かりこける

雷華はバランスをどうにかたもちながら、先へと疾走する

「くそっ……!!」

負けっぱなしは……!!

嫌なんだよお!!」

そう言い放つと、素早く体を起き上がらせ、フィアは疾走するリレーでこけたときにもっともタイムロスとなるのは痛みで起き上がれなくなる時間だ  
傷の痛みよりも実は時間のロスにつながる

その点、フィアの起き上がりは素早かった

雷華に追いつこうと全力で走る

やがて、追いつき

そして、

《蒼組！ 緋組を追い越したあああああああああああああ

あああ！！ 》

『よつしやああああああああああああああああ！！』

ウチの  
蒼組陣営から沸き上がる歓声

それに後押しされたようにフィアはスピードを落とすことなく、  
7番手にバトンパスをする

少し遅れて雷華もバトンを次につなぐ

だが

7、 8番手とも遅く次々と抜かされていく

「なにしてんだよ……」

9番手さいじの場所で待機している俺は、 呆れたように呟くしかない  
他の5組が次々とバトンパスするなか俺はアグラをかいて待つ

「おまたせ…って、 うおおおおおおおおおおおおおお

おい！？

「遅い！！」

8番手が息を切らせながらの突っ込みを怒りの1言で切り返す  
普通にバトンを受け取り、 自慢（？）の駿足で駆け抜ける

《来たああああああああああああああああ！！

西上凰輝！ 神速の格闘家あ！！ 》

「それ少し大げさ」

大げさな司会に突っ込みながら、 一気に3組抜き去る  
残りは代組と姫組  
だが、 ゴールも近い

仕方がない

グラウンドを蹴り碎きながら、 神速の域に達する

周りからは俺の姿は消えたように見えただろう

グラウンドを碎きながら、 確実に残りの2人を追い上げていく

そのままゴールテープを斬る

その字のとおり、 ゴールテープは一刀両断される

《まさかの大逆転!!

蒼組逆転優勝!!》

「凰輝い! やってくれたぜ!!」

「凰輝、 お疲れ様」

「…ん、 まあな」

《そして、 MVPは…!!

フィアに決定!!!!》

「エ…MVP??」

「最優秀選手賞のことさ

金一封が送られる」

「き…金一封!？」

よっしやあ!!」

無邪気に喜ぶファイア

走りながら雷華たちの元へと駆け寄っていく

ふと横を見れば重松先生がいた  
懐かしいな、 オイ

「いいねえ…青春って」

「あんたはドコのババアだ？」

「ほっとけ

それにしても……」

「ああ……」

重松先生も同じ考えに達したらしい

「あんなに無邪気に喜んで……

金一封の正体が鉛筆2ダースとノート6冊だとは知らずに……」

「もうちょいいい賞品にしろよ

今どき鉛筆はないだろ鉛筆は」

「私もそう思う……」

体育祭の終わりを告げる音は蒼組の声にかき消えて、  
聞こえなかつた………

其の伍拾肆：彼らと終える体育祭！（後書き）

最近、長編を書くことが多くなってきた気がする…

其の伍拾伍：彼らの両親と継がれた想い（前書き）

しまった！！ サブタイトルと関係ないかも！！  
：まあいいや

其の伍拾伍：彼らの両親と継がれた想い

「そういえば…」

ずっと気になってたんですけど……

凰輝さんたちの両親って…」

「……………」

「……………」

ウィッス、 琥鈴だ

雷華っていうバカが私たちの両親を聞いてきたので……

バキィ！

「お、 凰輝さん！ なにするんですか！？」

「……………」

殴ろうと思っていたのだが、 先に凰輝が殴っちまった

チッ

「…ちよつと黙ってる」

『は…はい……………』

本気で殺気を放つ凰輝にビビる3人

レナートはビビってない、 むしろ殺気を受けて眼を鋭くしている

これは私の意見だが、レナートは普段はバカな振りをしているが、  
本当は賢いと思う  
なぜにバカの振りをしているのかは分からないが、レナートは絶  
対なにかを隠している  
まあ、そんなことは知ったこっちゃないがな  
誰にだって隠したいことはあるだろうし

「お袋や親父はとくに死んでるよ」  
「……！！……すみません」  
「なぜに謝る？俺は“死”なんて見慣れている」  
「………はあ？」

平然と言つてのける凰輝にすっとんきような声を上げる4人  
今度はレナートも混ぜって声を上げる

私自身知っている

いくつもの“死”の香り

「にわとり鶏の首を絞めて殺したことがあるし  
近所の野良犬を叩き殺したこともある」

「へ、へえ……そうですか……」

呆れるスチル

鳳輝の言葉に重なるように私も言う

「そのたんびにお母さんに言われてたよ

“誰にでも1度くらいは罪を悔いて、やり直すチャンスは与えな  
いといけない

だからこそ、命は簡単に奪うべきではない

もし、やむなき理由で命を奪ってしまったなら、その命を決  
して忘れてはいけない”って」

「へえー……」

「いい言葉ですね……」

そう、いい言葉だ

普通なら

「でも、“ヒグマが食いたい”という理由でヒグマの頸骨を片手  
でへし折っていた人物が言うセリフじゃないだろ？」

『……え？ ヒグマ？』

「ヒグマ」

「ヒグマ？」

「ヒグマ。」

「片手で？」

「片手で。」

「へし折った？」

「へし折った。」

「食べたいから？」

「食べたいから。………ってなんだこの中途半端なループは」

中途半端なループを終わらせ話を元へと戻す

「まあ、お袋はお前らも1回会っただろう？」

「ええ、え」と

たしか冥界で1度……」

「うん、お母さんは武人だったからねえ…

四神流の先代継承者は実はお母さんなんだ

お父さんは西上家に婿養子に行ったから」

「へ、へえ………そうなんですか

お父さんやお母さんはどんな人物なんですか？」

「親父は………打たれ強かった」

「打たれ強かった？」

「ああ、お袋の大木をへし折る正拳突きにも口から血を滴らせながら笑っていれるほどな」

『………え？ 大木をへし折る？』

「へし折る。」

「だれがですか？」

「お袋。」

「ど…どうやってやるんですか？」

「正拳突き。」

「………え、え」と

「なんもないなら言うな」

「は、はい………」

「お父さんが笑ってることには突っ込まないんだね………」

私は軽く呆れながら、 4人を見た

『あ。』

4人は気がついたように言う

凰輝はやれやれと言わんばかりに首を振る

下らない

「ほ、他の特徴はなんなんですか？」

「優しかったねえ……」

「優しかった

昔、高い高いで飛行機を見たことがあったっけ」

「……ひ……飛行機……ですか……？」

「そのままライダーキックで戻ってきたからなあ

小さいクレーターができたときは笑っていたよ」

『……ク……クレーター……わ……笑っ……』

「兄貴凄ーい」

凰輝の体験談に顔を青ざめてながらひきつらせる3人に対するように笑顔で凰輝を誉めるレナート

凰輝は立ち上がり、湯を沸かす

「お母さんはどんな人だったんですか？」

「気さくな人」

「……気さく……ですか……？」

「そう、笑顔でアスファルトを割る人だった」

「……凰輝さん家って……」

なにかを決意したように雷華が言う

「……ああ？」

「……とんでもない……一家なんですね……」  
「まあな」

凰輝は沸かした湯で紅茶を作り、 飲み干した  
……あゝ

「私にも紅茶入れて」  
「イヤだ」

けち

其の伍拾陸：集いし者らは古の猛者たち（前書き）

古代武術家が続々集結！

## 其の伍拾陸：集いし者らは古の猛者たち

玉藻神社――

赤野紗は1人で座禅を組んでいた

紗は静かに目を閉じ、指1本動かさず、風で髪が乱れることもかまわずただ座禅を組んでいる

そこに忍び寄る1人の男――

少し大柄なその男は右手に日本刀を携たすえている  
もちろん本物

男は日本刀を両手に持ちかえ頭上に構え、紗の頭に振り下ろした

パシッ

「……………！！」

男が軽く息を飲む

紗は振り返らず、目も閉じたまま、右手で日本刀を受け止めていた

血は1滴も流れていない

男は日本刀を引っ張り出そうとするが、まるでそこだけ凍りつい

たように動かない

そして、

「……豊華流“芒投”すすきなげ」

ブウン……どしゃ…！

まるで壊れたオモチャを投げ捨てるように紗は片手でその男を投げ飛ばした

だが、男はなにこともなかったかのごとく立ち上がり、土を払う  
紗も目を開いて男を見る

そして、ため息をつく

「兄さん……修行の邪魔はしないでって言ったでしょ…」

「紗……もう1回頼む」

「イヤ。」

そう、この男

実は紗の兄なのだ

名前は赤野武彦たけひこ

ドM

「…まったく…せっかく新技ができるかな、なんて思っていたのに…」

「俺も紗が新たな性癖に目覚めてくれるかと…」

「殴るよ」

「殴って」

紗は無駄だと悟った

「紗よ……」

「なに？」

少し間を置いて兄さんがお茶を持ってきたので一服する

私、紗は久々に修行をしていた

鳳輝に少しは通用するような新技を開発しようと思っていたのだけ  
ど……

「しb「しばかないよ」…グスン…」

2度とは通用しない

まったく、ウチの兄さんは変態すぎる

鳳輝は若い娘がいいってわがまま言うし……

兄さんが女だったらなあ……  
はあ……

「ところで……紗……」

「言っとくけどSMプレイならしないから」

「違うから」

「やってほしいけど」

ここで本音が出るあたりが兄さんらしい

「なんで今になって修行なんか始めたんだ？」

「ライバルが増えてきたから……かな？」

「ライバル？」

兄さんが首をかしげる

私はアグラをかいて、説明する

「四神流…音無流…豊華流……」

今、少なくとも3つの古代武術がここ、日本にある

もうすぐ他の古代武術家たちもこの日本にやってくる……

鳳輝にばかりかつこいい役目を任せたくはないからね

それに……」

「……それに？」

「雷華ちゃんたちを守るのは私だけだから……」

「それはなんてうらやm……いやいや、大変だな」

……もうなにも言わない  
言えない

鳳輝も今ごろは修行したりしているのだろうか……  
いや、してないね多分

「……………四神流奥義“朱雀闘氣・纏”まとい」

ゴウッ！

あ、うっす

フィアだ

鳳輝はさっきから炎をまとったり、氷をまとったり訳分からねえ

あと、ここは鳳輝ん家じゃない

近くの山だ

鳳輝の前には木でできた人形が数体  
なにする気だ？

「……………四神流奥義“朱雀乱舞”」

鳳輝の姿がかき消えた

いや、あまりの速さにアタシが見失っただけか

ヒュッ！！……………ドガガガガガガガ！！！！！！

速い

一瞬でデク人形が炎に包まれながらバラバラに砕け散る  
少し間を置いて、 凰輝がアタシより数歩離れたところに現れる  
知らず知らずの内にアタシたちは呟いていた

『す、 すごい……！ 』

「…うっし、 こんなもんか」

そのあと2、 3程似たような技をデク人形に繰り返し、 すべて  
のデク人形はバラバラに砕け散った

「おし、 帰るか」

そう言つて踵を返す凰輝  
スチルが気になったのか、 凰輝に尋ねる

「凰輝さんはなぜこんなことをしよう？」

「“コレ” が来たからには技の確認をせざるをえんだろ」

『“コレ”？ 』

凰輝が懐から取り出したのは………手紙？

そこには“もうすぐそっちに娘連れて行くから、 ユキナ”と書か  
れていた

「凰輝、 ユキナって………だれ？」

「“白銀流”の使い手だ

前にやってきた………名前忘れた奴とは大違いだ

………油断は出来ねえな」

『……………』

「とすると“アイツ”も来るな……クソッ、 めんどくせえ」

「アイツ？」

尋ねたのはレナート

鳳輝はその問いを無視して歩き出す  
一言付け加えて

「速く来い、 晩飯抜くぞ」

抜かれては大変とばかりにアタシたちは走り出した  
この先に来る激闘を知らず

「久々ね…日本も…」

ロングコートの若い女性が成田空港を出て開口一番のセリフがこれだ  
ちなみにドイツ語

左手には旅行用のトランクケースを、  
右手には幼い少女を引き連れた彼女はほとんどの男性が振り返る程  
の美人だった

「おかあさんどこいくの？」

少女が同じくドイツ語で母親に尋ねた

母親はたいていの男性を一撃でKOするだろう笑顔を娘に向ける

「知り合いの鳳輝兄ちゃんよ」

「おうきにいちゃん!? わたしおうきにいちゃんだ〜いすき!」

娘が輝かばかりの笑顔を母親に向ける

母親似なのだろうその笑顔は世間一般のロリコンどもを悩殺するほどの破壊力を持っていた

「おやおやア… ユキナさんにフユカちゃんじゃあありませんカア」

空港から出てきたのはアジア人… いや、中国人か韓国人あたりであろう

語尾が少しおかしい以外は完璧な日本語で語りかける

ユキナと呼ばれた母親は眉をしかめながら男に完璧な日本語で語り返す

「アナタもお元気そうね…張<sup>チャン</sup>… ロリコンは治ったの?」

「H A H A H A 性癖は治りませ〜ン

フユカちゃんをお嫁に貰う夢はまだまだ諦めてませんシネ」

「今ここで全身の骨を砕かれないの?」

ユキナから異様なまでに殺気が放たれる

空港の上にいたカラスがその殺気を感じて逃げ出すほどその殺気は凄まじかった

勘が鋭い人は気づいただろう

この女性は“危険”だと

だが、殺気を至近距離で受けている張はなにこともないかのごと

く肩をすくめる動作をする  
ニブイのか、大物なのか

今は分からない

「…さてと、どっちが先に行く？」

「…ジャンケンで決めまショウ」

『ジャ～ンケ～ン……』

秋の空はこのあとに起こるであろう不穏な空気を感じ取ったかの  
とく、雲が集い始めていた

其の伍拾陸：集いし者らは古の猛者たち（後書き）

最近、      ネタが尽きてきたなあ…と思うのは秘密

其の伍拾漆：穿つ針は束縛の杭・壱

ピンポーン

「…来た…のでしょうか……」

どうも、 スチルです

この前凰輝さんから“古代武術家が来るから覚悟しておけ”と言われたので、 気をつけていたのですが……

3日程で来るなんて…

しかも、 凰輝さんは今いません

「…ス、 スチルさん…」

「チビ……」

「フィア、 私はチビじゃありません」

私の呼び名について、 フィアに注意する

「チビじゃん」

「私はチビじゃありません！！」

大声でレナートに言い返す

その間にもチャイムが鳴り続けている

「……私が行きます」

私はそう言つと、 ドアに近づくと

そして、 勢いよく開ける

「……………」

「…だ、 だれですか…？」

現れたのは長身で細身の冴えない男でした  
無精髭がそのダサさをさらに引き立てている

「…………可愛イ♪」

「……………！?!？」

パンツ！！ ガチャ！

ほとんど瞬間、 いや反射クラスの反応を起こしていた  
私は扉を神速の疾さで閉めると、 これまた神速の疾さで力ギをか  
ける

自分で気がつかない内に息が切れていた

「チ…チビ…………？」

「…凰輝さ…ん……………」

……………早く帰ってきてください

チャイムはいまだに鳴り続けていました

「そついやスチル大丈夫かな……」

「……張のことね」

「買うもの買ったし早めに帰るか」

「……そうね……」

紗と別れて俺、 凰輝は家路を急ぐ

あのロリコンはなんとかならんのかね……

いままでは気にしなかったが、 今はスチルがいるからなあ  
アイツロリ体型だからなあ……

ピンポーン

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン  
ピンポンピンポンピンポン  
ピンポーン

「やかましいわ、 このロリコン」

ガキッ！

「へブシッ！？  
」

チャイムを鳴らしまくる変態野郎張小龍ロリコン  
チャン・シャオロンの後頭部をかかとで蹴り、

ドアと熱烈なキスをさせる

効果音が変なのは気にすんな

「やあ、 凰輝じゃなイカ！ だれだい？ ボク好みのあの幼女ハ」  
「カエレ」

「いや、だか「カエレ」……」

変態野郎を無理矢理帰らそうとする俺

張はいやいやをしているが、ダサいお前がやると正直殺意を超えてこの世に存在していたことすらなかったことにしようかと考えてしまうのだが

「とりあえずはカエレ、そして生まれたことを後悔しながらシネ」  
「言ってることひどくないカイ!？」

「シネ♪シネ♪シネシネシネシネ♪シンジマエ♪」  
「テメエノカオナゾミタクナイ♪」

「なぜ歌ウ!？ しかも替え歌カイ!？」  
「しかもカタカナばかりダシ!!」

「“桜花正拳・双”!!!」

ドガツ!! グチャ!!

先手必勝。

というか、<sup>がまん</sup>忍耐の限界

人の家の前で何回チャイム鳴らせば気が済んだんだ? この変態は<sup>ロリコン</sup>

<sup>ロリコン</sup>変態が夜空の星になっている間に(まだ夜じゃありません)帰宅

「ただいま」

「鳳輝さん…さっきのはだれ……ですか…?」

「あうっ…まだ、チャイムの音が耳に響きますう…」

「…なんだったんだ……? アイツは……」

次々に<sup>ロリコン</sup>変態野郎についての感想を言い出す神様面々

俺は1言だけ言っておいた

「今見たことはすべて忘れて。いいな？」

「よく分かりませんが分かりました……」

「どっちだ雷華」

「あれは悪夢の1種だ…悪夢の1種だ…そうに違いない」

「フィア、悪夢でも幻でもいいから早く忘れろ」

「……モウ、キニシマセン

エエ、キニシマセントモ」

「スチル落ち着け」

「ああいうのを“ロリコン”って言うんだ……」

「そうなるなレナート」

それぞれの反応を見て、あのバカがドコに行ったかも気にせずに紅茶を自分のティーカップに入れる

そして飲む

「ふう……どうしようかな」

「なにがダイ？ 鳳輝」

「っ！？」 出たああああああああああああああああ！！！！

□

庭先に現れた変態野郎チャンの声にビビる神2人

しっけえ野郎め

「張、しっこすぎる

カエレ、さもなくば警察を呼ぶぞ」

「フツ、10年前にしっこさで彼女をgetしたボクにそんな言葉は」「5回警察呼ばれたと聞いたが？」「愛の成せる技さ」

うっわあゝ

うつざあゝ

「凰輝さん……」

「どうした？ スチル」

「殴つて殴れ」了解！

バキッ！

俺の言葉を嬉々として聞き取り、 スチルは拳を固めて張を殴り飛ばす

いい音がして、 張は4、5m吹き飛んだ

「……………フッ」

鼻血を流しながらこつこつける張  
だせえぞお前

「ボクの“針縛流”と“四神流”との決戦は次回！ ファンのみんな！ 待っててくれ！！」

「てめえにファンなぞいねえ！！ 今回が始めてだろうが！！」

ごう！

俺の突っ込みアップーは張のアゴに確実にヒットした

続くよ、 マジで

其の伍拾捌：穿つ針は束縛の杭・弐（前書き）

1 週間ほったらかしにしてスイマセンでした  
サブタイトルを前編後編にすればよかったと少し反省

其の伍拾捌：穿つ針は束縛の杭・弐

「さあ、勝負ダ鳳輝！ 勝つたらスト「カエレ」グゲフ！？」

バキッ！

……あゝ

どうも、スチルです

この張つて人早く帰ってくれないでしようかと思いつつ、 2人を眺めています

勝負……になつてませんね、 鳳輝さんが一方的に殴っています

「鳳輝！ 貴様それでも古代武術家力！？」

「そつだ！！」

「開き直つた！？」

「開き直つていいんですか！？」

「いいに決まつているだろうがこのボケ！！」

しかも逆ギレ

人としてどうかと……いえ、 言つたらきりがありませんね

「いざ、 しょうb「やつたら帰れよ、 絶対帰れよ」ハイ……」

鳳輝さんは渋々引き受けて、 決闘をすることに  
庭に出て張は懷に手を入れ、 鳳輝さんは自然体に

「行くゾ！ 紅針流“雷嘴”！！」

雷をまとった針が一斉に凰輝さんに襲いかかる  
凰輝さんはそのすべてを回避しました  
そして反撃に移ります

「四神流… 奥義！ “玄武闘氣・纏”！！」

ヴォヴツ！

いきなり碧の闘氣をまとい、 戦闘モードに入る凰輝さん  
前回とはまったく気合いの入れようが違います

「四神流… “衝覇正拳・貫”！！」

ヒュッウ！！

奇妙な音を立てて、 巨大な氣弾が飛び出す

「くっ…！！」

巨大な氣弾を転がりながら回避し、 再び複数の針を構える張  
凰輝さんは飛び上がり再び桜花正拳を何度も繰り出しました  
転がりながら回避するしかない張

「……どうした張。 あの技はないのかよ」

あの技？

いったいなんのことでしょう

張は舌打ちをしながら針を取り出しました

「見せてアゲマシヨウ…… 紅針流“筋呀”！！」

ドスッ！ ドスッ！

みずからの腕に針を突き刺す張

ムキツムキムキツ

う…うわぁ…

『キモツ！！！！』

張はさっきまでガリガリに近かったです  
だけど、針を刺してからは急に筋肉がムキムキになりました  
正直に言いますと気持ち悪すぎます

「行くぞぉ！ 紅針流“びやくだん佰弾”！！」

恐ろしいほどの氣がこめられたいくつもの針  
それはすべて凰輝さんに飛んでいく

「凰輝さん！！」

「甘い！！！！」

腕の一振り

たったそれだけですべての針が風圧によって叩き落とされる

すごい…

「……まだまだ甘いな

こんなものか？ 紅針流っていうのは」

挑発する凰輝さん

張は険しい顔を変えずに言い返しました

「…ならば…奥義を見せてヤル」

懷に手を入れる張

身体中から放たれているのは闘氣ではなく殺氣

張の殺氣に釣られるように凰輝さんも殺氣を放ち始める

「行くゾ……」

張のカタコトの日本語が逆に恐ろしいです……

バチバチと殺氣どろしがぶつかり合う音がします

「紅針流…奥義！ “縛雲”<sup>はくうん</sup>！！」

ヒュヒュッ！！

……え？

風を切る音しか聞こえませんでした……

それに反応したように凰輝さんが急激に動きを止める

「……クソッ！」

「フッ、四神流も大したコトナイナ」

「……え？」

「お…凰輝さん……？」

凰輝さんは少し無理そうな体勢のまま固まっています

「…………紅針流奥義“縛雲”！！  
的確な場所に針を放つことで相手の動きを止めることができるノ  
ダ！！」

説明的セリフをありがとうございます

「ちつ、油断したか」

「一瞬の油断が命取りにナル！！」

舌打ちをしながらもがこうとする凰輝さん  
しかし、動くことすらできない

「まだまだ文章に余裕がありますが…………トドメとさせて貰いまシヨ  
ウ！！」

懐から10本もの針を取り出す張  
一体どれだけの針を仕込んでいるんですか？

「紅針流…「なんちつて」え？」

ドガッ！！

「へブツ！？」

「お、凰輝さん！？」

「大丈夫なのか！？」

「ん？ ああ」

平然と張を殴り飛ばした凰輝さん  
腕をプラプラさせながら平気そうに呟きました

「な、なぜ……！！ はっ！ まさか……！！？」

「正解。 “縛雲” は的確な場所に針を撃ち込んでこそ効果が出るだから少しでも場所をずらせばその効果は消えるってわけだ」

ダルそうに呟く凰輝さん

逆転できた喜びに雷華ちゃんやファイアが歓声をあげる

「…………ふっ

さすが八凰k「かつこっけんな、 オラ」

ゲシッ！

凰輝さんのワンキックが張の頭頂部に命中しました

「……………ならば2つ目の奥義を繰り出す必要がありそうデスね……」  
「させねえよ」

素早く針を構える張よりも速く、 張との距離も詰める  
張がガードするよりも早く……

「 “散壁正拳・双” ！！ 」

ドスッ！！ ガスッ！！

「がっ……………！！！！」

正拳突きで張の持っていた針を撃ち落とし、 2発目はお腹に叩き込む

張がその威力に怯んだすきに凰輝さんは素早く次の攻撃に移る

「トドメだ…四神流…奥義！ “玄武乱舞”！！」

ヒュッ……ガガガガガガガガ！！！！！！

速い

その速さにはここにいる誰もついてこれはありませんでした

10発……いえ、20発近い打撃が張を襲う

張はそれを防ぐことはできず、すべてを受けボロボロになりながらも踏ん張って耐えきりました

ですが、凰輝はもうすでに張の目の前で回し蹴りの構えに

そして、

「桜・花・蹴・撃”！！」

相手を吹き飛ばす蹴りが張の胸に命中し、塀へとぶつかる張気絶しているらしく、起き上がる気配はありません

「凰輝さん……！！」

「あゝ疲れた

寝るわ」

雷華の喜びに震えた声を無視し、さつさと家の中に戻る凰輝さん大して疲れていないと思うのですが……

「……………」

「レナート？ どうしたのですか？」

「……ううん、なんでもない」

その笑顔からは黒い企みを感じてしまうのは気のせいなのでしょう  
か………

其の伍拾玖：忍び寄るは影からの刺客

「……凰輝はいる？」  
「……今出かけてます」

ハアイ♪

今回はレナートが司会を務めさせてもらっようん♪  
やって来たのはレニーっていう人

雷華ちゃん是不機嫌そう  
なんですか

「凰輝になんか用か？」  
「勝負……挑みに来た……」  
「ああ、そうだ……え……？」

勝負と聞いて眉をしかめるスチル  
そういえば彼女も古代武術家だったよね

「……前回……技見せてもらったから……勝てる……と思う……」  
「……前回……？……あ！あの時の……？」

心当たりあるんだね♪  
よく知らないけどさ

「じゃっ、私が相手してあげましょうか！？」

嬉々として語るは雷華ちゃん

「……………いいの？」

「この前の怨み晴らしてあげます！」

怨み？ なんのこつちゃ♪

とりあえず、 まだ激闘のあとが残る庭に出て、 2人は向かい合い

雷華ちゃんが稲妻をまといだす

レニーもモデルガンを抜いて、 氣を高める

「行きます…！！」

「…どうぞ…！！」

バチバチと神氣と氣がぶつかり合う音がしだす

そして、

「サンダーボルト・フィーリング  
“雷電直下”！！」

雷が轟音を立てながらレニー目掛けて垂直に降り注ぐ

レニーは身軽な動きで雷をすべて避けるとモデルガンを雷華ちゃん  
に向ける

「……………音無流…“ひつだん必弾の技”…！」

「2度は受けません！！」

一直線に放たれる氣彈を見切る雷華ちゃん

氣彈はかすることなく雷華ちゃんを過ぎる——はずだった

ガウン！

「痛あ！！」

「曲がった！？」

氣弾が勢いよくカーブし、雷華ちゃんのお腹に命中したのだ  
そつえば前に兄貴が言ってたなあ♪

「氣に様々な“役割”を持たせることでその真価を発揮する  
それこそが古代武術の真髓なりって兄貴が言ってた気が……」  
「それは早く言ってください！！」

雷華ちゃんの怒鳴り声を聞き流し、レニーはさらにモデルガンを  
構える

氣弾を2、3発放つが雷華ちゃんは空を飛びつつ回避する  
雷華ちゃんも反撃に出るが、レニーはそのすべての雷を回避する

「くそつ……！  
……甘い……！」  
「トルダンス雷帝の舞踊”！  
……キングスサンダー王者の稲妻”！！」

半ばヤケになりつつ、雷を連続で放つがレニーはすべて回避  
モデルガンを静かに、正確に構えると雷華に向ける

そして、

「……音無流……“音速の技”……！」

チュウン……！

「いだあ……！！」

音速の早さで放たれた氣弾は雷華ちゃんの右肩を貫く  
うわぁ……

ふと右を見る  
ある人物がいた

「兄貴い♪」

「ただいま」

「凰輝さん」

「凰輝お帰り」

そう、 兄貴♪

兄貴は2人の戦いを止めようとはしない  
つまらなさそうに見ているだけ  
やがて、 兄貴に気づいた2人が戦いを中断する

「凰輝さん！？ いつの間に…」

「…いつ…帰ってきたの…？」

「お前が“勝負挑みに来た”ってところから」

「最初っからじゃないですか！！ 助けてくださいよ！！！」

「めんどい」

「ひどい！」

ごちゃごちゃとした会話の中で、 レニーは兄貴に対して向き直る

「…凰輝…勝負…！！」

「ん？ ああ、 いいぞ」

『軽っ！！』

突っ込む神2人  
なんか神様って突っ込み役だねえ♪

「庭に……」

「ああ、雷華どけ」

ドカツ

蹴り1発

それは雷華ちゃんのお尻にヒットする

「いだあ！」

ゴロゴロと転がりながらテーブルの脚にぶつかる雷華ちゃん  
その間に兄貴とレニーは庭で向かい合う

動きだすのはほとんど同時だった

「…音無流…「四神流“衝覇正拳”！！」…！？」

ガスッ！！

ズザザザザザッ！！！！

「…くっ…！」

氣弾がレニーに襲いかかる

なんとか腕でガードしたけど、その威力にレニーが壊れた塀まで  
引き下がる

「……………“陽炎の技”！」

かげろふ

「…消えた……？」

フィアの言うとうり瞬間的にレニーの姿がかき消える

いや、存在を感知できなくなったのだ

兄貴は落ちついて周りを見回す

レニーはどこにいるのか兄貴ですら分からないみたい……

「殺意の技」！！」

「散壁正拳」！！」

後ろから突然現れたレニーに素早く反応して拳を叩き込む兄貴

氣弾は腕をかすめ、拳はお腹にクリーンヒットした

レニーは摒へとぶつかり、兄貴は私たちがいるひさしへ

撃たれた右腕を押さえながら焦る表情を見せる兄貴

？ どうしたんだろ」

「……ちっ」

「……………」

口についた血糊をぬぐいながら、平然と立ち上がるレニー  
兄貴の腕がみるみる白く染まっていく

「お…凰輝さん……？」

「……四神流……」

白に染まる勢いは止まりそうにない

そんな中、兄貴の体が金の鬨氣オーラに包まれる

最初は変な目で見つめていたレニーだけど、その内今から出そう  
としている技が分かったのだろう

銃を構えて攻撃に移る

だけど、兄貴の方が早かった

「……………“氣體錬成”！！」

白く染まっていた腕が元の色に戻っていく  
レニーが放った氣弾はあっさり避けられ、一氣に距離を詰められる

「……………しまつ「四神流奥義…“朱雀闘氣・纏”！！そして“朱雀  
正拳・改”！！！！」！！！！」

「おおおおおおおおおおおおおおおお！！」

レニーは勢いよく吹き飛ばされ空のかなたへと飛んでいった

『……………』

「あ、やべ、やりすぎちゃった」

あらま

青くなっている3人を無視して兄貴は夕飯の用意を始めた  
今日は親子丼だ〜♪

ちなみにレニーは翌日には帰ってこれたそう  
な  
身体中に包帯を巻いていたけど、  
元気そうだった  
ので、

まあ、  
大丈夫でしょ  
♪

其の陸拾：愚かなる者は真の強さを悟る（前書き）

コイツ覚えてくれている人いるかなー  
作者は名前を完全に忘れてましたw  
w

其の陸拾：愚かなる者は真の強さを悟る

その公園はいつもとは違い、静まり返っていた

フ、フッフ……フハハハハハハハハハハ！！

ダレお前？ b y 作者

って、てめえ！ クソ作者！！  
俺だよ！ 俺！

……だ……だ……ダレ？ b y 作者

かきたころつ  
柿田吾朗だよ！！  
ってルビぶんな！

……え？ b y 作者

だああああああああああああああああ！！！！  
忘れんな！

毒入りケーキを喰っちゃって入院が長引いちまったが……（其の参  
拾玖参照）

この度だ！ 武術を修め！ 奴に対抗する力を得た！！



「……現実ではたしかにそうだが……」

ヒュッ！ （作者が瞬間移動した音）

「この小説は……」

ガッ！！ （アゴに蹴り1発）

「俺が作ったから……」

ゴスッ！！ （脇腹に裏拳）

「俺自身の身体能力も格段に……」

ガガガガッ！！ （腹にラッシュ）

「高い設定にしてるに決まっているだろうがぁ……」

バキィ！！！！ （アゴにアッパー）

キラーン （影薄が星に）

「…まったく……」

俺、聖なる写真は柿田吾朗を青空のかなたに吹き飛ばしたあと、  
独りポツリと呟いた

ついでに凰輝たちに顔見せとくか

俺は凰輝の家に進路を向けた

俺はチャイムを鳴らして、西上家に上がり込んだ

「うつす、凰輝元気か？」

『……………ダレ？』

「ヘタレ作者の聖なる写真だ」

「ヘタレ言つな」

「アレ？ 河童じゃありませんでした？」

おお、 雷華

其の拾弍ゝ其の拾伍の話を覚えててくれたか  
少しは成長しているみたいだな  
ウンウン

「ああ、 あれは適当に書いたからな、 キニスンナ

ああ、 実は……」

「？」

「柿田吾朗って知ってるか？」

「………え？」

「誰でした？」

「知り合いか？」

「新キヤラじゃないですか？」

「新キヤラ」

「違うわ、 たしか………」

最近お前が書いた企画短編小説にほんの少し出てきたヤツだろ？

「」

「それも違うわ

“ゴロウ”と“吾朗”は別人だっつーに」

ちなみに企画短編小説の名前は“Half Dragon”

そっちも読んでみてください

だけど、 ここまで忘れ去られているとはある意味憐れ

まあ、 影薄だし、 仕方ないか

ウンウン

「凰輝、お前の友人だろ……」

まあ、其の参拾壹以来出会ってないから仕方がないか」

「……そうだったか？」

「そうだった」

「……まあ、忘れてしまっつてことは大した奴じゃないんだろ

俺寝るから、5時に起こしてくれ」

「え？ あ……」

そのまま、2階に上がる凰輝

その内、西上家の全容について書こうかな……」

「……え？ これで終わりですか？」

「うん、終わりだよ」

『……………』

「それではじゃ〜ね〜」

レナート、それ、俺のセリフだから

其の陸拾巻：亡者を統べるは白銀の姫・巻（前書き）

最近、ギャグが減ってきている気が…  
なんとかしないとなあ……

其の陸拾巻：亡者を統べるは白銀の姫・巻

「……………」

「凰輝？」

「…………そろそろか……………」

「そろそろ…………ですか…………？」

どうも、 紗です

今日は学校が早く終わり、 凰輝の家に集合しています  
でも、 帰ってきてから凰輝は戦闘モードに  
理由は恐らくユキナさんだろう  
あの人とは1度出会ったことがある

あの人は

あの流派は

強い

豊華流や音無流よりもはるかに強い  
最強と言われている四神流ともほぼ互角とも言われている

「凰輝さ〜ん。 ヒマですう〜」

「ヒマだあ〜」

「Shut up・fools（訳・黙れや。 ボケ共）」  
『はいい！！ すみませんでしたあ！！』

異様なまでに放たれた殺気にビビって焦る2人  
いつの間にいたのかレニーが持ってきたお茶を凰輝たちに配る

それをすすする私たち

一見和やかそうに見える雰囲気だけど、  
張りつめた空気がそれを裏切っている  
凰輝から放たれる殺気や

「つたく……来るなら来いよなあ……」

「あ、あうあう………」

「お、おうおう………」

「あうあう………」

「あう……あう………」

「スチルちゃんマネしなくていいから」

傍目に見れば平和な日々の1ページ  
だが、それもいつまでもつのやら

ユキナさん、来るなら早く来てください

「……雷華」

「ハイ？」

バチィ！！

デコピン1発

どれほど手加減したかは知らないけど、  
雷華ちゃんは後ろに吹き  
飛び、庭に転がり落ちた  
起き上がった彼女の額にはタンコブが赤く、  
大きく膨れ上がっている

「いだあ！！な、なにするんですか！？」

「ノリ」

「一言で片付けないでください！！」

「文句あんのか？」

「いえ！ なんでもありません！！」

文句から一転土下座へ、  
悲しいけどこれが現実

ピンポン♪

『……………！！』

これ以上ないほど張りつめられた空気にさらに緊張が走る  
凰輝が慎重にドアに近づき……………

ガチャ

「HEY！ 凰輝、 スチルちゃ「カエレ」」

ボタン

開けたそこにはロリコン<sup>ちゃん</sup>がいた  
しばし無言になる面々

チャイムは再び鳴りはじめている  
しばし耐えていた凰輝だけど、 耐えきれなくなったのか、 扉を  
乱暴に開ける

「凰k」「桜花正拳・連”え！！”」

ドガガガガガガガガガガ！！！！  
キラアン

チャン  
ロリコン空の旅へ

「次回の“神様と私”は“チャン、大空へ”お楽しみに♪  
ジャーンケーンポン  
ウフフフ♪」

「レナート、サザエ○んか」  
「……サザエ…○ん？」

分からないと言わんばかりに首をかしげるレニー  
イタリアでは放送してないらしい（たぶん）

「大変だねえ」  
「はい……って誰ですか？」

そこにいたのは蒼い髪に碧眼の女性  
白を基調としたロングコートに魔女を連想させるような白い三角帽子  
彼女こそユキナ・ローヴェティーネ  
白銀流の使い手だ

そして、側には彼女と同じ蒼い髪に碧眼の幼女  
ユキナさんの娘、フユカちゃんだ

「ユキナさん！？ いつの間に！？」

思わず大声で叫んでしまった私は、  
鳳輝から「うるさい」と顔面  
に裏拳を食らう

ガン！

鈍器がぶつかるような音に似合う威力が炸裂

「~~~~!!」

痛い、もつのすごく痛い

ふと、顔を押さえた手を見れば血がついている  
鼻骨も折れたみたいだ

「窓から

開いていたからね」

「へいがボロボロだけど、どしたの？」  
「激戦の後」

「3人ともマイペースすぎませんか？」

「キニスンナ」

「気にしないで」

「キニスンナ」

張りつめた空気から一転穏やかな雰囲気

.....と、思いきや

凰輝とユキナさんの間に激しい火花が散り始める

その激しさに雷華ちゃんたちがあわてて凰輝たちから逃げ出す

「さっそくだけど.....」

「ぶっ殺しにきたよ？」

「ぶっころす」

「ころす」

「よし、まずはレナート、お前表出る」

「冗談だよ兄貴」

「death or died？」

「それ訳すれば“死か死ぬか？”だぞ

しかも、発音なめらかすぎるだろ」

次々に突っ込む凰輝

それにしてもユキナさん“ぶっ殺しにきたよ”って……

と、ここでフィアがユキナちゃんとともになににかを取り出した  
それは看板らしきものだった  
そこに書いていたものは……

「“次回に続く”」

「つつくう」

「いやいやいや………」

其の陸拾貳：亡者を統べるは白銀の姫・貳（前書き）

日曜飛ばしてスイマセン…

それなのに先が思いつかない…

また飛ぶかも…

## 其の陸拾貳：亡者を統べるは白銀の姫・貳

うつす、作者の聖なる写真だ

今回は俺が司会を務めさせてもらう

今、鳳輝たちは近くの空地にいた

其の伍拾陸で鳳輝が技の確認をしていたあの空地だ

焼け焦げたり、凍りついた木製人形がまだあたりに転がっている

「…覚悟はいい…？」

「……ああ」

静かに氣を高めあい、互いの視線に殺氣を孕ませる2人

バチバチと氣と殺氣がぶつかりあい、その凄まじさに烈風が巻き起こる

「……スゴい…！」

「あわわわわ！！」

「おかあさんいけえ！！」

周りが烈風に煽られる

それぞれが声援を上げるなか、鳳輝がまとう氣が稻妻に変化する  
反撃とばかりにユキナも大地から白いものを呼び出し、刃へと変化する

「…四神流奥義…：“白虎闘氣・纏”！！」

「…白銀流…：“骨堅<sup>こっけんが</sup>呀”！」

そして、2人が同時に突進する

鳳輝が正拳突き……：“白虎正拳”を放つが、ユキナが刃を正拳突

きの軌道へと合わせる

あわてて拳を引く凰輝

もくろみが外れてバランスを崩すユキナ

手をついたユキナに対し、踵落としを繰り返す凰輝

「白虎蹴撃・落<sup>おとし</sup>」！！」

「土生骨<sup>どせいこつ</sup>」！」

ガキッ！ ガッ！

互いに固い金属音が響く中、置いてけぼりをくらった雷華たちはポカンとしている

『……………』

「……………え？」

「なんだっただ？ さっきの……………」

「すぐくへんなおとがした」

「四神流<sup>ししんりゅう</sup>鉄鋼防風<sup>てつこうぼうふう</sup>」

「白銀流<sup>はくぎんりゅう</sup>骨防纏<sup>こつぼうまと</sup>」

「そっちも防御技か……………」

「……………どうする？」

「……………」

「……………」

『こっする！！』

勢いよく駆け出す2人

互いの氣が異様なまでに高まる

そして

「白銀流<sup>はくぎんりゅう</sup>突<sup>つ</sup>g<sup>が</sup>」 “白虎蹴撃・貫<sup>くわん</sup>”！！」

「……………」

ズガヴッ！！

ユキナの突きが炸裂する前に凰輝の蹴りが命中する  
ペキペキとロングコートがヒビを立てて壊れ始める  
顔に浮かぶ苦痛の色がそのダメージを物語る

だが、受け身を取りつつ起き上がる

ロングコートは白の部分がひび割れ、本来の黒い部分が丸見えに  
これが骨防纏の効果だ

骨のカケラをまとい、全体の防御力を高める

鉄鋼防風と似てはいるが、氣そのものをまとうのが鉄鋼防風  
氣を利用し、骨のカケラをまとうのが骨防纏  
似ているようで実は大きく異なっている

ここでもう分かっただろうが、白銀流は“骨”を操る流派だ  
さっきの技も地中の骨を操ったのだ

「おかあさん！！」

「なかなかやるね…」

「四神流…」

「！？ 白銀流」

不意打ちをかける凰輝にあわてて反撃の準備をするユキナ  
そもそも技とか流派とか言う必要ないよな

「“衝覇正拳・貫”！！」

「“冥骨閃”！！」

ガキイツ！！！！

互いに飛ばした氣と骨が奇妙な音を立てて、ぶつかりあい互いを相殺する

だが、鳳輝はユキナに体勢を整えさせるヒマを与える気はなさそうだ

素早く両手を前にかざし、雷を放つ！

「四神流奥義！ “白虎闘氣・放”！！」

「！？ くっ！」

バチバチバチ！！

凄まじい稲妻がユキナを襲う

骨防纏で防御をしても、ある程度のダメージはあるだろう

だが、

稲妻が消えたところユキナは左手に白い盾を構えて雷撃に耐え抜いたのだ

「白銀流… “骨防甲”！」

「……！」

驚く鳳輝

というか骨防甲ってネーミングセンス悪すぎるだろ、俺

ユキナは鳳輝が怯んだスキを狙って体勢を整え、白い骨片を体の周りにまとわせる

「反撃だよ！ 白銀流 “白龍咬”！！」

白い霧……いや、細かい骨のカケラが群れをなして凰輝に襲いかかる

「鉄鋼防風・周<sup>まわり</sup>」！」

だが、凰輝の氣が彼を中心に半球状の防壁となり、骨のカケラはその半球の中に立ち入ることは出来ない  
ユキナはどうにかしてその半球を崩そうとするが、凰輝も気張って骨の霧と半球状の防壁は互角の勝負を繰り広げていた

やがて、観念したようにユキナは骨の霧を操ることを止めた  
骨の霧はただの白い砂と化し、凰輝の周りに散らばる  
凰輝も“鉄鋼防風・周”を解除した

そのとき

「引っ掛かったね！！」  
「！しまっ……！！」

白い霧は再び活動を始め、凰輝は技も出ずヒマなく包まれていく

「……まいったなあ……」

その間にも白い砂は凰輝の体を包んでいく

「凰輝さん！！」  
「凰輝！？」  
「黙ってる、ばか共  
こういうときはな……  
少し面倒だが……」

そう言つと凰輝は氣を高め始める  
その圧倒的な氣に草木は突風に煽られたように揺れ動き、  
雷華たちも髪や服を押さえる

そして、

「四神流！ 奥義！ “麒麟鬪氣・纏”！！」

ヴゴウツ！！

突風、 というレベルではない  
それはまさに小型の竜巻だった  
小型なれどその威力は凄まじいものだった  
どれくらいスゴいのかというと

「ひゃあ！」

「わわ！？」

「わ——」

「うつわあ……！」

「……！！」

その凄まじさに観客組が2、 3 mほど後方に吹き飛ばされた程  
……それだけで済まなかった者たちもいるが

「うわああああああああああああああああ！！！！」  
「たすけてええええええええええええええええええええええ！！」

そう、  
スチルとフユカ  
幼女2人

彼女ら2人は2、 3 mだけではなく、 40、 50 m程後方に



其の陸拾参：亡者を統べるは白銀の姫・参（前書き）

2週間もすつ飛ばしてしまった…  
まじですいません！！

其の陸拾参：亡者を統べるは白銀の姫・参

司会は相変わらず俺、聖なる写真が勤めるよん

「スチルさん！ 大丈夫ですか！？」

「し…死ぬかと思いました……」

「おかあさん」

「泣かない泣かない」

しばらくしたあと——凰輝たちは一時戦闘を中断して、チビたち救出に向かった  
そして、チビたちを救出したあとの光景がさっきのコレだ

雷華はスチルを色々慰めているし、ユキナは自分の娘の頭をヨシヨシと撫でている

凰輝は完全に無視  
空を見て、どこからか出したか緑茶を飲んでいる

「あゝ茶うめえなあ」

「凰輝！ スチルちゃんたち大変だったんだから！！」

「知るか、小さいやつが悪いんだろ」

「……………」

人として最低のセリフを呟く凰輝  
お前絶対友達いないだろ

「黙ってろ、ヘタレ作者が

「お前も友達いねくせに」

お前よりはいるわい

泣き止んだフユカにアメを与えつつ、 ユキナは凰輝に振り返る

「さてと…戦闘再開といきますか！！」

「はっ！ 返り討ちにしてやんよ！！」

2人の氣が恐ろしいまでにぶつかりあう  
再び凄まじい突風が巻き起こる

「白銀流…“骨堅呀”！ “骨防纏”！」

「四神流…奥義！ “麒麟鬪氣・纏”！！」

骨がユキナを包み込み、 凰輝が烈風を纏う  
そして凰輝がダッシュでユキナとの差を詰める！

「“麒麟正拳・連”！！」

「“突呀一閃”！」

ガガガガツキキキン！！！！

一撃一撃が確実に急所を狙う凰輝  
そんな凰輝の動きを見切ったがごとく、 たった一閃ですべて防ぎ  
きるユキナ

互いにノーダメージ

「やるね！」

「はっ！ “奥の手”出すのなら早めに出しとけよ！？」

「そうしよつかな！」

2人の会話を聞いて驚く外野組

「お、奥の手!？」

「あいつらホントに人間か……？」

「兄貴い♪」

静かに睨み合う2人

互いの氣が遠慮なくほとばしり、弾け合う

で、

「うわああああああああああああああああああ!!?!?」

「ひゃああああああああああああああああ!!」

「スチルさん!？」

『助けてええええええええええええええええ!!!!』

お約束

再び吹き飛ぶ2人  
スチルとフユカ

しばし休憩

「か…勘弁してください…」

「おかあさん……」

「ヨシヨシ」

「お前ら帰れよ

正直邪魔だ」

凰輝、お前マジでいつかだれかに殺されるぞ

「やられる前に殺つてやるよ」

ハイハイ

もういいよ

振り返り、 凰輝を睨み付けるユキナ  
大地がボコボコと奇妙な音を立てだす

「そろそろ時間がないし…作者も限界らしいし…」

サーセン、 実力不足で

「そろそろ決着といくよ！」

白銀流！ 奥義！ “亡者乃挽歌”<sup>ゾンビのワルツ</sup>！！」

ボコボコボコツ

奇妙な音を立てて、 地中から現れたのは――

『っ！！ ぎゃああああああああああああああああ！！！！  
ガ、 ガイコツ~~~~~！！』

そう、 肉が一片も残つてない完全な骨  
それが地中から現れたのだ

1体だけではない

5体……10体……40体……

下手すると100体をこえる数だ

口を開けているが、 喉がないため声が出ていない  
一見すれば凄くユニーク……な、 わけないか

「はっ！ 新技か」  
「まあね」

ユキナは凰輝の問いに気軽に答えたあと、指揮官のように指をさし、声高々に叫ぶ

「ゆけ！！ 亡者たちよ！！！」

ユキナのその声が合図になったかのように、ガイコツたちは歩を速めて、凰輝に襲いかかる

「“衝覇正拳・乱”！！」

ガガガガガガ！！

凄まじい音を立てて、ガイコツが5体ほど碎け散る  
だが、ガイコツは凰輝の攻撃をムダだと嘲笑うかのようにまだまだ地中から生えてくる

「消耗が激しそうだが……大丈夫か？」  
「他人のことより自分の心配をしたら！？」

仕返しとばかりに言い返しているがユキナの疲労はだれが見ても分かるほど彼女は疲労していた  
額からは汗を流し、肩で息をして、顔にはいままで受けたダメージを物語るがごとく苦痛が浮かんでいる

“氣”の枯渇は“死”につながる  
簡単に言えば“氣”は“生命エネルギー”の一部ともいえる  
“氣”を大量に使用すると身体がショックをおこし、生命力が著

しく減少する

単純に言えば“氣”は“血”に似ているのだ

そんな“氣”を大量に消費したのだ

古代武術家としてコントロールや消耗に慣れていても、疲労は隠せない

そこを凰輝に見抜かれたのだ

このまま長期戦にもつれ込めば凰輝が圧倒的に有利になるに違いない

だが、だがしかし

ユキナの顔からは戦意が消えていない

「……………一気に決着をつけにいくよ！！」

「！？　な……………！！」

凰輝が砕いたガイコツのカケラ

それが再び集まり、ガイコツに戻ったのだ！

地中から次々に現れるガイコツと合わせたら500をこえるさすがに不死の軍団が相手では凰輝も不利と感じたのだろう舌打ちをしながら氣を激しくほとばしらせる

「ムダだよ！　亡者の群れに……………だれも敵いはしない！！」

「四神流……青龍鬪氣・纏……………」

「諦めなよ！」

ガイコツの群れが凰輝に襲いかかる

凰輝は抵抗せず、ガイコツの群れに吞まれていく

「凰輝さん！？」

返事はない

「凰輝……！！」

返事はない

「兄……貴……？」

返事はない

「嘘……です……よね……」

返事は、 ない

「凰輝s「うるさいわ」！？！？」

叫ぼうとした雷華

その声は凰輝の声によってかき消される

ビックリする面々

凰輝は慌てるようすはないような気軽な声を出す

「切り裂いてもダメ、 燃やしてもダメ  
こういうときはな……」

どうやらガイコツの群れの中で、 色々実験をしていたらしい  
正直、 心配かけるなっつーの

「すべて凍らせりゃあいい」

パキイイイン…!!

音を立てて周りが氷の世界へと変貌する  
500体近かったガイコツもすべてが氷に閉じ込められる  
凰輝がボソリと白い息を吐きながら呟く

「四神流奥義“青龍闘氣・爆”」

「……………!!」

「まだやるか？」

嘲りをこめた口調で凰輝が尋ねる

ユキナは肩をすくめると、諦めたように呟いた

「降参」

「……………え？」

「もう奥の手も敗れちゃったし  
今年は勝てそうにないかなって思ったのよ  
文句ある？」

「イエ、アリマセン」

「ならよろしい。フユカ、帰ろっか」

「うん!!」

フユカの手を繋いで帰るユキナ

やがて、その姿が見えなくなると雷華たちは白い息を吐いて叫んだ

『さっむうっ!!』

「すまん。 久々だったから張り切りすぎた」

おいおいおい……………

なお、 翌日

地元の新聞の1面を飾ったのは突然氷に覆われた原っぱで、 氷の  
中に白骨死体が混ざっていたために

1週間は地元の新聞を賑やかせた……………

原因丸分かりだな……………

其の陸拾肆：いまさら始める衣替え（前書き）

色々忙しくて更新遅れた…

そのせいで少々季節外れなネタに…

あ、作者の服のセンス云々は気にせずに  
というか気にしないでお願い

さらに、後書きで重大発表が

## 其の陸拾肆：いまさら始める衣替え

「……さみい！」

「そんな格好してるからだろ」

「鳳輝の格好もあんまり変わらないよ……」

どうも、 紗です

秋を通り越して、 初冬に入ったかのごとく寒くなってきた今日この頃、 いかがお過ごしでしょうか

フィアは今、 始めて出会ったときと同じ、 タンクトップに短パンそりゃ寒いよ……

一方、 鳳輝は半袖に長ズボン（夏用）

衣替えしなよ、 寒くないの……

「そろそろ衣替えでもするか」

『衣替え？ 』

「そろそろしなよ……」

というわけで買い物にレッツゴー

周りはずでにジャンパーやコートを着ている

私もいつもの巫女服ではなくウィンドブレイカーを上下着用

風が入らないから下に厚いものを着れば暖かいんだよねえ、 これが

雷華ちゃんはフード付きのロングコートを着用

ムダな装飾がないから男物に見える

フィアちゃん、 スチルちゃん、 レナートさんは鳳輝や琥鈴さん

が貸したコートを着ている

2人とも背はそうとうデカイので無論、 彼らが子供のころに着ていたやつだけど

そのコートを貸した本人たち、 凰輝、 琥鈴さんはいつもの服装にジャケットをはおっているていど寒くないの？

「お、 ここか」

凰輝がたどり着いたのは“ Shine clothes ”と書かれた看板を立てる服屋さんだった  
少々値は張るがこの店の品物はみんなデザインもよく、 機能性に富んでいる

「ウゝッス、 マスターいるかー？」

「おお、 凰輝に琥鈴じゃん久しぶり」

「マスター元気か？」

「元気元気」

出てきたのは20代後半の中々かつこい男性

背は173cm程度、 撫で肩で紅い、 いや橙に近い色の髪は腰よりも長く、 肩あたりで1つに結んでいる  
顔は気の強そうな顔だけど、 女性的で一見すると女性に見えなくもない

事実、 雷華ちゃんたちは間違えた

「紗さん、 この女性は誰ですか？」

「いや… オレは男なんだが…」

「…………… 嘘お！？」

「… オレってそんなに女に見える…？」

「見えんじゃねえか？ 俺も最初は間違えた」

軽く傷ついたらしく、 暗い顔をしている

そうそう、 彼の名前は樋村飛人<sup>ひむらとびと</sup>

御年28歳で、 ここ“ shine clothes ”の店長だ  
ちなみに昔は結構喧嘩早くで色々揉め事を起こしたこともあるらしい  
私たちは彼を“ マスター ”と呼んでいる  
理由はなんとなく

「ところで凰輝に琥鈴、 今日は何んの用だ？」

「こいつらに似合う服、 選んでやってくれ」

『あ、 お願いします』

「よろしく」

「OK」

マスターは雷華ちゃんたちを引き連れて店の奥へと進んでいく  
その間に凰輝と琥鈴さんは各々自分の好きな服を選んでいく  
私も新しい服でも選ばうかな

「紗も服選べば？ 色気の欠片もない服着ちゃって  
恋人できないよ」

琥鈴さんの言葉に思わず反論する

「ご心配なく、 当分つくる気ありませんから」

「いつかつくりたくてもつくれなくなるよ」

「それもまた人生ですよ」

「そもそもまわりにいい人いませんし」

「さっきからなに話し合ってたんだ？」

混ざる凰輝

言えるわけないでしょ

と、 琥鈴さんがチェック柄のかわいいスカートを持ってくる

「紗、これ着てみたら？」

きつと似合うよ」

「ごめん、スカートは嫌いなんだ」

「なんで？」

「パンツ見えそうでイヤなんですよ

激しい動きとかしたときとかに」

「ああ、分かる分かる

格闘マンガでもあるよね、やけに露出高い女キャラ」

「パンツ見られるのはイヤなくせにどうして見えそうな服を好んで着るんでしょうか？」

「さあ？」

このとき、まわりの男性諸君（凰輝除く）が物凄く不満かつ、残念そうな顔をしてた気がしたのはなんで？

お、雷華ちゃんたちが帰ってきた

「ただいま」

「どう？ みんな、着心地は」

「結構いいぜこれが」

「兄貴、似合う？」

「ハイハイ、似合う似合う」

「少し、恥ずかしいですね……」

ここで着ているもの解説」

まず、雷華ちゃん

薄いピンク色のニット帽にニット帽よりやや濃いめピンクのフード付きジャンパー

ジャンパーは少し丈が長く、　ふわふわがついていて見るからに暖かそうだ

ジャンパーの下には白を基調としたトレーナーが  
下はややゆったりめのジーパン、　全体的にかわいらしい印象を抱かせる

次にフィアちゃん

黒いロングコートに灰色のセーター

雷華ちゃんと同じ、　ゆったりめのジーパン  
カジュアルで雷華ちゃんよりはかっこいい

そしてレナートさん

黒いニット帽にこれまた黒のフード付きのジャンパー、　タートル  
ネックの白いセーター

スカートは普段と変わらない丈で、　赤いラインが入っている程度  
ブーツも黒を基調としており、　ヒールがついていて妙に大人っぽい  
スタイルがいいから大人っぽさが更に映える  
ううむ、　うらやましい……

最後にスチルちゃん

赤い耳当てに、　赤いジャンパー、　やや赤みがかった灰色のタートル  
ネックのセーター

ジーパンは雷華ちゃんたちとは違い、　すっきりとしている  
こちらも大人っぽさを少しは感じるが、　彼女の身長や体格がそれを裏切っている

以上

凰輝や琥鈴さんも衣服を何点か買うようだ

「そんでいくらだ？」

「73000円だな」

「あ、10000円札がねえや

これで釣り銭をくれ」

「……って全部20000円札で払う気か！？」

珍しいぞこんな客！！」

「文句あんのか？」

「だれが文句あるって言った？」

喧嘩を売り出す凰輝にこめかみ辺りに青筋を浮かべながら言い返す  
マスター

爆発寸前

仕方がなく4、5歩程後ろに下がる

が、2人は空いている机に肘を乗せると、手を組み腕相撲を始めた

「死にさらせえ！！！」

「断る！！」

「なんで！？」

その突っ込みは空しく響いただけだった

腕相撲は結局凰輝が勝った

其の陸拾肆：いまさら始める衣替え（後書き）

実は作者、初めて企画を作りました  
タイトルは『鬼にも照明を』

それに伴い、ケータイサイト『写された聖域』を作りました  
興味のある方はどうぞ

参加してくれたらなおうれしいです

其の陸拾伍：癒えぬ悼みと誓えの泣き声・壱（前書き）

ときに、 人には思いもよらぬ一面があつたりします  
これはそんなお話

其の陸拾伍：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・壱

「ふああああ……！！」

「……よしよし、いい子だから泣き止んで」

……あ、どうも

司会をするのは……久しぶりですね

並町青葉です……忘れてる人はいません……よね？

実は私には最近妹が出来まして……

名前は若葉<sup>わかば</sup>っていうんですけど

かわいいんですよこれが……♪

もうね♪もうこのプニプニとしたほっぺたがねえ♪

はっ！……失礼しました……

今はその子を抱いて庭にいるんです

閑静な住宅街に立つ我が家は狭く、  
小さいながらも庭があります

……猫の額ていどですけど

「グルルルル……」

「……え……？」

……なんでしょう……？

……さっきの声は………いったい……

……獣の唸り声のように聞こえましたが………

「……なっ………！！」

思わず絶句する私

だつて……だつて……そこには……

その“穴”は突然開いた

「凰輝」

「でえい、いきなりなんだ真美子」

「っ！　びゃああああああああああああああああ！！！」

」

叫ぶバカ共

突然その“穴”から出てきやがった女は毒々しい肌、耳のあたりにコウモリの翼を模したみたいなヤツ、そして本来足があるべきところは魚の尾がついている

簡単に言えば人魚みたいなヤツだ

禍々しい肌をしているが

名前は前述のとうり真美子

冥界の住人だ

とりあえず突進してくるそいつの顔面に蹴りを叩き込みながら、俺は持っていた皿をテーブルに置く  
そこには大量のクッキーが入っていた

『いったつだつきまゝす』

「あ、じゃあいただきます」

後者がスチルで前者がそれ以外だ  
大量のクッキーをパクつくバカ共は置いといて、ほふく前進をしながら床を臭い水で濡らしていく真美子を踏んで止める

「床を濡らすなバカちん

家庭用ビニールプールを用意してやるから動くな

次動いたら死なす」

「あうゝ……」

萎んだビニールプールを倉庫から引つ張り出し、一息でパンパンにする

そして、その中にホースで水を入れる

ある程度溜まったので、窓を開けて、真美子を投げ飛ばす

「あゝれゝ」

ポツチャーン！

ナイスシュート

12000点獲得！

「なんの得点ですか!？」

突っ込むスチル

「るっせいバカ、思考読むなボケが  
ハラワタ引きずり出されたいか」  
「すみません!!」

わお、久しぶりの土下座  
ん？ 久しぶりって訳でもないか  
まあいいや

真美子を投げた拍子に半分近くに減った水を継ぎ足しつつ、  
子の用件を聞く  
姉貴が階段を降りる音が聞こえる  
真美

「で？ いきなりなんの用なんだ？」

「いやね…実は…」

「凰輝だれだ？ コイツ…」

「真美子だ」

「よろしく♪」

「で？ 用件は……」

「ああ、うん……」

実は…冥界にいる危険なヤツが突然逃げ出してたのさ」

「退治しろと？」

「そう！ 物分かりいいな〜」

「H A H A H A ♪」

俺は便利屋じゃねえぞ、　オラァ！！！！」

バッキィ！！

「ガフツ！？」

真美子の頭を地面に埋もれるまでに叩きつける

アホ4人がビクツとし、　姉貴はクシヤミをした

「第一ソイツはドコにいるんだ！？　てめえらが持ち込んだ厄介事にマトモなものなんてなかったぞ！！！！　ああ！？！？」

「死ぬ……！　死ぬから……！！　タ、　タンマ……！！！！」

グリグリグリ

地面に埋もれた頭をさらに踏みにじる

4人はびびって声をかけてこない

姉貴は声をかける気はなさそうだ

グリグリグリ

さすがにこれ以上やると死にそうなので、　止めておこう

足を外すと素早く頭を地面から引き上げる真美子

荒々しくセキをしながら土くれを吐き出す

うっん、　いいねえ♪

ガタガタ

「ん？」

「なんの音でしょうか？」

「塀の方から聞こえたぞ」

以前壊れた塀だ

コンクリートとかを手に入れるのが面倒なので木材で補修している  
そこを外そうとしてんのか？ 泥棒か？

とりあえず、そこに近づいて……

「入るなら玄関から入れオラア！！」

バツキイ！！

「……あれ？」

補修した木材ごと顔面を蹴り飛ばしたはずなのだが……手応えは丸  
でなし

下をのぞけば小さい子供が倒れている

コイツは……！

「……紅葉<sup>もみじ</sup>か！？ どうしたんだ！？ その怪我！？」

青葉の妹、並木紅葉だ

たしか今年で小学6年のはずだ  
身体中に無数の裂傷、いずれも致命傷ではないが道には血が点々  
としている

「凰輝さ……誰ですかその子！？ それにその傷！」

「紅葉、だれにやられた！？」

「…へんな…ライオン…が……」

「…姉貴！紅葉の怪我を診てくれ！！」

おめえら青葉ん家に急ぐぞ！！」

『は、はい！！』

「分かった！」

「ラジャー」

紅葉を姉貴に任せて、4人を引き連れて青葉の家に急ぐ  
そついや、アイツの家で一番強いのは青葉アイツだったな……

間に合うか……！？

衝撃波云々で他の場所を破壊しないようにスピードを抑えつつ、  
といっても車の倍近いスピードで青葉の家につく

が、ここで1つ思い出したことがある

アイツの家にはたしか最近……

「お、 凰輝！？ なにしてんだ！？ はやく「お前らだけで行け」は……？」

一着でついたフィアを先に行くよう促す

怪訝な顔をしているが、 早く行けとアゴで促すと、 背中 of 羽で俺より20cmぐらい高い塀をこえていく  
後から来たスチルやレナートを同じように促す

最後に来た雷華にも促すが反論される

「なんでですか！？ 凰輝さんも一緒に行けば……！」

「逃げたのを仕留めるから行け」

「でも……！」

「いいから、 行け」

「……… 分かりました」

やるせない顔で塀を登る雷華  
でも、 俺は入れない

「ここには……」

赤ん坊がいるから

だから、

俺は、

入  
れ  
な  
い

其の陸拾伍：癒えぬ悼みと誓えの泣き声・壺（後書き）

「入れない」訳はいずれ書きます  
凰輝の新たな一面をどうぞ

其の陸拾陸：癒えぬ悼みと脅えの鳴き声・弐（前書き）

パソコン今までぶっ壊れてた——！！  
まじすみませ——ん！

其の陸拾陸：癒えぬ悼みと脅えの鳴き声・弐

おっす、 ファイアだ

前回からの続きで青葉の家に到着したぞ

凰輝は入ってこなかったけど、 今回は凰輝の言うことを信頼しよう  
勢いよく塀を飛び越えると、 青葉がライオンらしいものと対峙して  
いた

しかも数体

青葉は1・5mほどの鉄骨を持って戦っているが、 身体中に無数の  
裂傷が

いずれも紅葉って奴より傷は浅そうだし、 血もほとんど止まっている

2体のライオンもどきが青葉の脇を通り抜けようと走り出す

「……ここは……通さない……！」

バキッ！！

1体が青葉の一撃を受けて大きく仰け反る  
だが、 残りの1体が青葉の攻撃をかくぐり、 家に飛び込もう  
としている

「しまっ……！！」

「任せろお！！」  
メガ・フレア  
“轟炎弾”！！

ゴヴウン！！

「ぐぎゃあああああああああああああああ！？！？」

アタシが放った凄まじい爆炎がライオンもどきを焼き払う

炎弾の直撃を受けたライオンもどきは火だるまになって転がり回る

「……助けてくれたのはありがたいけど……家に火はつけなくてくださいね……」

「なんとかなるだろ！」

「ならないと思いますけど……」

「自重しろよ」

いつの間に来たのか、スチルとレナートがアタシの周りにいた  
雷華は塀を必死で乗り越えようとしている

背中の中使えよ

ここでアタシはようやくライオンもどきを詳しく見ることができた

……いや……

ライオンもどきというにはそれは醜すぎた

全身はライオンだが、顔が老人のようにしわくちゃで、背中に

はアタシより大きな悪魔の翼

尾はさそりのように固そうなカラに覆われており、先端には同じ  
ようにさそりらしき尾

毒がついているかまでは分からない

……分かった方がおかしいか……

数えればそんなライオンもどきとしかいいようのない生物は7、  
8体程いた

「あいつらの狙いは……？」

「……若葉です……！」

若葉……？

後で聞けば最近生まれた青葉の妹らしい

ライオンもどきは低く唸ると一斉にアタシたちに襲いかかる  
アタシたちも戦闘体勢に

フレア・スパイク

「炎弾釘」！！」

「メタル・クロスズ・ランス」！！」

ダークネス・ライズ・スター

「邪昇星」！！」

ドドドドドドドドドドドドツ！！

アタシが放った炎の釘、 スチルが造り出した無数の槍、 レナー  
トが召喚した黒い昇る星

それらはすべてライオンもどきに命中した  
だけど、 残った1体が形勢不利と判断したのか、 塀を飛び越え、  
逃走したのだ！

「しまっ……！ 逃がすかあ！！」

アタシが炎を残った1体に放つが届く前に塀の裏に消えた

ドドドツ！！

いくばくかの破壊音が塀の外に響き渡る

凰輝がライオンもどきを退治したのだろうか

青葉がへたりこみながら、 息をつく

そのまま、 緊張の息が切れたのかぱったりと倒れ、 そのまま寝  
息を立てる

家の中を見れば赤ん坊が今にも泣きそうな顔でこっちを睨んでくる  
うっ……どうしよう……

スチルが家の中の赤ん坊を抱き上げ、 よしよしとあやす

「好きなだけ泣きましよう、 泣くだけのことにあったんですから」  
「……ふえ……ふえ……」

ふえええええええええええええええええええええええん!!!」

うるせええええええええええええええええええええええ!!!

「……………」

そのころ、 凰輝は塀の外で赤ん坊の泣き声を聞いていた  
いつもとは違う悲しげな顔を見ると、 塀にもたれこみ静かに目を  
閉じた……

「……ちっ……」

悔しげに顔を歪めると、 手で顔を覆い、 空を見上げた……

「凰輝ー、 どうだったー？」

「すまん、 逃がした」

「珍しいですね」

悔しげに顔を歪めたようすから見ると本当に逃がしたみたいだな  
ほんの少しだけ、 その顔が悲しげに見えたのは気のせいだろうか

……

「しっかりしてくださいよ！ 逃げ出してたのを仕止めるって言っ  
たのはドコのドイツ「ハイ、 死ね〜」「フギヤ！？」」

文句を言い出した雷華を凰輝は裏拳で近くの塀にめり込ます  
悲しげな表情はもう見えない

ちなみに雷華は身体の1/3程埋もれてピクピクしている  
あ、止まった

「……助けていいですか？」

「ダメ」

「え？ でも……」

「ほっとけ」

無視して家に帰り出す凰輝

その背中にレナートがついていく

残ったアタシたちはどうするべきか悩んでいた

「なにしてんの？ ……って雷華ちゃん！？」

「あ、 紗じゃん」

「どうしたんですか？」

「話は後。 先に雷華ちゃんを助けないと」

紗が軽く力を入れて引つ張ると、 ボコンと音を立てて雷華が塀か  
ら抜けた

「大丈夫？」

「ケホッ！ ケホッ……！ なんてあんなに怒ったんですか？」

「まず、 事情が知りたいんだけど……」

簡単に事情を説明してやると、 紗は少し考え込んだ後、 ああ、  
と思い当たることがあつたらしく、 アタシたちに聞いてくる

「青葉ちゃん家には最近赤ちゃんが生まれたよね？ 今いくつ？  
なんて名前？」

「たしか……まだ4ヶ月で……名前は……若葉……だったかな？」

「……うん、 じゃあ仕方ないよ

うん、 仕方ない」

「仕方ないって……私は塀に埋め込まれたんですよ！！」

「それはお前が空気読んでないからだろ」

雷華の言動には呆れたが、 紗が嬉しそうな顔をしているのが気になる

「うん、 仕方ない仕方ない」

「なにがですか？」

「いや、 別に

あ、 次から私も手助けに行くから」

あ、 そう

紗の言動とかには気になるが、 まだまだあのライオンもどきは襲  
ってくるだろう

……あの赤ん坊は絶対に守って見せる！

「兄貴ッ」

「あ？　なんだ？」

「赤ん坊好き？」

「嫌いだ」

いきなりなにを言い出すんだレナートは  
おっと、　司会は凰輝が引き継いでいるからな

「私も嫌いッ」

「なんでだ？」

「兄貴こそなんで？」

そうきたか

このまま塀に叩きつけてもよかったが、　まあいい  
答えてやろう

「赤ん坊は嫌いだ

すぐ泣く、　なにもせず、　己の身を守らず、　泣く

ただ泣く、　怯えて泣く

だから嫌いだ、　弱々し過ぎる」

脆すぎて、 儂すぎる  
大人よりも

「ふうん……」

「さあ答えたぞ、 お前は？」

「カラスが鳴いたらかーえろー」

「おいこら」

「かーえろー」

「殺すぞオラ」

「かーえろー」

「……ちつ」

仕方がない

「兄貴……逃がしたとはいえ、 姿は見たんだろ？ アレの名前は  
なんなのさ？」

「……あれは……」

はぐらかされた気もするが情報伝達は正確に、 だ

俺は自分の頭の中の辞書をひっかきまわす

ライオンのような全身——老人のような顔——悪魔のような翼——  
そしてサソリのような尾

思い当たるのは1種だけ

「あいつらの名前はたしか…… “キマイラ”」

冥界の魔獣の1種で、 好戦的、 凶暴  
だが、 空を飛ぶ力は生まれつき持つてはいない  
持っている場合——それは……

「“魂”を相当喰いやがったな……あいつら」

しかも、魔獣は“魂”を喰えば喰うほど強くなる  
1番強くなれる“魂”は赤子——それも様々な感情を持つ人間が1  
番だ

今回ばかりは……ヤバイぞ

「どうすっかな……」

空は静かに闇を映し出していた

其の陸拾陸・癒えぬ悼みと誓いの鳴き声・弐（後書き）

下手するとこの話最長になるかも……

其の陸拾漆：癒えぬ悼みと誓えの泣き声・参（前書き）

最近忙しい今日この頃

週一にしようか検討中です



「凰輝さんも頑張ってくださいよ!!」

「やだよ」

「なんでだよ!？」

「赤ん坊は嫌いなんだよ」

『んな理屈が通るかあああああああああああああ!』

「!!」

「通せ」

『ハイ』

鋭い目付きに言葉を返す2人

ううむ、最近神の威厳が落ちている気が……

だれ? “んなもん最初からねえじゃねえか” っていう人は

「でもいざというときに頼りになる人がいないとねえ」

「ねえ」

「紗、レナート、てめえらなに考えてる？」

「別に」

「別に」

なにかレナートが2人に増えた気がします……

「とりあえず俺は行かねえ、お前らだけで行ってこい」

「それはねえ……」

「ねえ」

ガシッ!

「……は？」

紗さんとレナートが凰輝の肩と腋をがっしりと掴み、ズルズルと引き摺りだす

「おい！ 放せ！！ 放せってんだろぅが！！！」

暴れだす凰輝さん、相当体格がいいのにレナートはともかく、紗さんの細腕で凰輝さんを引き摺れますよね……

あ、もしかして氣を使つて筋力を高めているんですかね？ 結構氣は万能性があるって前に凰輝さんが言っていましたから

「放せやオラ！！」

「だったら氣でも鬨氣でも殺氣でも全力で放てばいいじゃないさすがに全力で放たれたら掴まえようがないよ」

「……っ……！！」

軽い鬨氣だけでも泣かれていたのでありましょう

全力で、無論殺氣を放てば結果は火を見るより明らかでしょう

ですが……

「ううむ……」

どん詰まりに陥った凰輝さんをズリズルと引き摺っていく2人

後でどうなっても知りませんよ……

「じゃ、 私たちも凰輝さんに言われた配置につきますか」

「お——！」

「おう！！！」

「任せろい！！！」

雷華ちゃん、　フィア、　そして凰輝さんの姉、　琥鈴さんが気合  
いの声を上げる

やはり、　あの赤子を守りたいという気迫が感じれます

でも……

今夜来るとは限ら

「ぐおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」  
『来た！！』

……  
つて、　数が多すぎます！

「……じゅ……15体……？」  
「……まだまだでてくるぞ……」  
「……ただけ……」

唯一お気楽そうな琥鈴さんは一番先頭に出ています

その体に闘気がじんわりと満ちていく

凰輝さんほど苛烈で凄まじく殺意に満ちた気ではなく、　戦うこと

そのものを楽しむような——　　氣

そのため、　琥鈴さんが放つ氣は凰輝さんほど威圧的、　高圧的で  
はありません

「メガトンキイイイク！！」

ダッシュから繰り出した蹴りは先頭のキマイラの右側頭部に命中  
口から血へドを吐き散らしながら勢いよく並木家の塀に激突する

「アッパーカットオ！！」

今度はアッパーで別のキマイラのアゴを弾き飛ばす  
歯と血を吐きながらそのキマイラは空を舞う

「北斗百〇拳！！」

凄まじいラッシュ

数体のキマイラが吹き飛んでいく

でも、なぜ伏せ字なんでしょう……？

彼女の頑張りで次々にキマイラが宙を舞い、  
地面に叩きつけられていく

それでも数は一向に減る気配はありません

「しぶとい！！」

蹴り一発

その一撃は数体のキマイラを巻き込み、  
吹き飛ばしていきませんが、  
他のキマイラがそのスキを縫って彼女の脇を通りすぎていく

「私が行きます！」

“ボルティック・ヴァンデイ”！！

紅い雷を右手に宿らし、  
雷華は琥鈴さんが捕らえそこなつたキマイラ目掛け拳を突き出す

「“紅天”！！」

最初のキマイラが額に紅い雷を受け、  
一瞬紅く光ったかと思いき  
すとそのまま音もなく崩れ落ちる

「こうりん紅燐”！！」

次に右肩に拳を突き出す  
さつきと同じ様に、一瞬紅く光ったかと思えますとそのまま音もなく崩れ落ちていきました

一方、ファイアの方も健闘していました

フレア・スパイク  
「炎弾釘”！！」  
メガ・フレア・ショット  
“轟炎散弾”！！」

炎の釘、炎の弾丸が無数の敵に襲いかかる  
釘に貫かれ、火だるまになり、無数の敵が転げまわっていきます  
しかし、ボロボロになりながらも数体のキマイラが立ち上がっていく

「しづとい！！」

フレア・スパイク  
“炎弾釘”  
メガ・フレア・ショット  
“轟炎散弾”を次々に繰り出していきますが、  
後から  
後から沸いてくるキマイラの群れに神力は削られていき

ついに

「…くそお…！」

神力の大半を失い、片膝をつく  
身体中から汗を流し、息も荒々しくなっています

一方の雷華も神力を使い果たし、倒れる

「すみません…無茶しすぎました…！」

彼女が使った技“ボルティック・ヴァンディ”は相当神力を削って  
いくみたいです

威力もそれにみあうだけあり、彼女の周りには動かないキマイラ  
が多数

いずれも外傷はなさそうです

キマイラの群れから一時的に彼女たちを守るため、私は精神を集  
中しました

「アイアンウォールα」！

鋼鉄の壁を召喚し、2人をキマイラの群れから一時避難させる  
琥鈴さんには申し訳ありませんが、今は2人をなんとかすることが  
大切です

ゼイゼイと息をつく2人

私は彼女たちが倒したキマイラを観察してある事実には気がつきました

「だんだん大きくなっている……？」

そう、少しずつ

本当に少しずつですが確実にそのキマイラの群れは全長に差がありました

つまり……

「どういふことですか…？」

……ま、まさか！？

「しまっ……！ 凰輝！ そっちに何体が行った！！」

こうしてはいられません

私は鋼鉄の壁を飛び越えると、  
琥鈴と合流し、  
キマイラ討伐に  
乗り出しました

やはり、  
キマイラは少し大きくなっていました

其の陸拾捌：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・肆（前書き）

最近、 コメディが書けない……  
一種のスランプか……？

其の陸拾捌：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・肆

「凰輝！ レナートさん！ 来たよ！！」

ところかわつてこちらは青葉ちゃん家の庭にいます

レナートさんと凰輝と共に、 キマイラを迎え撃とうとしていたところでは

青葉ちゃん、 紅葉ちゃんたちは昼の怪我が原因で家の中で寝ています

ヤツラの狙いであろう若葉ちゃんはベランダ前に窓を閉めてオトリ＋護りやすいように

青葉ちゃんたちの父親、 母親は気絶中

こういうときに頼りにならない…… と思つてはいけない

自分たちのものさしで他人を計ることなど言語道断だ

自分と他人は違う。 生まれも、 育った家庭も、 夢も、 記憶

も、

それなのになぜ同じものさしで計れろうとする？

絶対にありえない

自分が想像していたよりも大きい人がいる、 小さい人もいる

自分が体験したことのない喜びや悲しみや痛みでさえも、 きつと

別のだれかは体験したことがあるのだろう

……ごめん、 話がずれた

とにかく、 今は目の前の問題を片付けることが先決！

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお！！』

雄叫びを上げるキマイラの群れ

だけど、こっちの戦闘準備も整っている！

「いくよ！」

「アイアイサー！！」

「頑張れ」

やけに乗り気じゃない凰輝

ふうむ、やっぱりアレか……♪

こついう一面があるから凰輝を“恐ろしい”とは感じにくい  
え？ なんのことだって？

ヒーミーツー♪

「ぐおおおおおおおおおおおおおお！！」

ナイトメア・ファントム・ソード

「“悪夢の幻影剣”！！」

レナートさんが作り出した紫色の霧が剣と化してキマイラを斬りま  
くる

斬られたキマイラに傷はないが、突如倒れ苦しみ悶えだす  
恐ろしい技だね……

「ちっ………仕方ない」

凰輝も嫌々ながら戦闘体勢に

「ホイ、ハイキック」

ダルそうなセリフと共に放たれた蹴りだけど、その一撃はプロキックボクサーのそれを超える  
キマイラの1体がその蹴りで頭蓋骨を碎かれ、蹴りによって放たれた真空刃が数体のキマイラを両断する

おっと、のんびり実況解説しているときじゃなかった

「豊華流“竹流”！」

突っ込んできたキマイラを受け流し、バランスを崩した所を踵落として地面に叩きつける

普通の女性の蹴り一発だけでは冥界のヤツラは気絶しない

だが、私は氣を込めて放った

頭蓋骨を碎くほど恐ろしい一撃ではないけれど、そいつは脳震盪を起こして動かなくなった

「まだまだ！！  
ディープレッド・ジャッジ  
“深紅の断罪者”！！！！」

レナートさんが召喚した深紅の穢れた雷が闇夜を貫き、数体のキマイラを吹き飛ばす  
その衝撃波でさらに、十数体のキマイラが悲鳴を上げて吹き飛んでいく

凄まじい大技に見えるけれど、彼女は全然疲れた様子を見せない  
さすがは400年の時を生きた悪魔だ

「お前邪魔」

一方の凰輝もアッパー＋裏拳のコンボで数十体のキマイラを葬りさる  
たった18年しか生きてはいないけど……

さらに凰輝は前蹴りで縦1列のキマイラをまとめて塀に叩きつける  
大分倒したはずだ

おっと、 まだまだ来たか

「豊華流“花枯”！」

氣を込め、 全体重を乗せた肘打ちを迫ってきたキマイラに叩き込む  
交差法で威力はさらに上がる

顔面にその一撃を受けたキマイラは大きく仰け反る

その喉元を狙ってもう一度“花枯”を叩き込む

そいつは血ヘッドを吐き散らして吹き飛ぶ

「豊華流“椿返”<sup>つばきがえし</sup>！」

突進して来たキマイラを掴んで1回転

そのままキマイラの群れに投げ返す

投げ返され、 混乱するキマイラの群れ

でも……でも……

「鬱陶しいな……！」

数はまだまだ一向に減る気配はない  
むしろ、増え続けている

……あれ？

「なんか……大きくなってない……？」

「兄弟か親子かなんかじゃねえか？」

あっさりと言う鳳輝

でも、そうだとしたらどんだけ大家族なの！？　って感じだけどね

「とりあえず……真空拳！」

めちやくちゃダルそうに真空の拳を叩き込む  
キマイラの群れは身体が円形にはぜ割れる  
コワッ！　相変わらずコワッ！！

プラス  
「+ソニックキック」

蹴りと共に放たれた真空の刃がキマイラの群れを両断していく  
うゝむ、相変わらず強い……  
でも……やっぱり四神流は一度も使っていない  
あの悼みはいまだに彼を引きずっているみたいだ

「“デイスカバイト・コーリフィティア・ブリーア”……！」

レナートさんが召喚し、握りしめた黒い刃がキマイラを貫く  
そのまま他のキマイラを次々斬りつけて打ち倒していく

かくいう私も次々にキマイラを投げ飛ばしていく

もう、かれこれ50体は倒しているはずだ

レナートさんは私の3倍、鳳輝は彼女の7倍は倒しているはずだ

合計1250体ほど倒したはずだ

塀の前にも琥鈴さんたちがいるはずだが、彼女たちを乗り越えて

くる数がいくらなんでも多すぎる

彼女たちも苦戦してるの……！？

「やっべえ……！」

「え……？」

いきなり呟く鳳輝

月はすでに真上に浮かんでいる

……あ、

「しまった……“今日”だったか……！」

そう、明日は、いやもう今日は

鳳輝がなぜか半年に一度、“女性化”する日だったのだ

……でも、  
そんなの正直鳳輝には関係ないよね……

其の陸拾捌：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・肆（後書き）

神様と私の外伝を書こうか今検討中

（そんなことしているヒマがあつたら、  
続きを書け）

其の陸拾玖：癒えぬ悼みと誓いの泣き声・伍（前書き）

知らないうちにPVが120000を超えてました

ユニークも22000……

本当にみなさんありがとうございました。

其の陸拾玖：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・伍

「ちい……！ 参ったなあ……」

今まで素手で真空波を放っていた人とは思えない弱気なセリフを呟く鳳輝

今は完全に女性化しており、身長は10cm程縮み、胸が膨らんでいく

正直女の私よりも大きくなるためにイラつく

「仕方ねえ、ケリつけるぞ！」

『ぐおおおおおおおおおおおおおおお！！！！』

襲い来るキマイラの群れ、それに対応する私たち  
無論、最初の奴らより大分大きくなっている

「豊華流“桃嵐”！！」

先頭のキマイラの顔面を掴み、両手を使いながらその身体を回転させる

「ぬおりやあああああああああああああああ！！」

「それ、らき○たの柊○がみたいいな叫び声だな」

鳳輝の意味不明の微妙な突っ込みを聞き流し、回転させたままキマイラを群れに投げ返す

ていうかなんでそんなことを知っているのさ……

次に来た、キマイラの群れはレナートさんが相手する

「こい！ “死人デッドシクルの鎌”！！」

私よりも大きい鎌が闇と共に現れ、レナートさんの手中に収まる鎌はそのまま黒い稲妻を帯びる！

「くへいれつぱ黒雷烈破”！！」

高いジャンプから振り下ろされた一閃は、確実にキマイラの群れを葬りさつていく

気がつけば数は大分減っている  
残りの群れは鳳輝に向かっていく！

「これで終わりか？」  
「え？ ……早っ！！」

もうすでにさっきの群れは全員倒れていた  
いや、さっき解説したばかりだね？

「鳳輝！！ ……って、ああ！ 今日か！？」  
「レナート！ そっちは終わりました！？」

琥鈴さんとスチルちゃんたちが塀を乗り越えてくる  
雷華ちゃんたちは2人が肩に抱いている  
疲労の色が濃そうだけど、ここから見た限り外傷はなさそうだ

「雷華ちゃんたちは大丈夫なの！？」  
「大丈夫です。神力を使い果たしただけですから」  
「おゝい。起きろ」

ぺちぺちと頬を叩く凰輝  
だけど、 2人はピクリともしない

「ほほお……無視か……」

いい度胸だなあああああああああああああ！？！

？

」

『……………』

なにも突っ込めない私たち

いや、 まあ、 怒気や殺気は孕ませてはないんだけど……

表情が怖い

口元は笑っているけど、 目は完全に笑ってない  
これは後で仕返しを喰らうよ……

「ふん……いい気なものだな……」

『！？！？！？』

突然聞こえた奇妙な声

それに驚いて振り向く私たち

そこには……

今までで、 1番大きい

キマイラがいた

さっきまでのキマイラたちよりも2、 3回りも大きく体格もしな  
やかそうで頑強  
翼も群れの中で1番大きい

そして、 なにより、 人の言葉を話した

魔獣には魔獣の言葉がある

だが、 魂を喰らい続けた魔獣は人の言葉を、 時には魔術、 更  
には古代呪文すら扱えるようになるという  
魔獣はそれだけ脅威的な存在になりうるのだ

..... いや、 別にこれは凰輝から聞いた話だけだね？  
別に私が魔獣に詳しいとかそんな話じゃないからね

「我が子孫たちをことごとく打ち破るとは.....  
大した奴らだが「知るかなもん」.....」

キマイラのセリフを遮り、 戦闘の構えをとる西上姉弟  
凰輝がさらに反論する間もなく、 言い放つ

「てめえの家族なんぞ知るか

闘いに生きる以上、<sup>ハンデイング</sup>“死”ぐらいは覚悟しておくべきだな  
<sup>ファイト</sup>狩りだろうと争いだろうとな」

「死んでいった奴らのために勝とうとする気迫はいいけど、  
熱くなるなよ」

さらに琥鈴さんが畳み掛ける

頭にプチプチと変わった音を立てながら、キマイラはなお私たち  
を睨み付けている  
ついでに私も口撃する<sup>こうげき</sup>

「早くしてくれない？ こっちもヒマじゃないから」  
「紗さん！？」

スチルちゃんが意外という目で私を見つめてくる  
なに？ 挑発だって1つの戦法だよ

「上等だ貴様らああああああああああああああああ！！！！」  
「」

襲い来るキマイラ  
迎え撃ったのは凰輝だ

「ワン、 ツー、 three！」

1、 2発目は当たったが、 3発目は回避される  
再び元の位置に戻るキマイラ

「なんで、 スリーだけ上手いの？」  
「その方が楽しいじゃん？」

『いや、全然』

凰輝とキマイラを除いた私たちの突っ込みが重なる  
雷華ちゃんたちはすでに復活している  
ただど息も絶え絶えで、 足はフラフラ、 いまだ2人の肩に体を  
預けている

「なるほどな……」

にやつきながら凰輝を睨むキマイラ

その笑みには優越感や余裕が浮かんでいる

「その強さ……貴様“忌み子”だなあ……？」

『!?!?!?』

『?』

「……………」

凰輝を一瞬で“忌み子”と睨んだキマイラ

私たちは驚き、 雷華ちゃんたちは分かなそうに首を傾げる  
黙り込む凰輝

「“忌み子”の魂……さぞや我が喉に甘かろう!!」

「この……!!」

襲いかかるキマイラに思わずわずかな闘気を迸らせる凰輝

だけど、 忘れていた

赤ん坊がいることを

[illegible]

泣き出す若葉

おそらく、凰輝の闘気を感じ取ったのだろう  
それに気付いたのか思わず凰輝が振り返る

「バカめ！！ 油断したな！！」

凰輝の肩に噛みつくキマイラ

恐らく、その牙の硬度は鋼に等しく、それから繰り出される一噛みは人の骨を軽々と砕くだろう

普通の人なら

砕けたのは噛みついたキマイラの牙の方だった

「バカな！？ 鉄より硬い我が牙がどうして！？」

俺の身体は鋼鉄よりもはるかに硬い」

アツサリとありえないことを言い、怒気を孕ませながら拳を引く

「そもそもてめえらさえ来なければなあ……！！」

その憤怒の表情は不動明王のそれを凌ぐ

凰輝はその表情のままキマイラとの距離を一気に詰め、  
 たアッパーを繰り出す

「桜花昇天」！！

「ぐぎゃあ！？！？」

7、 8 m程空に飛ばされたキマイラを追うように飛び上がる凰輝  
そのまま、 下目掛けて蹴りを放つ

「滅鬼蹴撃」  
い！！

「げぶう！？」

隕石のごとく蹴りを放つ凰輝

その一撃は塀全体にヒビを入れた

[illegible]

L



其の陸拾玖：癒えぬ悼みと脅えの泣き声・伍（後書き）

キマイラ編（？）はいよいよ次で終える予定  
今週中に投稿できたら……

其の漆拾・恐れられる“滅び”の力（前書き）

もう少し、 早めに投稿したかった……

其の漆拾：恐れられる“滅び”の力

しばし、殴打音や骨が折れるような音、その他もろもろが塀の外から聞こえてきたが私たちはあえて無視した  
え？ その他もろもろがなんだって？

……言いたくないよ、というかわわせないでお願い

「紗……」

あ、やば

そこにはいつからいたのか鬼神よりもはるかに恐ろしい表情をした  
鳳輝がいた

「い、いやあのわ、若葉ちゃんがいるs「んなもん知るかああ  
ああああああああああああああああ！！！！！！」わあああ  
ああああああああああああああああ！！！！」

鬼神おにの手が翻ひった瞬間、私の目の前は急激に回りだした

しばらくして、 私はみんなの力を借りて、 埋められた塀からよ  
うやく脱出した

「死ぬかと思った……」  
『普通は死んでます』

3人の突っ込みがキレイに重なる  
あ、 3人っていうのは雷華ちゃん、 スチルちゃん、 ファイ  
ちゃんの3人のことね  
レナートさんと琥鈴さんは凰輝と一緒にさつき帰っちゃったらしい  
さつき聞いたことだからさ、 確証はないんだけどね

「紗さん……」  
「ん？ なに？」  
「さつきキマイラが言っていた“忌み子”ってなんなんですか？」  
「……………」

思わず無言になる私  
言うべきなのか、 言わざるべきなのか……  
いや、 今のうちに言った方が後々楽かもしれない

「少し長くなるし……色々な意味で危険なことに巻き込まれるかも  
しれない……それでもいい？」  
『ハイ！！』

気持ちいい挨拶をする3人

さてと、 ドコから話し始めようかな……

「そもそも“属性”って知ってる？

生き物の魂は本来様々な“属性”を秘めてるんだ

大体が“火”“水”“雷”“風”“土”“光”“闇”“無”の8種類なんだけど、 たまにそれ以外の“属性”を秘めている場合があるの

それが“忌み子”

どんなのかと言つと “渴”<sup>かわき</sup> “潤”<sup>うるおし</sup> “嘆”<sup>なげき</sup> “歡”<sup>よろこび</sup> “昂”<sup>たかぶり</sup> “樂”<sup>たのしみ</sup> “創”<sup>つくり</sup>

”そして、 “滅”<sup>ほろび</sup>”

凰輝はその1つ、 “滅”の“属性”を秘めているの

“忌み子”はただ、 変わった“属性”を秘めているだけじゃないの

大半が凄まじい力を秘めている上に、 “変化能力”さえあるの  
変化すると、 異常な戦闘能力、 生命力、 さらに飛行能力  
さえ得られるのもいる

だけど、 やっぱり大半がその能力に耐えられず、 精神に異常  
をきたしたり、 自分から崩壊すること多いの

だから“忌み子”

“忌む”べき哀れな者たち」

今でも静かになると、 目を閉じると思い出す

嘆きの叫びと、 哀しみの泣き声

——消える！！ この化け物があああああああああああああ  
あああああ！！

凰輝に向けられた怒りと嘆きの雄叫び

私に向けられたわけじゃないのに酷く傷ついたのを覚えている  
じゃあ、 向けられた本人はどれだけ傷ついただろう

『……………』

しばし、無言になる3人  
私ですら想像もつかない悼み  
もう話すのは止めておこうかな……  
いや、ここで止めるわけにはいかない

「忌み子”はすべてつてわけじゃないけど……  
凰輝は“西上家”の、しかも“四神流継承者”でしょ？  
凄まじいなんてレベルじゃないぐらいの  
その気になれば地球どころか、宇宙の1つ2つぐらい滅ぼせる  
力を持っているらしいの」

らしいっていうのは私もそんな力を見たことないから  
見ていたらおかしいけどね、世界1度滅んでることになるじゃん

「そんな恐ろしい力を持っていたんですね……凰輝さん……」

雷華ちゃんが恐ろしげに呟く  
私自身も初めは“近づくな、関わるな”って本能が警告していた  
しね

その本能を信頼しなくて、後悔したこともしなかったことも多々  
あったなあ……

つと、 続き続き

「赤ん坊ってか弱いでしょ？  
だから、自分自身を守るために少しのことにも過剰に反応するの  
大声とかにすぐに泣くようにね

そして、 凰輝の氣は大声なんかよりも恐ろしい存在らしいの  
だから、 若葉<sup>かのじよ</sup>は泣いた  
自分よりはるかに恐ろしい存在を察知したの」

『……………』

「だから凰輝は赤ん坊に近づかない  
近づけたら泣かせてしまうから

凰輝が離れても、 疲れはてても

熱が出るまでずっと

これが凰輝が赤ん坊に近づくのを嫌がった理由」

「そんなことが……………」

「大変なんですね……………」

「でも……………なにか、 少しかわいらしいですね……………」

うん、 私もそう思う

イビる大チャンスだしね

クヒヒヒヒッ

「紗さん……………変な笑いは止めてください……………」

「勝手に心を読まないでくれる？」

『聞こえてました』

「え？ 本当？」

自分でも知らないうちに笑っていたなんて……  
うん、 気をつけよ

「あ、 そうそう最後に  
決してこのことは凰輝に言ったらダメだよ  
言ったら……………わかるよね？」  
『は、 はいい………』





其の漆拾：恐れられる“滅び”の力（後書き）

これでキマイラ編も終了

次回から再びギャグ中心に

1つ、キマイラをマンティコアに改名したほうが良かったのか考  
え中

其の漆拾壺：鬼被う豆で悪魔を被う（前書き）

節分の話

少し遅れました

其の漆拾壱：鬼被う豆で悪魔を被う

「鬼は外！ 福は内！」

すっかり元気になった青葉の妹、紅葉が家の回りに豆を蒔いていた

「お、今日は節分か」

「節分？」

「豆を蒔いて鬼を追い払うという信憑性のカケラもない行事だ」

「……古来より続く日本の伝統を否定してはダメでしょ」

お、今回の司会は大タシ、ファイだぞ

今回は紗の出番は大シだからな

だから、今いるのは鳳輝、雷華、大タシ、スチルにレナー  
ト、そして並町姉妹の7人

「……久々にするか？ 節分」

「ふえ？」

「今ですか？」

「今。」

アツサリとした言い種の鳳輝に半ば呆れる大タシたち  
やるのはいいけど、準備つてもんが……

「大豆と鬼の面があるからやるぞ」

つておい！！ いつの間に大量の大豆を持ってきたんだ！？  
それに鬼の面木製だぞ！！ だれが着けるんだ！？

「……誰が着けるんですか？」  
「じゃんけんで決めよう」

というわけで、 じゃんけんポン

『……………』

「ええええええええええええええええええええええええ！？」 なんてみなさん“グー” なんですか！？」  
「ある意味珍しいぞコレ……」

そう、 全員“グー” でアイコになったのだ  
コレは後で聞いたことだが、 全員が同じのを出すことになる確率は約0・14%（7人でした場合）なのだそうだ  
ちなみに1人勝ちの確率は約1%（7人でした場合）  
いや、 アイコになる確率は高いらしいけどね  
みんな同じものを出す確率は約0・14%（7人でした場合）なのだそうだ

そんなことにあまり気にせず、 もう一回……

『じゃん！ けん！ ポン！！ …………… はああああああああ  
ああああああああ！?!?!? ……』

今度は全員“チョキ” でアイコに  
2回連続で全員同じものを出してアイコになる確率はなんと約0・00006%（7人でした場合）！！  
ある意味奇跡だぞこれ！！

3回目は同じことは起こらず、 普通に凰輝、 紅葉が勝ち抜け  
そのままずるずるとして……

「ア、 アタシイ!?」

「残念ですねフィア」

最後に一騎討ちで負けた雷華に木製の鬼の面を押し付けられる  
くそう……

そのあと、 鳳輝がみんなに木箱一杯の大豆を配っていく  
その間にアタシは鬼の面を着ける

そして、

「ヨイ……ドン!!」

鳳輝の一声でみんなが一斉にアタシに豆を投げつける  
だけど、 黙ってやられるアタシじゃない!

「甘い! アタシの見切りは革命的だ!!」  
レボリューション

「……それなんのパクリですか?」

「なら、 私の再〇填も革命的だあ!」  
リロード レボリューション

「……紅葉……真似しちゃダメですよ」

青葉の突っ込みは軽く無視して、 アタシは見切り、 避け続ける  
というが紅葉、 それ元ネタのまんまだから  
一応、 伏せているけどさ

数十発喰らったりはしたが、 みんなの豆はほとんど尽きてきた  
鳳輝は一回も投げてない

そんな事実軽く無視して雷華をからかう

「雷華あ! この程度か!? チョロいぜ!!」

「くう! 鳳輝さん豆ください!!」

「ハイハイ」

鳳輝の豆を半分程譲り受けて、雷華はさらにばらまき続ける  
他の面々は豆が尽きたらしく、アタシたちの戦いを眺めている  
1人だけなら、避けるのも大分楽だ

「くそっ！　なんで避けるんですか！？」

「当たったらなんかヤバそうだからだ！！」

知らない内に雷の神力がこもっているしな！！

あれ当たったら「やられた」じゃ済まないぞ！　多分！

それにしても、大分投げつけられる豆が減ったな……  
ということは、もう残りも少ないということだな！

「もう終わりか！？」

「そのセリフは……これでも受けてみてから言ってください！！」

甘い！　中々速いけど、避けることに集中すれば回避できないア  
タシじゃない！

アタシは回転しながら飛んでくる四角い物体を紙一重で見切る！

……四角い物体？

飛んできたのは豆を入れていた木箱だった

「なんでこんなの投げたんだ!？」

「豆がなくなつたからです!!」

「なら投げるな!!」

「だが断る!」

なんのパクリだよ!!

ともかく雷華も弾切れ(豆?)で終わり  
これで全員……じゃなかったな

「……よし、俺の出番か」

「出番来なくていいから」

ラスボス、 凰輝降臨

雷華に半分程渡しているが、 正直……怖い

「とりあえず……ウラァ!」

凰輝の手が翻る<sup>ひるがえ</sup>

それと同時にアタシの後ろの壁に亀裂が走る

………は?

「うつし……こんなもんか……」

え? なに? なに投げたの? 豆?

生まれて初めてだよ……豆で頬を切ったのは……

「もういつちょ逝くぞ」

『“逝くぞ”！？』

凰輝が木箱から豆を握り……

「悪……」

振りかぶり……

「霊……」

片足を上げて……

「退……」

野球のフォームのような構えをとり……

「散……」

投げる！

投げられた豆は散弾銃ショットガンのようなスピードと攻撃範囲を保ちながら、  
まっすぐにアタシに襲いかかる！

「なんのお……」

一か八か、アタシは炎の壁を生み出し、豆はその炎の壁の中に  
消えていく  
いや、これって“節分”ってやつだよな？

日本の“デントウギョウジ”ってやつだよな？

日本の“デントウギョウジ”はこんなにデンジヤラスなのか……？

（違います）

「ヘルエンジェルショットガン」

“墮天使の散弾銃” 豆バージョン！！」

『豆バージョン！？』

黒い弾丸（豆です）がまっすぐにアタシに襲いかかる

右に転がりながら回避した……はずだった

豆はすでにアタシの目の前にあった

「うわあああああああああああああああ！？！？」

そのまま、blackout……

視界は唐突に開いた

「う……？」

「……あ、起きました……？」

「……なにが起こったんだ……？」

たしか……凰輝に……豆を……投……げ……

「ああああああああああああああああ！！」  
「うるさい」

近くにいた凰輝の裏拳をギリギリで回避できたアタシ  
だけど、その回避した一撃は雷華の顔面へと叩き込まれた

「くぎゅ！？」

そのまま転倒、気絶  
そんな彼女を無視して、アタシはみんなが同じ方向を向いて食べ  
ているものに気づく

「なにしてんだ？」

「恵方巻きを食べてるんだ

ほれ、お前の分」

「あ、おう」

凰輝からもらった恵方巻きを頬張ろうとしたとき、不意に青葉に  
止められる

「……今年は“東北東”を向いて食べるんですよ」  
「了解」

というわけで、アタシもみんなと同じ方向を向いて食べ始める  
太くて食べにくいな……

そういえば……

「東北東” 向いて食う意味あんのか？」  
『……………』

なんで一斉に黙るんだ？ オーイ……

……それにしてもみんな同じ方向を向いて食うって意外とシユール  
だなあ……

ちなみに、

「ぎゅっ……」

雷華が目覚めたのは10時間後だった

其の漆拾貳：彼らへ贈る愛の詞（前書き）

タイトルは“かれらへおくるあいのことば”と読んでください  
バレンタインデーでは家族以外チョコ貰ったことはありません  
正直、自分のキャラが羨ましい……

其の漆拾貳：彼らへ贈る愛の詞

ハッピーバレンタイン！

な、わきやあ無いだろ？がこのボケ共が！！

「なぜキレる！？」

うるさいわ！！　お前にチヨコが貰えないブス男の気持ちが分かってたまるか！！！！

「なんでだよ！　もういい！　司会变われ！！」

つて、 わああああああああああああああああああ  
なにをするきさまらー

「なんで棒読みなんだよ!？」

あと、  
“きさまら”  
って俺1人しかないぞ!?

司会はアホ作者から変わって、久々の篠田恭介だぞ  
翌日がバレンタインデーといっても大したことじゃないと思うがな  
今までの接し方でチョコ貰えるかが決まるようなもんだろ

「偉そうなことを……」

「地味男しみおのくせに……」

「地味男が調子乗りやがって……」

司会に突っ込むな、名も無き輩やから共

あと、俺は地味男じゃねえ

『地味男が調子こいてんじゃねえぞ、だれが名も無き輩共だ？  
ああ？』

………

「オマエラチヨットオモテデロ」

『す………すみませんでしたあ………!!』

分からない、忘れたという人に再び説明しよう！

地味男こと篠田恭介は実は剣道有段者で、中学生のころから全国大会に出場し続けているという剣道の天才なのだあ……!!

詳しくは（？）（其の貳拾肆参照！！ by 作者

くくというわけでしたらく待つてくださいくく

さあて……っと

俺はもはやボロ雑巾と化した名無し共を放置して、カバンを持ち  
上げ教室を出る  
明日は色々な意味でヤバそうだ

ちなみに翌日<sup>バレンタインデー</sup>に入る前に

「チョコレートが欲しいかあああああああああああああ  
ああ！？」

『おおおおおおおおおおおおおおお！！』

バレンタインデーの汚染が剣道部<sup>ウチ</sup>にまで……

「うるさいわ、このタワケ共が」

『ぐわあああああああああああああ！?!?!』

凰輝い！？　なにしに來たんだ！？

「部活に汗流す奴らを見下しに」

「思考を読むな、そして剣道部でそんなことを言うな」

「どうでもいいが地味男じみおとこって蜘蛛男くもおとこに少し似てないか？」

「似てねえよ、だから帰れ」

〃〃翌日〃〃

「……地味男」

「青葉までそんなこと言うか……」

登校直後の教室での一風景がこれだ

なんかまわりがくそやかましい気がするのはあくまで気のせいだ  
うん。　気のせいだ

「義理……いりますか？」

「あ、　おう、　欲しい」

するとカバンから四角い箱を取り出す

…… チョコか？

すると、 青葉はその箱を上上げた

…… なぜ？

「ハイ、 上げました」

「そんな化石寸前のギャグを持ち出すなよ  
くれるのかくれんのかどっちなんだよ」

「あげますよ、 義理ですけど」

「義理でもうれしいぞ

チョコ好きだからな」

教室とディスプレイから冷たい視線が送られてくる気もするが気に  
しないでおこう

青葉から受け取った箱からはわずかだが冷気が感じられる  
ふむ、 食べ頃はもう少し後だな

「おはよー」

「おつす、 地味助」

「地味助じゃねえ」

凰輝と紗さんが登校

それにしても地味助って……

知らないうちに俺のあだ名が色々と確定してしまった気がする  
そもそも俺はなんで“地味”と呼ばれるのだろうか

「“地味”だからだ“影薄”よりはマシだろ」

「けんもほろろじゃねえか

しかも思考読むな

………ところでなんなんだ？ その袋  
チョコか？」

俺の問いに凰輝は持っていた紙製の袋を上げる

「饅頭だ

チョコとか洋菓子はあんまり好きじゃなくなてな」

「ほお、 珍しいな」

甘いものは全体的に好きか嫌いかで別れると思っのだがな

「はい、 恭介君

好きでしょ？」

「おお、 ありがとう」

手渡されたのはお決まりのチョコ

星形だから、 手作りか

うれしいな」

『ちっ………地味男のくせに調子に乗りやがって………』

フハハハハ、 小物共の小言ほど小気味いいものはないわ  
シャハハハハ………

「ア○ロン！？」

紗さん、 人の思考を読まないでください

なんか、 今回は思考読まれてばかりだな。 くそう

「良かったな地味助」

「地味助言うな」

「彼は篠田恭介って名前があるでしょ！」

凰輝の言葉に突っ込む俺、  
注意を入れる紗さん  
ありがとう、 紗さん

「じゃあ紗、アレは？」

凰輝が指し示したのは1人の男性

「アレはじゃなくてアイツはでしょ、え」と……」

あれ？  
アイツはだれだっけ？

……というか……

「そもそも……」

俺と紗さんの声が重なる

あんなのウチの学校にいた？

「柿田吾郎だ！」

.....  
 そんなのいたっけ？

[illegible]

「ああ！？」

その後、影薄を叩きのめしたのは言うまでもない

くくそんなこんなでくく

あつという間に昼休みだよ、コンチキショー

あの後、知らん女の子からチヨコを3つほどもらった  
意外と俺ってモテるんだな

全部が全部“義理”って書かれてたのには少し泣いたけど

「おい!!」

「あ？」

振り向くとそこにはかわいらしい少女が

いや、本当に“少女”って感じなんだよ

金髪のツインテールに気の強そうな顔

お世辞にもあるとはいえない胸

スカートもかわいらしいチエック柄

パーカーなんか着てるからボーイッシュな感じが

「なに人のこと見てるんだ？」

「いや、読者様に説明を」

「はあ？」

怪訝そうな顔をする少女

まあ、その考えも分らんことはないが  
この空気が分かんとは多分1年か

「そもそも2年の階になんのよう？」

「篠田恭介」は……お前だな？」

え？ なにそれ？

俺なんか人に恨まれることし……したな、さつき

で、でも！ 後輩に恨まれることしたことなくって1度もないぞ！  
しかも、なんでコイツ顔赤くいんだ？ 風邪か？

「どつ！ どうせチヨコ1個ももらってないんだろ  
地味男だからな」

なに？ 俺ってそんなに地味？

「や、やるよ！！ いつ！ 言っとくけどな！！ “義理”だからな！！  
“義・理”！！ か、勘違いするなよ！！」

そのまま俺にチヨコを押し付け、少女は階段へ走って行ってしま  
った

「なんなんだったんだ……」

「<sup>あや</sup>亜矢ちゃんはツンデレだからね」

「は？ ツンデレ？」

声がした方へ方向を変えるとそこには黒髪美人が  
ジャージが穏やかな表情を見事に裏切っている

「あんたは？ それに亜矢って？」

「雪<sup>ゆき</sup>緋<sup>ひ</sup>は楠<sup>くす</sup>火<sup>び</sup>雪<sup>ゆき</sup>緋<sup>ひ</sup>

あの娘は枢<sup>くる</sup>木<sup>る</sup>亜<sup>あ</sup>矢<sup>や</sup>

1年5組の同級生なんだよ」

「友人か」

それにしても、友人のためとはいえ2年の階に一緒にくるとは相当度胸あるよな

「それにしても……あの“亜矢”って娘は俺のどこに惚れたんだ？」

「地<sup>m</sup>……け、堅実なところが！」

ああ、さいでつかさいでつか

どうーせ、俺は地味男ですよ地味助ですよ

## 其の漆拾参：語りゆく者と語らぬ書と

……………お、連続とは珍しいな

篠田恭介だ

今日は近くの本屋に来ている

店名は“TATSUYA”

T S U T O Y A じゃないぞ T S U T O Y A じゃ

「さてと……………“ジョンプ”はっと……………」

これもジャ○プじゃないぞ  
ジャ○プじゃ

なぜかこの玉藻町、特にココ西玉藻はおかしいのが多い  
ウチの高校、玉藻高校も実は略称で、正式名称は“一皇化西南  
西特殊玉藻高等学校VX（こうかせいなんせいとくしゅたまもこう  
とうがっこうブイエックス）”というくそ長い上に突っ込みどころ  
満載の名前なのだ

まあ、順々に突っ込んでいくと

皇化ってなんなんだよ

西南西は置いといて、特殊ってなにが特殊なんだよ

VXに意味あんのかよ、そもそも名前が長え

……………っこんなもんか

おっと、話を戻そうか

とにかく、今俺は本屋に来ている

理由は……………マンガの立ち読みだよ文句あつか

とりあえず……ん？

「へへ色々と新しいのが出てるみたいだな」

新刊！　と書かれている棚には結構な量の本が置いてあった  
新刊を買う予定はないが、　最近は少々懐に余裕があるから何冊か  
買っておこうかな

「……へえ、　結構面白そうなのが……」

新刊の棚からカラフルな本を取り出す  
帯には「あの大人気作が遂に小説に！　笑い死に注意！」と書か  
れていた  
タイトルは……

「“中東虐殺の歴史”……笑えるかあ！！」

暗いよ！　これで爆笑したら中東の人に殺されるぞ！？  
しかも、　なんでカラフルなんだよ！　大人気作なのか！？　聞い  
たことないぞ！！

俺はそのまま本を棚に戻す  
こんなムズいの読めるか

そのまま適当に本を取り出す

「英語の本か？　……少し簡単そうだな」

可愛い男の子の絵が描かれているやや薄手の本

タイトルは英語で書かれている  
英語は苦手だから買っておこうかな……

「オイ篠田、それ買うのか？」

「ん？ 凰輝か、知ってるのか？」

偶然、同じ本屋に来ていたらしい凰輝が俺の持っている本を覗きこむ

「知ってるもなにも……持ってるぞ」

「ホントか？ どんな話なんだ？」

「えーと……たしか……」

7歳ぐらいの男の子が変態共にチヨメチヨメ××されるといふ……」

「OK、みなまで言うな」

そのまま棚へ戻す

意味が分かった人はなかったことにしてくれ

意味が分からなかった人はそのまま気にしないでくれ

こんなの読むほど俺は腐っちゃいない

そもそもそんな本を平然と並べるな、 店長

「そっぴや凰輝はなんでココに？」

「本を買いにだ、他に理由があるか？」

ないな

「ちなみに本のタイトルは“中世・近代の拷問法”だ」

コイツらしいといえばコイツらしい

「結構ベストセラーらしいぞ」

「なんでだよ、なあ、なんでだよ」

やっぱりこの町はおかしい

色々

「じゃあ、俺はその本を探しに行くから」

そうして、 凰輝は歴史関連の本がある棚へと向かった。 そっちにはないような気がする。      なんとなく

「……ん？ この本って……」

ボロボロの本を新刊の棚から取り出す  
なんでこんな本が？

「初版発行は……なんだ、最近じゃねえかなんでこんなにボロボロに？」

タイトルは“中世・近代の拷問法”

……おい、凰輝

あつたぞ〜

ちなみにボロボロになっているわけは

“ 雰囲気出すために頑張りました ♪  
キヤハ ♪  
by 店長 ”

キヤハ♪      じゃねええええええええええええええええ!!

“なんとなくそのまま 中世・近代の拷問法” を棚に戻す

あとで教えておこう

……ん？　これは？

「推理物か？」

適当に取り出した本、その裏表紙にはあらすじが書かれていた  
内容はこう

北の山荘で起きる連続殺人……

密室！　不可能！　完全犯罪！　あなたはこの謎を解くことが出来るのか！？

鬼才赤田桃子作“警部補・山口健太郎の事件日誌”最新作！！

「へえ、面白そうだな」

推理小説に興味はなかったけど、読んでみようかな  
そう思って本を表返すと……

“警部補・山口健太郎の事件日誌12

北風山荘完全犯罪　犯人は有馬”

サブタイトルでばらしちゃったよ！！　犯人！！

売れるの！？　ねえ、これ売れるの！？

そう心の中で突っ込みつつ、本を棚に戻す

「……ん？」

なんとなくのノリで隣の本に手が伸びる  
そこには……

“勇者以上魔王以上”

コロコロ先生ごめんなさあああああああああああああ  
あい！！！！！！

魔王と勇者と最強の青年とで繰り広げられる最凶ラブコメ！！  
突っ込みヘタレマンや寡黙な女戦士、変態魔族に虫等々……彼  
らは今日もばか騒ぎ！！

今、シリアル入ってんのになにこの宣伝！？

しかも、突っ込みヘタレマンとか変態魔族とか虫ってなんなんだ  
よ！！

そのまま、隣の本を取り出す

“Chicken Of Chicken” 影薄たちの憐れな唄  
”

ハイ、戻す

作者“柿田吾朗”ってふざけんな  
帰れ、クズが

さらに隣へ……

悪人を狩る破人——  
はこん

今日も破人の彼女たちは、大家に振り回されながら、悪人た  
ちを叩きのめす！

……………



其の漆拾参：語りゆく者と語らぬ書と（後書き）

コロコロ先生ごめんなさい……

「勇者以上魔王以上」ただいま小説家になろうで絶賛公開中です

其の漆拾肆：彼らで演じる硝子の姫・前編（前書き）

先週投稿できませんでした……すいません  
しかも、今テスト期間だからまた遅れるかも……



おい、　なんで後輩が先輩の姉の役なんだよ  
　　というか亜矢とやらの一人称は“わっち”なのかよ  
　　しかもレナート、　喜ぶな

「兄貴♪ 続き続き♪」

ハイハイ、　今日もシンデレラは3人に虐められていましたとさ

「先輩、　廊下掃除をしてくれませんか？」

待てや

もうちょっと、　命令口調で言えや

「え？　いや、　同じバスケット部の先輩にキツイことは……」

……OK、　じゃあ今回に限り青葉を地味助と思え

「……………」

「ここ！　汚れているぞ！！　ちゃんと掃除しろや！！」  
「なんで！？」

突っ込むな、　地味助に紗

お前らの出番はまだまだ先だろうが

「先輩、　コレ運んどいて」

……………雪緋とやらもう少し命令口調で

「え〜と……………」

ちゃっちゃっと運ばやこのクズが！　……………みたいな感じかね？」



『マジ勘弁してください』

……次進むぞ

そんなある日のこと、お城で舞踏会がありました  
シンデレラも行ったかったのですが、バールが怖くていけません  
でした

「なんでわっちらはそんな悪党になってるんだ!？」

シンデレラが悲しくて泣いていたそのとき……

「無視すんなあああああああああああああああ!！」

魔」……悪魔が現れました

「ヤフー」

「ハイ、ストロップ」

どうした小道具係の紗よ

「うん、ファイちゃんが魔女なのはいいけど、なんで普段の格  
好のままなのかなあああああああああああああ!？」  
シンデレラには悪魔なんて出てこないよおおおおおおおお  
おおおおおおお!？」

気にするな

「気にするわ」

悪魔は泣いているシンデレラにこう囁きました

「また無視！？」

「ウエッエッエッ……」

魂の半分であの姉貴たちを殺してやろうか？」

「ストーップ！！」

またかよ、 紗

こんどはなんだ？

「シンデレラに悪魔は出てこない！！」

しかも言ってることがめちゃくちゃ怖い！！

子供はこんな怖い話読まない！！」

ワガママなやつめ

「ワガママじゃない！！」

それに対しシンデレラはこう答えました

「だから無視すんなああああああああああああああああああああ！！」

「先輩落ち着いてほしいっす！！」

「……お断りします」

「へ？ なんで？」

『知らないうちに話が進んでる！？』

それにフィア、 話し方が元に戻ってるぞ

「……ムカつく奴は自分で叩きのめしてこそ意味がありますから」  
『怖っ！！』

なにげに青葉この役気に入ってる？ それとも地か？

「なんかこういう悪逆非道のキャラって演じてて楽しいですから」

あ、そう

とにかく、魔……間違えた悪魔はシンデレラにこう伝えました

「安心しろ、あの2人は私が叩きのめさ……だから、いいですって」……ちっ……」

「今舌打ちしたよな？」

「シテマセンガ？ ナニカ？」

「うつわ、わざとらしい」

えーと、翌日2人の怪死体が出て、シンデレラはガッツポーズ  
その後は平凡な人生を送りましたとさ

めでたしめでたし

「ストロップ！！」

あ？ まだなんか文句あんのかよ

「なに勝手に話を終わらせてるの！？

それにシンデレラはハッピーエンドでしょうが！ なに！？  
そのえげつない終わり方！！」

「雪緋たち知らないうちに殺されているしね」

「もうちよいいいい終わり方があるだろ！！」

あ？ 原作では最後2人の姉は失明するんだぞ？

『……え？ まじ？ 』

まじ

「……これ続くの？」

続く

「……………」

やってられつかああああああああああああああああああ！！！！！！  
「」

其の漆拾肆：彼らで演じる硝子の姫・前編（後書き）

余談ですが、最近再び企画を立てました

タイトルは『桜咲く木の下で』

企画のURLは<http://hp44.zero.jp/894/holy/>

興味ある方は参加ください

其の漆拾伍：彼らで演じる硝子の姫・後編（前書き）

…… 本当におくれてすいません……

スランプだったり、 企画小説を書いたり……

早い話が今まで書く余裕がなかったんです……

ごめんなさい……

## 其の漆拾伍：彼らで演じる硝子の姫・後編

後編だ

司会は前編と同じく、 凰輝が努めさせてもらう

さてと、 なおもしつこく誘惑する悪魔に拳骨を2、 3発食らわし、 シンデレラは願いを伝えた

「……お城へ行ってみたいんで……連れてつてくれますか？」  
「えゝ……めんど、 分かった！ 分かったから！ そのバールの  
ようなものを下ろしてくれ！！」

悪魔を脅しながら、 じつと見詰め続けるシンデレラ

「とりあえず……とうりやあああああああああああああ  
ああ……！！」

変な奇声を上げながら、 悪魔はいつの間にか持っていた（紗が前  
編、 後編のあいだに持たせた）杖を振ると、 黒煙と共に……  
… 黒煙？

「……………へ？」  
「……………あれ？」  
「どうなってるんだ？」

他の面々も意外だったのだろう、 次々に疑問の声を上げる

「凰輝さああああああああああああああん！ どうし





かばちやの馬車と馬の着ぐるみを着たバカを呼び出して、悪魔は乗るように進める

「さあ、乗れ！！」

「イヤです」

あっさり断るシンデレラ

でも、話が進まないから素直に乗ってくれ

「イヤです」

交渉は俺からフィアに変わる

メンドイからな、こういうのは

「そう言わずに！」

「ムリです」

「もう一声！」

「イヤです」

「550円！」

「630円」

「590円！」

「なんの話をしているの！？」

突っ込むなよ紗

この後、どうなるかが楽しみだったのに

「話が進まないんじゃない？」

細かいことは気にするな

「さっきと言ってることが全然別じゃん!!」

気にするな

「気にするわ……って、これさっきと同じ展開じゃん！」

それも気にするな

「……………」

ハイ、次行こー!!」

開き直ったな

「突っ込むのに疲れたの」

あっそ

とりあえず、シンデレラはかぼちゃの馬車に乗り込み

「だからイヤです」

……………」

negotiation time (交渉タイム)」

……しばらくオードーの○日のダンスを想像しながらお待ちくだ

さい（わけわかんねえ）――

「ワア、ステキナバシャネ

コレニノツテオシロニイケルノネ」

「……ねえ、なんで片言なの？」

「なんとなくです」

拷問で無理矢理言わせたって思った奴  
外れだ

スチルを生け贄に成功した

「私ですか！？ 一体なんて言っただんですか！？」

無論、  
チヨメチヨメ  
××だ

チヨメチヨメ  
「××ってなんなんですか！？」

着せ替え人形にしていよいよって言っただよ

チヨメチヨメ  
「××つける必要あつたんですか！？」

気にするな

「気にします」

気にするな

「気になります」



あい、　ちょっとタンマ

オイコラ影薄

てめえは王子役じゃねえだろが  
てめえは“背景その1”だろうが  
なに目立とうとしてんだオラ

「え？　いや、　俺はそう聞いた」

嘘ついてんじゃねえぞ？　ああ？

「……すみません……」

「先輩、　元々の王子役ってダレだったんっすか？」

え？　地味介

「……俺？」

聞いてなかったのか？

「いや……影薄が“お前は“大道具係”だ”って言ってたから……」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……………」  
「……………」

……………

「……………俺ちよつと便所に……………」

Freeze♪（訳・動くなクスが♪）

「え？　ちよつまっ……………！！」

Black dragon♪（訳・黒龍♪）

「応！！（久々の出番来たああああああああああああああああああああああ！！）」

「……………ちよっ！　待つて！　10円！　10円あげるから！！」

Ya—ha—！！！！

Queen's chainsaw！！（訳・女王陛下の鎖鋸！！）

「ア……………！！！！」

†王子役（一応）が死亡したため（死んでません）今回の話はここまでとさせていただきます

期待してくれた皆様、　本当に申し訳ございませんでした　b



其の漆拾伍：彼らで演じる硝子の姫・後編（後書き）

なんやかんや書いときながら、 次回も番外編になる予定

其の漆拾陸：彼らが繰り出す数多の奥義・壱（前書き）

ほっておいてすみませんでした。  
ようやく更新再開です。

がんばります。

## 其の漆拾陸：彼らが繰り出す数多の奥義・壱

はい、 どうも

作者の聖なる写真です

読者の皆様、 今回はちょっとした番外編

名付けて

“今までの技を振り返りつつ、 新しい技を何個か出そうぜ！”  
のコーナーです

凰輝「そのまんますぎるだろ」

まず今回は我らが主人公！ 西上凰輝から！

紗「無視！？」

あ、 その前に古代武術家の基本技を紹介します

凰輝「行き当たりばったりがよく分かるな」

黙らっしゃい

く古代武術基本技く

・ 氣界きかい

氣による結界を張る

防御のためではなく、

探知によるもので、

紗がよく使う

・ 水歩すいほ

水の上に氣を張ることにより、

水の上に浮く技法

・空歩くつぽ

氣を使い、 空氣を蹴り上げることで宙に浮く技法  
水歩よりも難易度が高い

次こそ主人公、 西上凰輝の技！ “四神流”と“暗黒剣技”の2  
つがあります

く西上凰輝く

十四神流

・散壁系さんへき

相手の“氣”を打ち消す氣を纏い、 攻撃する

古代武術家や神々との戦闘では重宝するが、 一般人相手では  
大して意味はない

・桜花系おうか

攻撃と共に相手を吹き飛ばす

実際のところそのぶつ飛び具合と威力は比例しているが、 四  
神流の中では高威力ではない

・滅鬼系めつき

四神流基本技の中で最高威力を誇る

ただ、 破壊に重点を置いているため、 凰輝が全力で放てば  
地球は粉々に

・衝霸系しょうは

遠距離技、 氣を直接ぶつけて攻撃するため、 タメが早く攻  
撃速度も早い、 無効化はされやすい

・斬撃系ざんげき

でも、 凰輝が繰り出す衝霸系は稲妻並みに早いので関係ない  
氣を鋭く研ぎ澄まし、 刃のようにして斬りつける  
モノを切ったりするのによく使う  
戦闘でも役に立つ

・連つらね

片手でラッシュを叩き込む

・乱みだれ

両手でラッシュを叩き込む

・貫つらぬき

衝撃波で敵の装甲等を通して攻撃する

装甲等は破壊できない

だが、衝覇系だと装甲等を破壊することができる

・重かさね

同じ場所に2回連続で攻撃する

・改あらため

一点に集中して、攻撃する

攻撃範囲は狭くなるが攻撃力は何倍にもなる

・双ふたえ

いわゆるワンツー

・落おとし

上から下に振り落とすだけ……なのだが普通に威力が倍になっ

ている

・闘氣系とうき

・纏まと

朱雀（炎）、青龍（水、氷）、白虎（雷）、玄武（土）

麒麟（風）の氣を纏う

闘氣を纏ったまま攻撃も出来る

ちなみにまだ2つの属性があるらしい

・放はなち

闘氣をそのまま放つ

単純だが、攻撃力は凄まじい

・封ふつじ

相手の体に自らの闘氣を封じ込め、後の解ときで解放、大ダメ

ージを与える

・解とき

封で体内に封じ込めた闘氣を一気に爆発させる技

封と解は表裏一体の技である

・爆ばく

纏った闘氣を一気に爆発させる全方位技

・攻撃力も高い

・零ゼロ

零距离射程で直接闘氣を叩きつける荒業

破壊力が異常なまでに高く、 凰輝が放てば軽い一撃のつもり

でも、 衝撃で10人の体が消える

・鉄鋼防風てつこうぼうふう

体に氣を充満させ、 硬質化する技

槍の雨が降るうとも、 ミサイルが飛んでこようとも、 隕石  
が直撃しようとも平氣らしい

また、 硬質化した氣を外に張り巡らせる“周”まわりというバース

ヨンもある

・分裂氣体ぶんれつきたい

氣を高密度に練り上げて、 分身を造り出す大技

分身がやられても、 本人にはなんのダメージも受けない

また、 分身を別の形に練り上げることも可能  
かつすいなみわたり

・割水波渡

氣をサーフィンするように練り固めることによって、 水上で

の素早い動きを可能にした技

ぶっちゃけ、 凰輝は上記の水歩でも十分速いのだが、 ノリ

と勢いでやっているらしい

・氣体錬成きたいれんせい

氣を練り上げてキズを塞ぐ回復技

塞ぐといってもケガが治ったわけではないので、 油断は禁物

生命エネルギーも一時的に補充できる

- ・操氣命弾そうきめいたん

氣を攻撃ではなく、回復用に放つ四神流唯一の仲間用の技

効果は氣体鍊成と同じ

- ・境界裂波きょうかいれつぱ

空間を切り裂き、世界を繋ぐ荒業

空間の座標（いわゆる場所）が分からないと使えない

#### †暗黒劍技あんこくけんぎ

- ・女王陛下の鎖鋸クイーンズチェーンソー

暗黒のオーラを黒龍やな纏わせ、チェーンソーのように回転させる

威力も高い、暗黒劍技の基本技

砲という遠距離技もある

- ・血塗れの双頭蛇ブラッディツインスネイク

地面に黒龍を突き刺し、そこから暗黒の氣を流し込むことによって、地面から二股の紅い斬撃を飛ばす技  
形状が蛇のようでもあり、相手を追尾することも出来る有能な技

実は、250mまでなら空へも追尾できる

- ・漆黒の無音なる雨ブラックサイレントレイン

闇の氣を空に放ち、無数に分裂させて範囲内にいるもの全てを攻撃する技

早い話が手当たり次第に叩きのめす

- ・闇に墜ちた獅子王ダークネスコンブルシヨンレオキング

暗黒の氣を身に纏い、相手に突進する技

- ・反射する紅い鏡リフレクシヨンクリムゾンミラー

暗黒の氣を楯のように展開し、相手の攻撃を全て反射する技  
打撃系は衝撃を反射する（簡単に言えば、鋼を殴るようなモノ）

こんなものか

紗「多っ！！」

凰輝「今回は俺だけか？」

ん、まあね

あまりにも技の説明とかが長くて……

凰輝「だからといって、遅れた言い訳にはならんぞ」

うつ……！！

……次回は合体技をやってみたいです！

紗「なんか最近番外編が多くない？」

凰輝「ネタが尽きてきたんだろ」

悔しいです！

凰輝「知らないです！」

紗「……（なにやってんだこいつら……）」

其の漆拾陸：彼らが繰り出す数多の奥義・壱（後書き）

次も番外編になる予定。

……別に、    ネタが浮かばないとかじゃないんだからね！

凰輝「浮かばないんだな」

……ハイ。

其の漆拾漆：悩みし彼らが望む未来とは（前書き）

2ヶ月以上も放置してました。

本当にすいません。

また、読んでくれたら嬉しいです（：ω：）

## 其の漆拾漆：悩みし彼らが望む未来とは

安物のスピーカーから盛大にチャイムが鳴り響く。

「はい、じゃあ名前を確認して後ろから回収して」

教卓にいた教師がそう言うと、1番後ろの人が立ち上がりテスト用紙を集めていく。

「終わったあゝ！」

俺、篠田恭介は教師が教室を出ていくと同時に大きく背伸びをした。

周りを見渡せば頭を抱えている奴、俺と同じく背伸びをしている奴、ルンルン気分の奴、色々いる。

「……さて、部活にでも行きましようかね。」

「おゝ、頑張ってこいよ」

青葉がせっせと準備をしているなか、鳳輝はのんびりと手を降りながらアクビをする。

そんななか、紗さんがふと疑問を口にする。

「そういえばさ……みんなって将来のこと考えてる？」

「……………あ？」

ついつい眠たげな声で答えてしまう。

彼女の言葉に青葉は立ち止まって振り返り、鳳輝はアクビが途中

で止まってしまう。

そして、 紗さんに裏拳。 この外道。

「ふみやつ！」

“ふみやつ！” って紗さん……ちょっと萌えたよこんちきしょう。

「……変態ですね……」

青葉、 思考を読むな。

……でも……将来のことかあ……

“今”が楽しすぎて、 いままで考えもしなかったが、 いつかは  
こいつらとも別れるんだよね……

「……私はこのまま進学……ですかね。 ……政治学を学んでみた  
いんです。」

「私は考古学。 恭介君は？」

「俺は……教師になつてみたいな。」

『………』

え？ なに？ この空白。

こら青葉、 まるでキチガイを見るような目で見るな。

「……あ、 凰輝は？」

紗さんが凰輝に話をする。

凰輝は軽くアクビをしてから答える。

「俺は異世界とかを旅してみたいな。」

『……………』

「……なんだよ、この空白は……」

「いや……鳳輝も意外に夢見る少年みたいなことを言うなあって……」

……」

「シーネ」

鳳輝のマツハパンチをくらい、俺は大きく吹っ飛んだ。  
いてえ。

「まあ、世界は広そうだから………少しくらい“別”の世界を知るのも悪くはないだろ？」

そう言った鳳輝の目は……

夢見る少年のそれだった。

「俺は弁護士に」 「そういえば……恭介君はなんで教師になろうと思ったの？」 「……」

「……やはり、教える教科は体育ですか……？」

なんかさっき変な雑音が聞こえた気もするが、まあ、気のせいだろう。

「まあ……ほら、最近って“学級崩壊”とか、“少年犯罪”とかが話題じゃねえか？」

だからさ、俺の力でそういうのを減らしてみたいなって。 後

の半分は、ただ単に子供が好きだからだな。

そもそも凰輝はなんで別世界を旅してみたいと思ったんだ？」

ちよつと長文になつちまつたが、言いたいことをさつさと言わせてもらつた。

自分の力は微力だということは分かっている。

だけど、だからといってそこで諦めてしまつてはその微力すら無駄になる。

それに、今は例え微力でも、数年後、数十年後にはそんな微力が強大な力になるかもしれない。

どこかの偉い人が言っていた……気がする。

凰輝は軽くため息をつくとき、天井を見上げながら言った。

「なんとなく……だな。

様々な世界で俺の力がどこまで及ぶか試してみたいし、知らないことをどこまでも追求してみたい……まあ、そんなもんだ。

可笑しかったら笑えよ。顔面がひしゃげるほど強く殴つてやるから。」

「……………」

笑えねえよ。ちよつとでも笑つたら即、整形病院行きじゃねえか。

いや、墓場が先か？

「俺がなぜ弁護士になら」私は、ただ単に歴史が……というより昔やって来たことに興味があるからかな。なんでそういうことをしたのか……気にならない？」……………」

「へ……言われれば確かになあ……………」



[illegible]

「ごめん！ 用事を思い出したからまた今度ね！ 恭介君！」

そう言いながら帰る紗さん。影薄を呼ばない辺りちよつと鬼畜。さて、俺も帰るか。

[illegible]

「重松先生、このバカが先生のこと“ザコだ”とか言っていましたよ」

「ああ！？」

久々登場重松先生。

「ええ度胸やなあ……柿田あ……！？」

「え？　ちょ、まつ……！」

「エナメルスパイク」！！

「アツ——！！」

重松先生にぼこぼこにされている影薄を尻目に俺も部活に向かう。

そういえば……

影<sup>アイツ</sup>薄の名前、  
“柿田”だったんだなあ……  
完全に忘れてたぜ……

其の漆拾漆：悩みし彼らが望む未来とは（後書き）

最近、      ネタが切れてきたので、      毎週更新はちょっと無理かも……

其の漆拾捌：暑き夏と蘇る惨劇（前書き）

2か月以上も放置してました……  
いや、もう、なにやってんだろ俺……

其の漆拾捌：暑き夏と蘇る惨劇

「じつとお~~~~」……」

「……なんだよ、それ」

「今の状況です……」

「それなら“ジメジメ~~~~”って方がよくないか？」

……あ、ちいつす。

今回の司会はアタシ、ファイアが務めるぞ。

今日はとても暑い。

アタシたちは1階のリビングでだれている。

凰輝と琥鈴は2階にある自分たちの部屋にいる。

きっと、クーラーがきいてんだらうなあ……くそ。

「おい、みんなあ~~~~」

お、レナートだ。

手になにかを持ってる。

なに持ってたんだ？

「物置漁ったら見つけた~~~~」扇風機~~~~」

「レナートナイス！」

思わず親指を立てるアタシ。

後ろを見れば、雷華と同じポーズをしていた。

神が悪魔を褒めるのはどうかと思うがな。

「でも……どうするんですか？」

口を開いたのは、雷華だ。

雷華の言うとうり、奇妙なことにリビングにコンセントの類いはない。

……しかし、アタシにはある“秘策”があつた……！

だが、アタシにはその“秘策”を実行することは不可能……

この“秘策”が出来るのはただ1人……！！

「雷華！ 頼んだ！！」

「……はい？」

アタシの声に、雷華は状況を理解してなさそうな声を出した。  
まあ、説明してないし当然といえば当然か。

「あゝビミョー」

無事、アタシの“秘策”は成功したのだが……

まあ、このジメジメ……いや、ムシムシとした空気じゃあムシムシとした風しか来ないよなあ……

くそ。

「あの……」

「確かに少し微妙ですね……」

「うん、そだね……」

「もしも……」

アタシたちは雷華の声を軽く無視して首振り機能付きの扇風機の風を浴びる。

「だああああああああああああああああ！！」

マジギレしながら扇風機のコンセントを放り投げる雷華。

「なんで！ 私が！ 扇風機の！ コンセントの役を！ しなくちや！ いけないんですかああああああああああああああああああ！！」

「それは雷華。 お前が“雷神”だからだ」

「納得いきませええええええええええええええええええええん！！」

ギャーギャー喚く雷華。

その間、 扇風機は止まっている。

そう、 もう分かっただろう。

アタシの“秘策”とは雷華に電力供給させることだ。

「ムキー！ そもそも私が電気を作ってるんですから私にも風を受ける権利はありますよね！？ むしろ私だけ受けるべきですよね！  
？」

そう言いながら扇風機に乗っかる雷華。

「あつ！ てめえ！ 汚ねえぞ！！」

そう言いながらアタシも扇風機に乗っかる。

キーキーと猿みたいに喚きあいながら、 扇風機の取り合いをするアタシたち。

ギシギシと奇妙な音が扇風機からしだす。

「……………あの……………一旦離れt」

スチルの声を聞く前に、 惨劇が起きた。

バキッ！ ……という音を立てて、 扇風機が首のところから垂直にへし折れる。

再びその扇風機が動くことは、 なかった。

……………

「……………ら・い・か……………？」

「ちよっ！ ちが……………！！ フィアが原因じゃないですか！！」

「お前がワガママ言うからだろ！」

「そもそも、ファイアが私に扇風機の役をやらすからじゃ！」  
「先に扇風機に乗ったのお前だろ！」

“醜い争い”

そう後に言われるようなくそくだらない争いは、  
こんなくそくだらない理由で始まつたりする。

フレア・スパイク

「炎弾釘」！」

「ホワイトサンダー」！」

炎の釘と白い雷がぶつかり合う。

広い部屋に未熟だか激しい神力が炸裂する。

第一撃がぶつかり合ったあと、アタシと雷華は片手に神力を進らせつつ、互いを威嚇する。

「……なにしてんだ？」

いきなり声をかけられ、アタシたちは思わず神力をそのまま声のする方へぶっぱなす。

パンツという乾いた音が響くと、そこには、  
鳳輝がマジギレしながらアタシたち以上の氣を進らせる。

「いい度胸だなあああああああああああああ！？」

『……………ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい……………』

戦闘態勢から一転。即土下座するアタシたち。  
いや、だって、  
鳳輝がマジギレしてんだぜ？

死ぬって死ぬるって。

結局、必死に土下座をしたお陰か、鳳輝は拳骨一発で許してくれた。

……痛かったけどな。

「ふうん……ぶっちゃけどうでもいいことだな」  
『……』

いや、その通りだけどな……  
でもこの暑さはどうにかならないのか……

「クーラーつけりゃあいいじゃねえか」  
『………はい？』

鳳輝のその言葉を理解できないアタシたち。  
クーラーなんて、一階にあったのか？ 周りを見渡してもそれらしきものはないけど……

「気づかなかったのか？ アレだぞ」

そう言うと鳳輝はテーブルの上にあったりモコンを取ると天井にある換気扇らしきものに向けてなにか操作をしだす。

ピッ！ という高い音がしたかと思うと換気扇らしきものから冷気が降り注ぐ。

『……………』

き、  
気まずい……

さて、 凰輝たちがそんなアホなことをしている間に、 玉藻町――中央玉藻ではある事件が起こっていた。

「警部！ お疲れ様です！」

そう言いながら若い刑事は敬礼する。  
警部と呼ばれた40代半ばのこの男。

ややくたびれた感じはするが、 こう見えても優秀な刑事なのだ。

「で？ 被害者は？」

「……あの……それが……」

「？」

ビニールシートにくるまれたモノ。

それだけで殺人事件だということを物語っている。

しかし、警部と呼ばれた男はなんの躊躇いもなくシートをひっぺがす。

そして、顔を歪ませる。

「コイツは……！」

バラバラになった死体。

もはや、男か女かすら分からない——かろうじて人間と分かる程度に切り刻まれたモノ。

「……こんなグロイの見たことないですよ……！」

若い刑事が口元を押さえながら呟く。

「……武内警部……？」

武内と呼ばれた男。

彼はこの死体に見覚えがあった。

いや、この殺し方に見覚えがあると言った方が正確か。

そう、それは10年前……

ここ、玉藻町を震撼させた連続殺人事件。

「生きてやがったのか……！」  
「チョッパーマン切り刻む者」！」

武内はそう叫ぶと復讐の焰を再び静かに燃やした……。

其の漆拾捌：暑き夏と蘇る惨劇（後書き）

最後、 シリアスにしときながらこの先何も考えてないという……

## お詫びとお知らせ

どうも、 作者の聖なる写真です。

いつも本小説“神様と私”をご覧いただきまして誠にありがとうございます。

しかしながら、 本小説はこれで打ち切りとさせていただきます。

理由は多々ありますが、 まずはこの小説を書くと思った経緯からお話しさせていただきます。

まず、 このサイトに登録してからちょうど3、 4ヶ月後の中学3年の春。

ふと、 こんなアイデアが浮かびました。

「そうだ。 神様とか悪魔とかがいじめられる話って面白くねえか？」

そんなくだらない理由から始めたこの小説。 気がつけば1年半近くも共に過ごしてきました。

しかし、 小説を進めていく中で、

「あれ？ こいつこんな話し方だっけ？」

とか、

「やべえ……なんでこんな設定作っただろう……」

など、 作者自身も変に思うようになったうえに

「これ、 ほかの小説ぱくつてねえか？」

と言われるようになりました。

作者自身も更新が遅くなり、 ネタも尽きてきました。

よって、 これで打ち切りとさせていただきます。

しかし、 彼らをあつさり捨てるなど1年半近く過ごしてきた作者には考えられません。

よって、 再び別の小説にリメイクしたいと思います。（そうい

うことを考えていたのも打ち切りの原因です。）

ぱくつてると思われる部分を抜いたり、 キャラを確定させたり抜いたり……

少々時間がかかりますが、 また新たな“神様と私”を投稿いたしますら、

またのご愛読をお願いします。

2009年9月10日

## 聖なる写真

なお、新しく更新した際はこの旧“神様と私”を消させてもらいます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9512d/>

---

神様と私

2010年10月8日14時22分発行